

関東農村の荒廃と尊徳仕法

— 谷田部落仕法を事例に —

大 藤 修

はじめに

一 農村荒廃と藩財政の逼迫

(一) 谷田部落領の概観

(二) 農村荒廃の概況

(三) 藩財政の逼迫

四 領主階級の農村荒廃観と農民教化のイデオロギ

二 農民と心学運動・尊徳仕法

(一) 荒村下の農民の思想形成と農事改良の特質

(二) 心学運動の展開と衰退

(三) 二宮尊徳の思想と仕法の原理

三 谷田部落の尊徳仕法の導入と経緯

(一) 尊徳への仕法の依頼

(二) 藩財政の「分度」の設定と仕法趣旨の教諭

(三) 仕法の経緯

四 仕法の内容と結末

(一) 藩財政再建仕法

(二) 農村復興仕法

I 天保六—一三年の仕法

1 仕法の資財

2 仕法の内容

I 天保一四年以降の仕法

(三) 尊徳と谷田部落との確執
おわりに

はじめに

幕藩制解体過程の諸矛盾は、関東農村においては、「荒廃」として表出した。近世中期以降の農村における商品生産・流通の発展は、一部の農民を富裕化させる一方では、多くの貧窮農民を生み出したことは、幕藩制的な分業編成・市場構造に規定された普遍的な農民層分解のあり方であった。それが関東農村においては「荒廃」として現象したのは、土地生産力が低く再生産基盤が脆弱な上に、過重な貢租収奪にさらされていた小農民経営が、近世中期以降商品貨幣経済に巻き込まれ、前期的資本の収奪をも受けるようになったことにより、没落を余儀なくされ、あるいは死絶し、あるいは欠落して、農村人口の減少↓手余り荒地の発生を来したことによる⁽¹⁾。殊に一八世紀半ば以降、打ち続く自然災害に見舞われたことにより、農村の荒廃化は一層激しさを増していった。

農村の荒廃によって貢租収納量は大幅に減少し、領主財政は深刻な危機に陥った。一八世紀後半以降、幕府および諸藩・旗本は、農村復興・財政再建の方途を模索し、試行していった。一方、農民にあっては、農村の荒廃は、何よりも自らの生産・生活の場である「家」と「村」の崩壊の危機として自覚された。その再建を図るために、彼らは、自らの人間としての主体性を確立し、新たな生活・農業経営の原理・様式を探索すべき課題に直面した。そこに、膨大な自律的エネルギーが発揮され、近代へ向けての人間類型、農業技術の特質が形成されることになった。また、こうした農民の課題に即し、かつ領主の政策とも結び付きつつ、農村の更生を図る様々な社会運動が展開した。

我々は、荒村下の農民の主体的な諸営為、および種々の農村更生運動の意義を、単に保守的か革新的かという観点から裁断するのではなく、そこに内在している諸契機にまで立ち入って深く考察せねばならない。

農村更生運動の中で、展開の範囲、社会的影響力からみて、二大運動としてあげられるのは、心学運動と報徳運動である。時期的には、両者は継起的に展開している。すなわち、心学運動は寛政期から文政期にかけて関東地方にも広く展開したが、天保期の凶作・飢饉によって荒廃が深刻化した現実の前に、その精神主義的な教化運動の限界が明らかとなり、それに代わって、二宮尊徳の提唱した「報徳」思想に基づく「家」「村」の再興仕法が幕末にかけて急速に広まった。さらに明治以降、全国各地に報徳社が設立され、広汎な民衆運動として発展していった。

報徳運動は、幕藩制解体―近代化過程における政治・社会・思想（精神を含む）問題を考える上で、等閑に付すべからざる位置を占めているにもかかわらず、二宮尊徳および報徳運動に関する歴史学の分野での研究蓄積は、量・質ともに決して十分なものではない。⁽³⁾近年ようやく、社会経済史のあるいは幕藩政治史の観点から、各地で実施された仕法についての個別研究がなされるようになったが、⁽⁴⁾概して基調論に止まっているものが多く、しかも仕法の基礎となっている尊徳の思想を内在的に十分に考察して、その意図したところを把握しないまま、単に仕法が主に領主の行政の一環として実施されている面のみをとらえて、きわめて機械的にその思想・仕法の性格を封建的・反動的なものと規定してしまう傾向が目につく。

単なる性格規定論に終始していたのでは、「報徳」という独自の思想、それに基づく仕法を生み出し、それが広く受容され展開していった、農村荒廃期の時代的特質―政治・社会状況および精神状況―に深くアプローチすることができない。報徳仕法のみならず、この期の種々の農村更生運動はすべて、荒廃に瀕している農村を如何にしたら復興できるかという、きわめて現実的な切迫した課題に取り組んだものである以上、所与の歴史的条件―幕藩体制を前提に運動を進めざるを得ないのは当然であり、したがって単なる性格規定論の立場からすれば、体制的―封建的の一言で片付けられてしまわざるを得ないであろう。

だが、それだけでは、きわめて図式的な歴史理解に止まる。我々は、その思想・運動を内在的に深く考察して、それが当該の時代状況に対して提起しているところの意味を理解し、さらにそこに孕まれている新たな未発の契機をも把握した上で、それが現実の社会的諸関係の中で客観的にどのような機能を果たしたか、また如何なる矛盾に直面せざるを得なかったか、を考えると、いう手順を踏む必要があろう。

本稿は谷田部藩領の報徳仕法の事例分析を試みるものであるが、その前に、尊徳の思想について、私なりの観点から少しく考察を加えておきたい。また、彼の思想・仕法の性格・特質を考えるための前提作業として、農村荒廃期の領主階級の農民教化のイデオロギー、農民の思想形成の動向、報徳仕法に先行する心学運動等についても検討しておく。

△註▽

(1) 関東農村の荒廃に関する論稿は数多いが、中でも、関東農村における商品生産・流通の展開と荒廃化の進行のメカニズムを、地域市場の構造的特質の解明を通じて統一的に把握し、ブルジョア的発展Ⅱ両極分解か貧窮分解かという二者択一論的理解(前者では木戸田四郎氏「明治維新の農業構造」、『維新黎明期の豪農層』、後者では芝原拓自氏「明治維新の権力基盤」を止揚せんとする、長倉保氏と須永昭氏の研究が注目される。長倉氏「関東農村の荒廃と豪農の問題」、『茨城県史研究』第一六号)。「北関東畑作農村における農民層の分化と分業展開の様相」(『商経論叢』第七卷第四号)、須永氏「近世後期北関東の農業構造」(『関東近世史研究』第八号)、「幕末

維新期の農業構造」(津田秀夫氏編「近世国家の解体と近代」・「天保期の農村」(講座日本近世史第六卷「天保期の政治と社会」)等。

(2) 幕藩制解体—近代化の過程における民衆の主体性形成のダイナミズムについては、安丸良夫氏「日本の近代化と民衆思想」第一・二章で考察されており、通俗道德的自己規律論が提起されている。

(3) 但し、歴史学の分野に限定しなければ、尊徳に関する論稿は、明治以来きわめて数多く発表されている(「二宮尊徳研究文獻目録」、内山稔氏「二宮尊徳研究の手引き」)。「二宮尊徳と現代」所収を参照。その多くは、報徳社運動の実践家や哲学・倫理学・教育史の研究者の手

になるもので、尊徳の伝記的研究、あるいは人間論的・哲学的研究に主眼が置かれている。こうした観点からの研究としては、佐々井信太郎氏と下程勇吉氏が多大な業績をあげられている。佐々井氏「二宮尊徳研究」・「二宮尊徳の体験と思想」・「二宮尊徳伝」、下程氏「天道と人道」・「二宮尊徳の人間学的研究」等。歴史学の分野では尊徳が等閑視されて来たのは、戦前、少年時代の金次郎が帝国小臣民の理想像として国家によって喧伝されたことに対する心情的な反発にも基因していたようである。

戦後、歴史学の分野における尊徳についてのまとまった著書としては、僅かに奈良本辰也氏の「二宮尊徳」と、守田志郎氏の「二宮尊徳」しか存しないのが現状である。しかも、両書とも啓蒙書として概論されたもので、そこには歴史家ならではの知見も散見するものの、尊徳の人間像への肉迫度という点では、佐々井氏や下程氏の著書に比べて稀薄な感否めない。近年では、専ら幕藩制解体期における尊徳仕法の意義について論じられるようになっていくが、尊徳が何よりも理論と実践の一致を重視した人物である以上、仕法の基礎となっている思想、さらには彼の人間像についても、歴史学の分野でも本格的に研究がなされる必要がある。

- (4) 上杉允彦氏「報徳思想の成立―桜町仕法を中心として―」(「栃木県史研究」第一四号)・「幕政期の報徳仕法」(「立正史学」第四三三号)、長倉保氏「烏山藩における文

関東農村の荒廃と尊徳仕法(大藤)

政・天保改革と報徳仕法の位置」(「日本歴史」第三三八号)・「小田原藩における報徳仕法について」(北島正元氏編「幕藩制国家解体過程の研究」)、大江よしみ氏「天保期小田原藩領の農村の動向―金井嶋村の報徳仕法―」(「小田原地方史」第一号)、内田清氏「天保期の小田原藩領中里村と尊徳仕法」(同前第三号)、川俣英一氏「幕末の農村計画―二宮尊徳の青木村仕法について―」(茨城県田園都市協会発行)、竹中端子氏「天保改革の片鱗―下館藩の場合―」(「お茶の水史学」第四号)、林玲子氏「下館藩における尊徳趣法の背景」(「茨城県史研究」第六号)、河内八郎氏「花田村の尊徳仕法」(一)・(二)「関城町の歴史」第一・二号)、高橋敏氏「打毀しと代官」(「地方史研究」第一一九号、大磯仕法についても述べてある)、大館右喜氏「天保改革と日光神領」(「埼玉県立豊岡高校紀要」第二号)、なお、日光神領の仕法については、「日光市史」中巻と「いまいち市史」通史編別編Iが詳しく、特に後者は報徳仕法の特集で、現段階では、それについての最もよくまとまった著書である(河内八郎氏・森豊氏執筆)。岩崎敏雄氏「二宮尊徳仕法の研究」は、相馬藩の仕法について概論したもの。本稿の分析対象である谷田部藩の仕法については、佐々井信太郎氏「二宮尊徳伝」、秋山高志氏「谷田部藩領安政四年積穀騷動」(植田敏雄氏編「茨城百姓一揆」)、大木茂氏「茂木の歴史」(昭和五十四年度宇都宮大学内地留学報告書)で

概論されており、ここでは、これらを参照しつつその実態を少しく具体的に考察したい。

なお、明治以降における報徳社運動の拠点となった遠州地方での幕末・明治初年の仕法については、海野福寿

氏「報徳仕法の展開」(中村雄二郎・木村礎氏編「村落・報徳・地主制」)に詳しい。それ以後の報徳社運動に関する論稿は、ここでは省略する。

一 農村荒廃と藩財政の逼迫

(一) 谷田部藩領の概観

谷田部藩主細川家は、肥後国熊本藩主細川家の分家である。慶長一五年、細川興元(熊本藩祖忠興の弟)が下野国芳賀郡茂木庄(現、栃木県芳賀郡茂木町)に二五ヶ村一〇、〇五四石を給せられて藩祖となり、元和二年には、大坂夏の陣の功により常陸国筑波郡・河内郡谷田部郷(現、茨城県筑波郡谷田部町)に二三ヶ村六、二〇〇余石の加増を受け、計一六、二〇〇余石の大名となった。はじめ居所は茂木に置いたが、元和四年に参勤交代の便がよいことあって谷田部に移した。谷田部と茂木には、それぞれ陣屋が置かれ、町奉行・代官等の諸役人が詰め、江戸屋敷と連絡をとりながら領内の統治に当たっていた。⁽¹⁾

「御領知目録」⁽²⁾に記載されている領知高と村数は、表1の如くである。表2は谷田部藩領の村名と村高を示したもので、このうちA群は元禄一二—安政七年の各領知目録に記載されている村である。貞享元年以前の目録と元禄一二—年以降の目録とで村名に異動があるのは筑波郡のみで、前者には真瀬村が存していたが、後者にはみえず、代わりに高田・下川原・百家の三ヶ村が新たに加わっている。

表 1 谷田部藩細川氏の領知高

年次		寛文4年	貞享元年	元禄12年	宝暦11年	天保10年	安政7年
所在地	村数	25ヶ村	25	25	25	25	25
	石高	10,054.610	10,054.610	10,054.610	10,054.610	10,054.610	10,054.610
下野国 芳賀郡	村数	15	15	15	15	15	15
	石高	3,131.970	3,131.970	3,131.970	3,131.970	3,131.970	3,131.970
常陸国 河内郡	村数	8	8	10	10	10	10
	石高	3,133.240	3,133.240	2,795.203	2,795.203	2,795.203	2,795.203
常陸国 筑波郡	村数			1	1	1	1
	石高			712.306	712.306	712.306	712.306
常陸国 新治郡	村数						
	石高						
計	村数	48	48	51	51	51	51
	石高(a)	16,319.820	16,319.820	16,694.089	16,694.089	16,694.089	16,694.089
うち込高(b)		54.610	54.610	374.269	374.269	374.269	374.269
a-b(表高)		16,265.210	16,265.210	16,319.820	16,319.820	16,319.820	16,319.820
外改出新田高(c)				11,230.510	11,230.510	11,230.510	11,230.510
a+c(内高)				27,924.599	27,924.599	27,924.599	27,924.599

(註)・各年次の「御領知目録」(貞享元年の分は「谷田部の歴史」72頁所載。他は谷田部藩細川家文書)により作成。

・石高の勾以下は切捨。

領知高で注目されるのは、元禄一二年の目録から、表高の他に「込高」(分限外の高)と共に「改出新田高」一一、二三〇石余が付記されるようになっていことである。元禄一二年以降の表高は一六、三一九石余で一定しているが、近世初期の新田開発盛行の結果、内高は二八、〇〇〇石近くにも達している。芳賀郡小深村を例にとると、文禄三年の検地帳では四〇七石余であったのが、万治三年の検地帳では五四六石余に増加している。これは歩詰の結果にもよるが、主たる要因は新田開発であった。元禄四年の検地帳では、さらに五七三石余に増加している。元禄郷帳では小深村の高は四〇八石余となっており(表2-2)、この郷帳の村高には新田分は加えられていないことが判明する。

天保郷帳では各村とも元禄郷帳に比べ高が増大しており、新田分を加えた村高であることが分かるが、現実には元禄以降新田開発はあまり行なわ

表 2-1 谷田部落谷田部領の村高

郡名	区分	年次 村名	元禄15年	天保5年	天保5年	明治元年
河内郡	A	石			石	石
		房内村	38,930	×	94,873	94,873
		若栗村	354,420	×	466,650	466,650
		大井村	290,420	×	421,465	421,465
		上横場村	240,750	×	766,927	766,927
		下横場村	125,550	×	165,681	165,681
		南中妻村	146,340		292,353	292,354
		北中妻村	93,720	×	154,473	154,473
		榎戸村	114,570	×	222,970	222,970
		立野村	279,980	×	385,970	385,970
		中内村	135,380	×	175,075	175,075
		大沼村	162,450	×	288,095	288,095
		原村	147,810	×	303,776	※290,358
		松木村	47,080	×	101,120	101,120
		手代木村	391,700	×	521,467	521,467
		小野崎村	382,870	×	713,558	713,558
	B	房内新田村				3,528
		小茎村	180,284		229,633	248,112
		樋ノ沢村(新)	53,235	×	53,235	53,235
		市ノ台村		×	65,874	65,874
		今泉村(新)	110,618	×	110,618	110,618
		中山村	595,427	×	699,380	76,299
筑波郡	A	羽成村	298,830	×	412,139	412,139
		台町村	564,100	×	719,089	2,823,150 (谷田部)
		内町村	843,360	×	1,434,033	
		新町村	419,700	×	694,389	195,573
		飯田村	45,350	×	199,373	
		片田村	110,650	×	233,468	231,519
		萱丸村	63,070	×	348,939	348,939
		高田村	185,493	×	185,493	185,493
		下河原村	236,442	×	255,868	○165,244
		百家村	401,874	×	409,464	○102,893
	B	東丸山村(新)	37,106	×	39,898	37,133
		境松村(新)	196,780	×	212,343	※212,343
		境田村(新)	86,330	×	97,135	97,135
		根崎村(新)	56,127	×	56,127	56,127
		中野村(新)	85,208	×	83,960	86,725
		栗山村(新)	86,531	×	86,530	86,530
		古館村(新)	134,830	×	141,079	141,079
		西谷ヶ代村	155,144		220,765	212,765
		西酒丸村	289,775		379,173	※279,775
		中東村	247,619		247,907	248,014
新郡治	A	刈間村	725,724	×	712,306	712,306

(註)

- ・A群……元禄一二ノ安政七年の各「御領知目録」に記載されている村
- ・B群……「御領知目録」には見えないが、明治元年段階の村高と旧領名を記した「旧高旧領取調帳」に谷田部落領分と記されている村
- ・×を付した村は、天保五年一月に尊徳が作成した「細川家為政鑑土台帳」(「二宮尊徳全集」第三卷、八六頁)に谷田部落領の村高と旧領名を記した「旧高旧領取調帳」に谷田部落領分と記されている村
- ・「郷帳」では河内郡に属している。西酒丸村は「旧高旧領取調帳」では西酒丸新田村(八五石余)が独立して安藤伝蔵支配所と※印を付した村のうち原村は「旧高旧領取調帳」では上・下に分村されており、谷田部落領分は上原村となっている。境松村は明治元年の欄で○印を付した村は相給で、この年の高は谷田部落領分の高を記したが、元禄と天保の高は全村高である。
- ・切捨(一)内に新と記した村は「郷帳」に「新田村」と註記されているもの。
- ・元禄と天保の村高は「郷帳」(国立公文書館所蔵、明治元年の村高は木村礎氏校訂「旧高旧領取調帳」関東編による。以下はとして記されているもの)。

表 2-2 谷田部落茂木領の村高

郡名	区分	年次	元禄14年	天保5年	天保5年	明治元年
		村名				
芳賀郡	A	藤村	石 705.500	×	石 706.353	石 ○693.500
		縄木村	179.240	×	420.064	420.604
		槻井村	401.020	×	495.583	495.583
		神井村	552.790	×	1,209.254	1,209.254
		坂郷村	134.440	×	415.655	415.655
		天子村	106.040	×	347.486	347.486
		馬門村	651.910	×	844.178	○831.678
		福手村	145.680	×	299.402	299.402
		小井戸村	724.370	×	1,115.921	1,112.174
		三坂村	189.700	×	195.402	195.402
		石下村	80.170	×	414.768	414.768
		河井村	501.180	×	614.518	610.662
		檜山村	139.290	×	187.184	187.184
		牧野村	599.630	×	876.584	626.697
		菅俣村	152.490	×	825.744	825.744
		河又村	148.300	×	305.731	305.731
		飯野村	918.340	×	1,064.475	1,064.475
		林村	452.540		459.595	459.595
		高岡村	555.100	×	1,260.488	1,260.488
		芦沼村	126.340	×	701.090	701.090
		増井村	102.130	×	272.193	272.193
		鮎田村	653.140	×	787.436	787.436
		小深村	408.050	×	574.385	574.385
		青梅村	91.720	×	130.528	130.528
		山内村	1,360.000	×	1,773.839	1,773.839
	B	入郷村		×		249.887

(註)

入郷村は前者から分村したものである。
 ・牧野村と入郷村の明治元年の村高の合計は「天保郷帳」の牧野村の高と同じになるので、前者は記載誤れと思われる。河内郡の南中妻村も同様であらう。
 ・御領分茂木村々夫食見積中勘土台帳(『全集』第三卷、六三七頁)には存するので、林村は天保五年の「細川家為政鑑土台帳」には見えないが、天保七年の「細川長門守様

れていないから、元禄段階ですてに天保郷帳記載の村高に達していたものと思われる。さらに注意すべきは、領知目録の上では、元禄一二年以降村数は固定しているものの、明治元年段階の村高と旧領名を記した『旧高旧領取調帳』には、前者に記載されていない谷田部藩領の村がかなり存することである。表2のB群の村がそれである。これらの大部分は、二宮尊徳が天保五年に作成した「細川家為政鑑土台帳」にも谷田部藩領として記されており、その多くは、郷帳では「新田村」と註記されている。してみると、近世初期の新田開発の結果、かなりの新田村が成立し、これらが表高外の地（内高）として細川氏の領有下に組み込まれたことがうかがえる。

新田村がみられるのは谷田部領のみで、茂木領には存しないのは、前者が平地であるのに対し、後者は山間の地であるという地理的条件に規制されたためと思われる。但し、茂木領においても個々の村高は増加しており、切添型の新田開発はかなり行なわれたことがうかがえる。天保七年段階の内高は、茂木領一六、二二六石余、谷田部領一一、二五八石余となっており、各々の表高に比べると、前者は約六、二〇〇石、後者は約五、〇〇〇石の増加をみている。⁽⁴⁾ 増加率では、茂木領六二パーセント、谷田部領七〇パーセントとなる。

では、生産条件はどうであったか。表3は茂木領、谷田領それぞれの内高の田畑反別を示したものである。これによると、両者とも畑地の方が多く、殊に茂木領では全耕地の七〇パーセント近くを占めている。天保五年、谷田部藩医中村元順が二宮尊徳に仕法を依頼した際、谷田部藩領の生産条件について、茂木領・谷田部領ともに地味が悪く、前者は山間に位置しているために「田畑旱損勝之地」であり、後者は「平原広野、瘠疲地窪之場所」で水害を受けやすい立地条件下にあり、おしなべて「誠に以無比類、両所難地に御座候」と説明している。⁽⁵⁾

谷田部領では茶・茂木領では木綿・煙草・和紙等の生産もみられたが、全体的には特有農産物の占める比率は小さく、米雑穀の生産が主体をなしていた。⁽⁶⁾ この地方においても、近世中期以降、金肥導入を契機に商品貨幣経済に巻き

込まれ、米雑穀の商品化も行なわれるようになったが、それを組織・編成していたのは肥料商・穀物商を中心とする商人たちであった。⁽⁷⁾後述するように、谷田部藩の御用達となった商人たちも、主として穀物商いで財を蓄えた者たちである。

(二) 農村荒廃の概況

次に、谷田部藩が尊徳仕法を導入する前提となった農村荒廃、および藩財政逼迫の状況について概観しておこう。

先述した新田開発による耕地の拡大は、それに見合った農業労働力が確保されている限りにおいては、⁽⁸⁾領内総生産量の増大をもたらした、藩財政を潤すことになる。中村元順は尊徳に対し、万治―延宝期の谷田部藩領の状況について、「旧年来申伝には、万治・延宝之度は、領邑平穩にて、阿在所田方壹万五千百四拾三俵余、畑方千六百兩余有之、此税四ツ五分三厘に当り、藩民豊饒之事に及承り」⁽⁹⁾と述べている。「土芥寇讎記」でも、元禄初年段階の谷田部藩政について、「米能ク生ズ。私ヒ中也。年貢所納五ツ六ツ。家中へ四ツ。在江戸ノ年、人有「扶持」。外ニ摸合ヲ渡ス。地ニ禽獸柴薪アリ。自由悪キニ非ズ、中抵也。

関東農村の荒廃と尊徳仕法（大藤）

表 3 谷田部藩領内高の反別と荒地反別（天保7年）

	茂 木 領	谷 田 部 領	計
a. 総 反 別	町 反 畝 歩 1,872. 3. 6.22	町 反 畝 歩 1,142. 1. 1.23	町 反 畝 歩 3,015. 2. 8.15
b. 田 方 $\left(\frac{b}{a} \times 100\right)$	598. 3. 6.09(32) [%]	462. 5. 0.02(40) [%]	1,060. 8. 6.11(35) [%]
c. 畑 方 $\left(\frac{c}{d} \times 100\right)$	1,274. 0. 0.13(68)	680. 4. 1.21(60)	1,954. 4. 1.34(65)
d. 田方荒地 $\left(\frac{d}{b} \times 100\right)$	146. 0. 8.18(24)	314. 4. 6.24(68)	460. 5. 5.12(43)
e. 畑方荒地 $\left(\frac{e}{c} \times 100\right)$	666. 4. 8.06(52)	327. 2. 6.05(48)	993. 7. 4.11(50)
f. 荒地計 $\left(\frac{f}{a} \times 100\right)$	812. 5. 6.24(43)	641. 7. 2.29(56)	1,454. 2. 9.23(48)

〈註〉・「旧復越法記録草稿」（『二宮尊徳全集』第23巻，180～182頁）より作成。

・谷田部領の田方と畑方の合計の数値については訂正した。

家士ノ風俗ヨシ⁽¹⁰⁾」と、概ね良好であつた旨記している。

だが、新田開発による耕地の拡大は、藩政の発展をもたらしたと同時に、荒廢の歴史的前提条件をも醸成していったと思われる。

第一に、耕地造成は小農自立を促進する条件となつたが、その結果、本田畑でさえ土地生産力の低いところに、より劣悪な新田畑を基盤とする脆弱な小農経営が簇生されることになつたことである。⁽¹¹⁾ 新田畑の場合、一定期間貢租が減免されるものの、やがて村高に加えられ本田畑並みに賦課されるようになる。谷田部藩の場合、万治三年の検地によつて新田畑が掌握されたが、その際、少しでも大きい高に結ぶため歩詰によつて検地された。その結果打ち出された高に對し、万治一延宝の頃は「四ツ五分三厘」(中村元順の説明)、元禄初年の頃は「五ツ六ツ」(「土芥寇讎記」)といふ比較的高率の貢租が賦課されたのである。「土芥寇讎記」では、先の文言に續けて「民間課役多ク、其ノ上領分之人ヲ他國ヘ不_レ出サ。惣テ家民ノ仕置^{シテ}稠シク、父興隆ノ時ヨリ、興英ニ到ルマデ、人使ヒ不_レ宜」と記しており、貢租だけでなく課役負担も大きかつたことがうかがえる。特に助郷人馬役は、農民にとって大きな負担となつた。⁽¹²⁾ 土地生産力が低いところにもつて、こうした過重な封建的収奪にさらされたことにより、小農経営の再生産の不安定性は倍加されることになつたと思われる。

第二は、耕地の造成に伴い、それに見合うよう水利、山野の利用条件が拡大されねばならないが、それが不十分な場合、既存の本田畑の生産条件をも圧迫することになりかねない、といふことである。⁽¹³⁾ 殊に、先述の如く、茂木領は山間で水利条件が悪く「早損勝之地」であり、一方、谷田部領は平地で山野に恵まれていないため、耕地の造成は生産条件を一層悪化させたものと思われる。また、そのことが、農民をして金肥を導入させ、農村を貨幣經濟に巻き込ませる契機ともなつた。⁽¹⁴⁾

表 4 関東八国の人口の変遷

年次 国名	享保6年	寛延3年	宝暦6年	天明6年	寛政10年	文化元年	文政5年	文政11年	天保5年	弘化3年	明治5年
相模	312,637 (100) 8	310,796 (99.4)	305,569 (97.7)	279,427 (89.4)	277,211 (88.7)	278,068 (88.9)	269,839 (86.3)	289,376 (92.6)	294,009 (94)	303,271 (97)	356,638 (114.1)
武蔵	1,903,316 (100)	1,771,214 (93.1)	1,774,064 (93.2)	1,626,968 (85.5)	1,666,131 (87.5)	1,654,368 (86.9)	1,694,255 (89.0)	1,717,455 (90.2)	1,714,054 (90.1)	1,777,371 (93.4)	1,943,211 (102.1)
安房	115,579 (100)	158,440 (137.1)	137,565 (119)	125,052 (108.2)	133,513 (115.1)	132,993 (115.1)	139,662 (120.8)	140,830 (121.8)	144,581 (125.1)	143,500 (124.2)	154,683 (133.8)
上総	407,552 (100)	453,460 (111.3)	438,788 (107.7)	388,542 (95.3)	368,831 (90.5)	364,560 (89.5)	372,347 (91.4)	362,411 (88.9)	364,240 (89.4)	360,761 (88.5)	419,969 (103)
下総	542,661 (100)	567,603 (104.6)	565,614 (104.2)	483,526 (89.1)	484,641 (89.3)	478,721 (87.5)	419,106 (77.2)	497,758 (91.7)	402,093 (74.1)	525,041 (96.8)	645,029 (118.9)
常陸	712,387 (100)	655,507 (92)	641,580 (90.1)	514,519 (72.2)	492,619 (69.2)	485,445 (68.1)	495,575 (69.6)	495,859 (69.6)	457,321 (64.2)	521,777 (73.2)	648,674 (91.1)
上野	569,550 (100)	576,075 (101)	579,987 (101.8)	522,869 (91.8)	514,172 (90.3)	497,034 (87.3)	456,950 (87.2)	464,226 (81.5)	451,830 (79.3)	428,092 (75.2)	507,235 (89.1)
下野	560,020 (100)	554,261 (99)	533,743 (95.3)	434,797 (77.6)	413,337 (73.8)	404,495 (72.2)	395,045 (70.5)	375,957 (67.1)	342,260 (61.1)	378,665 (67.6)	498,520 (89)
計	5,123,704 (100)	5,047,356 (98.5)	4,974,910 (97.9)	4,375,736 (85.4)	4,350,366 (84.9)	4,295,684 (83.8)	4,242,779 (82.8)	4,343,872 (84.7)	4,171,388 (81.4)	4,438,478 (86.6)	5,173,959 (100.9)
全国指数	100	99.4	100	96.2	97.7	98.3	102.1	104.4	103.8	103.2	127

・(註) 関山直太郎氏「近世日本の人口構造」137～139頁の「国別人口表」により作成。

・() 内は指数

第三は、河川流域への新田開発の進行に伴う地形・水流の変化は、水害を激発させる要因となったことである。⁽¹⁵⁾特に、「平原広野、瘠疲地窪之場所、劇雨霖雨等之節は、忽出水溢水腐多」という立地条件下にあった谷田部領では、新田開発の進行は水害発生の危険性を一層増幅させずにはおかなかったであろう。

関東農村の荒廃の原因として、従来の研究では、土地生産力の低さに加えての封建的収奪の過重さ、近世中期以降商品貨幣経済に巻き込まれたことによる農民層分解の進行、一八世紀半ば以降打ち続いた風水害、冷・旱害等の自然災害等々が指摘されているが、こうした諸条件が農村荒廃を結果した、ないしはそれを激化させた歴史的前提として、新田開発によって生み出された如上の新たな状況をも考慮する必要がある。天保六年に尊徳仕法が開始された際、特に荒廃が甚しかった谷田部領根崎村・境田村・古館村・境松村・小野崎村・手代木村・松木村、茂木領馬門村・飯野村より荒地再発事業が着手されているが、先の表2をみると、このうち前四ヶ村は新田村であり、他の村々も村高の増加が大きく、新田造成率の高い村であったことが知られる。また、表3をみると、新田造成率の高い谷田部領の方が茂木領よりも荒廃率が高くなっている。このことは、右の見解の蓋然性を裏付けていよう。

表4をみると、関東地方の人口は全般的に享保以降漸減の一途を辿り、殊に天明以降それが甚しくなり、天保五年段階に最低に落ちこんでいる。この傾向は、全国的な人口趨勢と比較すれば、きわめて特徴なことが分かる。中でも、常陸・下野二国の人口減少が著しい。谷田部藩領でも、「安永・天明度、前後之天災凶荒不作、人蓄及減少、田圃荒廃無毛之地相増」という如く、安永頃以降人口が減少し荒廃化が進行した。例えば茂木領の場合、総人口は享保八年には一三、一三三人であったが、寛政七年七、三四九人、天保七年六、七〇二人と大幅に減少して⁽¹⁸⁾いる。

前掲の表3に天保七年時の谷田部藩領の荒地反別を示しておいた。これは、尊徳がこの年の凶作を予知して、その対策のために領内を調査させた時の数値であるので、この年の凶作による被害分は含まれておらず、これまでに進行

表 5 台町村・羽成村・若栗村の等級別反別と引分

村名 等級	台 町 村		羽 成 村		若 栗 村	
	反 別	引 分 (比率)	反 別	引 分 (比率)	反 別	引 分 (比率)
上 田	町反敵歩 14. 6. 9. 18	町反敵歩% 0. 7. 9. 01 (5)	町反敵歩 8. 8. 8. 09	町反敵歩% 4. 0. 6. 24 (45)	町反敵歩 8. 6. 5. 15	町反敵歩% 0. 1. 8. 22 (2)
中 田	5. 5. 6. 27	1. 5. 3. 16 (27)	2. 0. 7. 21	1. 3. 6. 28 (55)	2. 9. 9. 16	0. 0. 9. 26 (3)
下 田	6. 2. 7. 14	1. 5. 1. 15 (22)	9. 5. 5. 29	8. 8. 3. 20 (92)	4. 1. 5. 02	1. 6. 17 (4)
計	26. 5. 3. 29	3. 8. 4. 02 (14)	20. 5. 1. 29	14. 2. 7. 12 (69)	15. 8. 0. 03	4. 5. 05 (3)
上 畑	12. 4. 3. 03	1. 4. 3. 29 (11)	3. 3. 6. 21	0. 9. 5. 27 (28)	6. 1. 8. 14	1. 0. 1. 05 (16)
中 畑	3. 9. 7. 10	0. 7. 6. 18 (19)	1. 4. 0. 23	0. 3. 2. 23 (22)	5. 7. 0. 27	1. 5. 0. 23 (26)
下 畑	22. 8. 5. 29	7. 1. 6. 15 (31)	16. 5. 9. 15	6. 7. 8. 07 (40)	17. 7. 2. 17	10. 0. 9. 14 (57)
計	39. 2. 6. 12	9. 3. 7. 02 (23)	21. 3. 6. 29	8. 0. 6. 27 (37)	29. 6. 1. 28	12. 6. 1. 12 (42)
上 茶 畑	7. 2. 2. 19	0. 8. 8. 23 (12)	2. 5. 7. 22	1. 4. 2. 14 (55)	5. 6. 1. 12	4. 5. 7. 12 (81)
中 茶 畑	1. 9. 0. 08	0. 3. 1. 24 (16)	1. 2. 0. 08	0. 7. 0. 18 (58)	1. 0. 0. 15	7. 0. 21 (70)
下 茶 畑	2. 3. 6. 00	0. 4. 5. 14 (19)	1. 7. 0. 10	1. 3. 0. 05 (70)	9. 0. 29	7. 1. 22 (78)
計	11. 4. 8. 27	1. 6. 6. 01 (14)	5. 4. 8. 10	3. 4. 3. 07 (62)	7. 5. 2. 26	5. 9. 9. 25 (79)
総 計	77. 2. 9. 08	14. 8. 7. 05 (19)	47. 3. 7. 08	25. 7. 7. 16 (54)	52. 9. 4. 27	19. 0. 5. 12 (36)

〈註〉・台町・若栗村は嘉永5年の、羽成村は弘化2年の「御物成割付状」(すべて今川家文書)による。

・台町村には上々田も存するが、ここでは上田に含めている。

表 6-1 谷田部藩の貢租収取状況

年 次		賦 課 高 (a)		正 上 納 高 (b)	
		田 租	畑 租	田 租 $\left(\frac{b}{a} \times 100\right)\%$	畑 租 $\left(\frac{b}{a} \times 100\right)\%$
文政 8 年	谷田部	石斗升合勺 2,306.5.7.1.8	兩 分 853.3	石斗升合勺 853.3.3.6.2 (37)	兩分 396.2 (46)
	茂 木	3,887.1.8.1.5	1,873.2	2,100.5.5.4.9 (54)	1,233.3 (66)
	計	6,193.7.5.3.3	2,727.1	2,953.8.9.1.1 (48)	1,630.1 (60)
文政 9 年	谷田部	2,302.2.9.8.3	853.3	762.0.8.5.7 (33)	377.1 (44)
	茂 木	3,889.9.6.8.5	1,872.3	2,397.5.5.4.9 (61)	1,236.3 (66)
	計	6,192.2.6.6.8	2,726.2	3,159.6.4.0.6 (51)	1,614 (59)
文政10年	谷田部	2,310.0.0.4.4	853.3	833.6.2.9 (36)	406 (48)
	茂 木	3,890.6.6.4.6	1,872.3	2,630.0.9.3.1 (68)	1,247 (67)
	計	6,200.6.6.9	2,726.2	3,463.7.2.2.1 (55)	1,653 (61)
文政11年	谷田部	2,280.1.1.6.3	853.3	700.9.7.1.1 (31)	405.2 (47)
	茂 木	3,889.3.2.3.3	1,872.3	2,380.9.1.9.9 (61)	1,247 (67)
	計	6,169.4.3.9.6	2,726.2	3,081.8.9.1 (50)	1,652.2 (61)
文政12年	谷田部	2,287.2.7.0.2	853.3	763.1.4.8.9 (33)	389.3 (46)
	茂 木	3,889.3.2.3.3	1,872.3	2,631.4.6.3.6 (68)	1,239.2 (66)
	計	6,176.5.9.3.5	2,726.2	3,394.6.1.2.5 (55)	1,629.1 (60)
天保元年	谷田部	2,310.4.5.3.2	853.3	801.8.1.5 (35)	383.1 (45)
	茂 木	3,889.2.8.1.1	1,869.3	2,448.2.5.0.4 (63)	1,221.2 (65)
	計	6,199.7.3.4.3	2,723.2	3,250.0.6.5.4 (52)	1,604.3 (59)
天保 2 年	谷田部	2,310.5.4.5.6	853.3	790.8.9.9.6 (34)	378.1 (44)
	茂 木	3,889.2.8.1.1	1,869.3	2,494.5.2.2.4 (64)	1,231 (66)
	計	6,199.8.2.6.7	2,723.2	3,285.4.2.2 (53)	1,609.1 (59)
天保 3 年	谷田部	2,312.7.7.2.7	853.3	799.3.9.8.5 (35)	398 (47)
	茂 木	3,889.2.8.1.1	1,869.3	2,531.4.3.9.4 (65)	1,227.2 (66)
	計	6,202.0.5.3.8	2,723.2	3,330.8.3.7.9 (54)	1,625.2 (60)
天保 4 年	谷田部	2,312.7.3.4.4	852.1	625.1.3.8.5 (27)	356.1 (42)
	茂 木	3,889.2.8.1.1	1,869.3	1,377.3.3.6.4 (35)	1,225 (65)
	計	6,202.0.1.5.5	2,722	2,002.4.7.4.9 (32)	1,581.1 (58)
天保 5 年	谷田部	2,357.1.9.0.8	851	851.9.4.7.5 (36)	353.1 (41)
	茂 木	3,889.2.8.1.1	1,869.3	1,837.2.5.7.3 (47)	1,208.3 (65)
	計	6,246.4.7.1.9	2,720.3	2,689.2.0.4.8 (43)	1,562 (57)

〈註〉・「細川家為政鑑御土台帳ノ書抜帳」(『二宮尊徳全集』第23巻, 108~132頁)により作成。なお, 上記の史料で計算間違いをしている箇所は訂正した。田租の才以下は四捨五入し, 畑租の銭表示の端数は切捨。

表 6-2 賃 租 引 分

		引 分			
年 次		田方用捨引	畑方用捨引	田方追引并 窮民未納引	畑方追引并 窮民未納引
文政8年	谷 田 部	石斗升合勺	兩 分	石斗升合勺	兩 分
	茂 木	1,436.0.6.5.5	369.3	17.1.7.0.1	87.2
	計	1,565.5.3.9.4	420.2	221.0.8.7.2	219.1
文政9年	谷 田 部	3,001.6.0.4.9	790.1	238.2.5.7.3	306.3
	茂 木	1,516.5.3.7.4	393	23.6.7.5.2	83.2
	計	1,452.6.5.0.6	442.1	39.7.6.3	193.3
文政10年	谷 田 部	2,969.1.8.8.0	835.1	63.4.3.8.2	277.1
	茂 木	1,454.0.4.5.9	369.3	22.3.2.9.5	78
	計	1,216.5.3.8.1	442.1	44.0.3.3.4	183.2
文政11年	谷 田 部	2,670.5.8.4	812	66.3.6.2.9	261.2
	茂 木	1,545.0.5.4.6	369.3	34.0.9.0.6	78.2
	計	1,357.6.6.2	444.3	150.7.4.1.4	181
文政12年	谷 田 部	2,902.7.1.6.6	814.2	184.8.3.2	259.2
	茂 木	1,481.2.2.2.9	385.2	42.8.9.8.4	78.2
	計	1,182.1.6.6.2	442.2	75.6.9.3.5	190.3
天保元年	谷 田 部	2,663.3.8.9.1	828	118.5.9.1.9	269.1
	茂 木	1,453.6.0.8.9	388.1	55.0.2.9.3	82.1
	計	1,369.7.8.3.9	486.3	72.2.4.6.8	161.2
天保2年	谷 田 部	2,821.3.9.2.8	875	127.2.7.6.1	243.3
	茂 木	1,462.7.8.2.4	393	56.8.6.3.6	82.2
	計	1,344.0.5.5	486.3	50.7.0.3.7	152
天保3年	谷 田 部	2,806.8.3.7.4	879.3	107.5.6.7.3	234.2
	茂 木	1,454.6.7.9.2	370	58.6.9.5	85.3
	計	1,299.6.1.4.9	486.3	58.2.2.6.8	155.2
天保4年	谷 田 部	2,754.2.9.4.1	856.3	116.9.2.1.8	241.1
	茂 木	1,486.3.7.5.2	400	201.2.2.0.7	96
	計	1,906.6.2.6.1	486.3	605.3.1.8.6	158
天保5年	谷 田 部	3,393.0.0.1.3	886.3	806.5.3.9.3	254
	茂 木	1,454.7.8.9.2	400.2	50.4.5.4.1	97.1
	計	1,460.7.8.2.1	487	591.2.4.1.7	174
		2,915.5.7.1.3	887.2	641.6.9.5.8	271.1

してきた荒廃状況を示すものである。これによると、全領の約半分が荒地と化しており、内訳では谷田部領の荒廃率の方が茂木領よりも高く、田畑別では前者においては田方、後者においては畑方の荒廃率が高くなっている。表5に個別村落における等級別の荒廃状況を例示しておいた。仕法による復興がある程度進んだ段階のものであるが、一応の傾向を知ることができよう。これによると、田畑とも等級が下がるほど荒廃率が高くなっている。これは、土地生産力の低さに加えて、後述するように、等級の低位ほど高率の貢租が賦課されたことによる。

表6は、文政八―天保五年の谷田部藩の貢租収取状況を示したものである。賦課高はほぼ一定であるが、荒地引と毛引の用捨引および未納分が大量に存し、正上納高は大幅に減額しており、農村荒廃が端的に反映している。殊に、谷田部領の落ちこみが著しい。これは、先に指摘した谷田部領の荒地率の高さに照応している。また、畑租の正上納高は、田租に比べて変動が少いのが目につく。これは、畑租は金納であるため、不作の場合、他の余業収入を以て上納することが可能で、それ故、領主も畑租の減免は容易に認めなかったことによる。

谷田部藩では、元禄期までは検見による厘取法が行なわれていたが、それ以後、反取法に転換している。表7の如く、村によって反当りの年貢取高が異なっており、しかもこれは固定されている。おそらく、耕地造成による領内総生産量の増大を検見厘取法によって吸収することが元禄期にピークに達し、以後、反取の定免とすることにより、一定の年貢収量の確保を図ったものと思われる。反取高は、茂木領の下菅又村、神井村の方が谷田部領の三ヶ村よりも高くなっており、茂木領の方が土地生産力においてやや優位にあったことがうかがえる。先にみたように、荒廃率も茂木領の方が低いのである。

石盛が知られるのは神井村の田方のみで、上々田一石五斗、上田一石三斗、中田一石一斗、下田九斗となつてい(22)
る。同村の石盛にする反取高の比率を計算すると、上々田五二パーセント、上田五六パーセント、中田五七パーセン

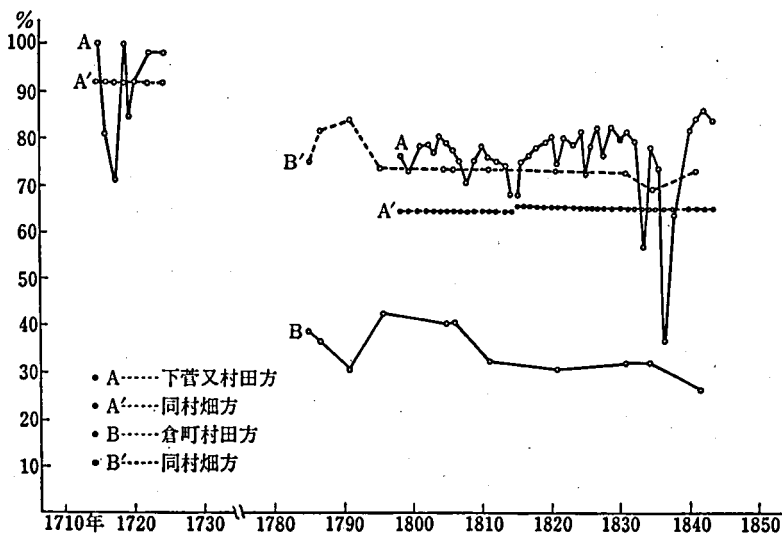
表 7 台町村・羽成村・若栗村・下菅又村・神井村の等級別反当り年貢取高

村名 等級	台町村	羽成村	若栗村	下菅又村	神井村
上々田	6斗6升			8斗1升	7斗8升
上田	6. 1	5斗8升	6斗1升	7. 6	7. 3
中田	5. 3	5. 3	5. 5	6. 5	6. 3
下田	4. 6	4	4	5. 1	5. 1
上畑	720文	510文	640文	950文	900文
中畑	450	380	410	500	600
下畑	200	200	210	230	250
上茶畑	740	740	740		
中茶畑	370	370	370		
下茶畑	110	110	110		

〈註〉・台町村・羽成村・若栗村・下菅又村は各「御物成割付状」（前3村は今川家文書，下菅又村は山納博家・同武雄家文書）による。

・神井村は大木茂氏「茂木の歴史」141頁による。

表 8 台町村・下菅又村の年貢定納高に対する実際の割付高の比率



〈註〉・各村の「御物成割付状」により作成。

ト、下田五七パーセントとなり、全般的に高率で、しかも等級が下位の方が高い。先にみたように、等級が下がるほど荒廃率が高くなっているのは、土地生産力の低さに加えた貢租負担の過重性が基本的な原因であったことが知られるよう。

表8に谷田部領台町村、茂木領下菅又村の年貢定納高に対する実際の割付高の比率の変遷を示しておく。「御物成割付状」では五年季の定免となっているが、反取高が固定されている以上、村反別に変化がない限り定納高は固定することになり、両村とも変化はみられない。表をみると、下菅又村の場合、一八世紀初期においては、畑方は定納高の九〇パーセントを維持し、田方は年次によって落ちこみがあってもすぐに回復しており、全体的に定納高の九〇—一〇〇パーセントが確保されている。しかし、一八世紀後半以降は荒地引・毛引等の引分が多くなり実際の割付高は大幅に下落している。⁽²³⁾同時期においては、下菅又村は全般的に田方の比率が高く、台町村は逆に田方の比率が極端に低くなっている。こうした傾向は、先述した茂木領・谷田部領それぞれの田畑別荒地率に照応している。

高率の貢租負担の下で、一八世紀半ば以降打ち続く自然災害に見舞われたことにより、百姓の潰れ・欠落↓手余り荒地の発生⇨農村の荒廃化が進行し、村の担税力は著しく弱まったのである。下菅又村の人口は、寛政七年二五二人、文化元年二三三人、文政一三年二二四人と減少していつている。⁽²⁴⁾

年貢割付高の減少は、決して農民の負担軽減に結びつくものではなかった。年貢村請制の下にあっては、潰れ百姓の分は村方で弁納しなければならず、⁽²⁵⁾農民の負担はかえって過重化されることになった。「その結果、「人数減少に従ひ、手余荒地相増、潰に相成候もの、御年貢諸役弁納に相成候故、弥増及困窮、百姓家軒下迄、葭萱生茂り、悉荒地に相成」⁽²⁶⁾という如く、新たな潰れ百姓の発生↓手余り荒地の増大↓貢租収納量の減少という悪循環に陥ることになった。すなわち、村請制のメカニズムが農村の荒廃化を進行させる方向に作用し、それが村請制の機能そのものの低下

表 9 小深村の階層構成

年次 所持高	寛文 6年	元禄 4年	寛政 9年	文政 10年
30石	2戸	2戸	戸	戸
15 ~ 21	6	4		
10 ~ 15	10	13	5	1
5 ~ 10	22	23	42	26
1 ~ 5	26	34	65	50
1石未満	4	4	5	8
潰れ百姓				9
計	70	80	117	94

〈註〉・大木茂氏「茂木の歴史」208頁により作成。

表 10 下菅又村の階層構成
(天保5年)

所持高	戸数 (うち 欠落)	1戸当り 家族人数	1戸当り 馬数
20 ~ 30石	2戸	7.5人	2疋
15 ~ 20	2	4.5	1
10 ~ 15	16	5.6	0.9
5 ~ 10	24(1)	4.0	0.8
1 ~ 5	10(3)	2.8	0.2
計・平均	54(4)	4.4	0.7

〈註〉・天保5年「人別御改寛帳」
(山納博家文書)により作成。

・修験は除く。

を結果することになったのである。表6―2をみると、窮民未納分がかなり存在しており、中村元順も「未進年延夥敷有之、往古より収納過半及減少」⁽²⁷⁾と述べている。このことは、村請制を通じての封建地代の搾取がもはや貫徹し得なくなってきたことを示している。

次に、農村荒廃下の階層構成についてみておこう。表9・10・11は、茂木領農村の事例である。表9の小深村の場合、元禄四年から寛政九年の間に戸数はふえているが、階層構成の面では一五石以上層が皆無となり、一〇―一五石層も減少し、一―一〇石層に集中している。殊に、一―五石層が大量に存在する。文政一〇年には戸数が減少している上、このうち九戸は潰れ百姓となっていたことが確認できる。寛政九―文政一〇年の間に農民の貧窮化がさらに進行し、潰れ、さらには離村によって戸数の減少を来たことが知られよう。

野州芳賀郡農村についての須永昭氏の研究によると、⁽²⁸⁾主雑穀の自給作地帯であるこの地方においても、すでに元禄

期から金肥導入を契機に小農経営が貨幣経済に巻き込まれはじめ、商業資本の金肥前貸による高利収奪にさらされるようになったことが指摘されている。茂木領では、紙漉等の農間余業も展開していたが、しかし和紙生産も商人資本の資金前貸による支配下に置かれていた。⁽²⁹⁾先に検

討した如き領主収奪の重庄に加うるに、商業・高利貸資本の収奪をも受けるようになったことにより、生産者農民は貧窮化を余儀なくされたものと思われる。

天保五年の下菅又村（表10）、同六年の天子村（表11）では、文政一〇年の小深村に比べ階層構成上の主体が一段上がり、五—一〇石層が最も多くなっている。下菅又村では、この層に次いで一〇—一五石層が多い。注目されるのは、この村の一—五石層一〇戸のうち三戸は、「人別御改覚帳」に「欠落」と註記されていることである。しかも、この層の一戸当り平均家族人数・馬数は極端に少ない。この帳簿では、村外出稼ぎ奉公人は除外されているのか否か不明であるが、家族人数の少なさは主として間引・墮胎による人為的な人口制限に基因していたと思われる。保有耕地に依じて一率に賦課される近世の貢租制度の下では、下層ほどその重庄は大きくなる。

こうした封建的重庄の下、脆弱な生産基盤で「家」の再生産を維持していくためには、家族人数の削減によって生

表 11 天子村の階層構成
(天保6年)

所持高	戸数
15戸以上	1戸
10戸以上15戸未満	3戸
5戸以上10戸未満	13戸
1戸以上5戸未満	3戸
1石未満	0戸
計	20戸

（註）・大木茂氏「茂木の歴史」206頁により作成。

活費の切り下げをしなければならなかったのであるが、それでもなお生活が破綻し、欠落を余儀なくされているのである。また、家族人数の減少は、「家」存続の人間の基礎を乏しくし、絶家の危険性を増大させることになる。天保七年一〇月の調査では、下菅又村の反別六六町九反六畝一三步のうち荒地三〇町一反二畝一七步、天子村の反別四五町九反二畝一四歩のうち荒地二六町七反七畝一歩となっており、両村とも天保初期までに潰れ・欠落百姓の発生による手余り荒地

化が相当進行していたことを如実に示している。

各村とも抜きん出た大高持は存在していないことも、特徴の一つである。下菅又村では庄屋である山納権左衛門家の二五石余が最高であるが、家族人数は一人で、うち男女とも一五歳以上六〇歳未満を可労働人数とすると、その

数は七人となり、手作りにしていたことをうかがわせる。先に検討した如く、この期の貢租収納量の減退は、決して農民の剰余の一般的成立を想定し得る性質のものではなく、逆に農民の土地保有の動搖に基因してただけに、地主・小作関係を安定的に展開させる条件に乏しかったといえる。上層農民は、むしろ商業・高利貸資本として小前農民を支配していた。山納家と並ぶ下菅又村の有力農民である永島家は楮問屋も兼ており、資金前貸によって楮生産農民を支配していた。⁽³¹⁾地主・小作関係の展開が未熟で、余業も商業・高利貸資本に支配されていた条件下では、没落した農民は小作・余業稼ぎにより村内で生計を維持していくことができず、離村を余儀なくされたものと思われる。

芳賀郡農村に関する従来の研究では、荒廃化の進行過程で下層零細農民が退転・欠落して姿を消し、しかも土地集積が未熟なため、天保初期には所持高一〇石前後の層に平準化していることが明らかにされているが、右の茂木領の村でもこうした傾向がうかがわれよう。⁽³²⁾

表12は、谷田部領台町村の階層構成表である。天保四年の「人別并持高書上帳下書」では、村内所持高と並べて他村越石高も記されており、a欄に村内のみの所持高、b欄に後者をも含めた所持高構成を示しておいた。若干異動はあるものの、全体的な傾向は同じである。文化六年と同一基準であるa欄でもって両年次を比較すると、五石未満層が減少傾向にある。この層は文化六年で四戸、天保四年で一四戸が「潰」と註記されており、やはり淘汰される方向にあったことがうかがえる。五一―五石層でも少なからず潰れ百姓を出しており、この層も決して安定していたわけではない。

先の茂木領の村と異なり、この村では大高持も存在しており、名主今川宅三郎家は村内で七一石余、内町で八石余、計八〇石余を所持している。今川家文書中には文化三年の「田方小作年貢帳」が存し、小作人二三名が記載されている。この村では地主・小作関係が展開していたことが知られるが、下層農民の潰れは地主経営をも動揺させることに

表 12 台 町 村 の 階 層 構 成

所持高	年次	文化6年		天保4年					
		本 百 姓 戸 数	潰 れ 百 姓 戸 数	本百姓戸数		潰れ百姓戸数		本 (b) 百 姓 1 戸 当 り 家 族 数	本 (b) 百 姓 1 戸 当 り 可 働 人 数
				a	b	a	b		
石	戸	戸	戸	戸	戸	戸	人	人	疋
80 ~ 85				1			6	2	
70 ~ 80	1		1						
60 ~ 70									
50 ~ 60									
40 ~ 50	1								
30 ~ 40	1			1			6	4	
20 ~ 30	1		3	2			3.5	3	0.5
15 ~ 20	2		1	5			6.2	4.4	0.8
10 ~ 15	14		12	13	2	2	6.3	3.3	0.8
5 ~ 10	24		25	22	4	5	4.9	3.2	0.3
1 ~ 5	23	3	18	16	5	4	4.2	2.3	0.2
1石未満	2	1	1	1	9	9	1		
計	69	4	61	61	20	20	平均 5.1	3.1	0.4

〈註〉・文化 6 年「田畑石高帳」、天保 4 年「人別并所持高書上帳下書」（今川家文書）により作成。但し、他村居住者と寺社所持分は除く。

・天保 4 年の史料には村内持高の外に他村越石高も記されており、a 欄に村内のみの所持高構成、b 欄に他村越石をも含めた所持高構成を示した。

・可働人数は男女とも 15 歳以上 60 歳未満の者をとった。

なる。事実、荒廢期には、下層農民が退転・欠落して奉公人・小作人が不足したことにより、大高持も没落した事例が、従来の研究でも多く報告されている⁽³³⁾。台町村でも、文化六年には村内所持高三〇―五〇石の間に二戸存在していたのが、天保四年には村内所持分では二〇―三〇石に下降している。先の茂木領小深村でも、上層農民の所持高の下降現象がみられる。

谷田部領台町村では、茂木領農村に比べ階層分化の幅が大きくなっているが（この村が町場としての性格をも有していたことにもよっている）、五―一五石層に平準化されていく傾向は同様である。これは茂木・谷田部地方のみならず、北関東農村の荒廢期の一般的な特徴であることは、従来の諸研究で明らかにされているところである。だが、所持高からみれば安定した自作小経営を行なってい

るかにみえるこの層も、所持地のうちには荒地がかなり含まれており、実際の耕作地はきわめて零細であった。⁽³⁴⁾ 先に見たように、この層でも潰れ百姓がかなり発生しているのである。いわば農村荒廢期においては、下層農民だけでなく、中・上層農民をも含めた全階層の農民が、常に没落の危機にさらされていた、と言えよう。

以上の如き、百姓の潰れ・欠落による手余り荒地の発生という農村の荒廢化は、「村」の共同体的機能および土地緊縛等の規制力の低下の発現形態でもあった。したがって、それを基礎とした幕藩領主の農民支配・収奪の方式である「村請制」の動揺をもたらし⁽³⁵⁾た。それは、端的には貢租収納量の激減として現われたのである。

(三) 藩財政の逼迫

近世中期以降、商品貨幣經濟の進展に伴う支出の増大により、領主階級は一般的に財政難に陥っていたことは周知の事実であるが、特に關東の諸藩・旗本の場合、領主的土地所有の基盤そのものが崩壊に瀕し、貢租収納量の大幅な減退を來たしていただけに、それは一層深刻であった。⁽³⁶⁾

谷田部藩の財政も、「安永天明度、前後之天災凶荒不作、領民退転、人畜及減少、田圃荒廢無毛之地相増、其上故長門守代、明和九辰年二月柳原屋敷、天明六年正月同所、文化三寅三月同所、文政元寅年本所下屋敷、文政十二丑^(五七)三月柳原屋敷、都合七度及類焼、剩近來天保四巳年凶作打混、素より困窮難濟之處、弥上打重、度々類焼旁に付、難相凌、借財相嵩、且同性越中方よりも、其都度々助成補助手厚見継具候へ共、中々以難相凌、因茲術計尽果、当惑心痛此事に候へ共、前章之次第に付、同性越中守方へも、最早歎願も難申出、用達向々へも返済違約旁以、術計失度、如何共可凌様なく⁽³⁷⁾」と、安永頃以降の農村荒廢化の進行、および江戸屋敷の度々の類焼によって逼迫化し、そこに襲った天保四年の大凶作により、まさに破綻に瀕していた。

表13は、天保五年一月までに累積していた借財元利未返済分の額を示したものである。これによると、本家である肥後細川家より六万両以上の無利子の融資を受けているが、それだけでは藩財政の赤字を補えず、江戸、谷田部、茂木それぞれにおいて多額の借財をしており、負債総額は一三万両余にも上っている⁽³⁸⁾。

江戸屋敷借財分では、馬喰町御貸付役所一、六三二両余（未返済分、以下同）、駿府町奉行七一二両余等、幕府機関の公金貸付が主体をなしているが、その他、商家・武家・寺院等からも借財をしており、借入先は四五にも上る。

谷田部陣屋借財分の大口債権者は、柳橋長左衛門（二、五九二両余）、釜屋治郎兵衛（一、二九七両余）、和屋吉左衛門（二二三両余）である。「細川長門守様報徳借貸返済録」⁽³⁹⁾では、柳橋長左衛門について、他領である常州筑波郡柳橋村の者であるが、「旧来御出入御用相勤」ていた旨、註記されている。また、釜屋治郎兵衛、和屋吉左衛門については、それぞれ「江州梅木

表 13 天保5年における谷田部藩の借財額

内 訳	借 金 額	借 米 額	借入先 の 数
細川本家より借入	金 60,923 兩分朱 匁分厘 銀	俵	1
江戸屋敷借財	46,836.1.1 3.5.1 内利金 906.2.3 2.8	676	45
谷田部陣屋借財	5,569.1.1 9.0 内利金 131.0.2 3.2.9	27	36
茂木陣屋借財	6,277.2.1 2.9.0 内利金 96.0.3 1.5.5		50
追 加 調 査 分	15,234.0.2 4.8.4	1,935	
計	134,840.1.1 12.1.5 内利金 1,134.0.0 5.1.2	2,638	132

〈註〉・「細川家新古御借財取調帳」（『二宮尊徳全集』第23巻，21～25頁），
「細川長門守様報徳借貸返済録」（同前，275～282頁），
「細川家借財米金済方取調帳」（同前，318～339頁）により作成。

沢より、御領分谷田部御陣屋元へ、旧来出張にて農間穀物売買、質物渡世罷在候処、御勝手許御用相弁、「御領内百姓、農間米穀売買、質物稼罷在候処、年来御勝手元、米金御用相弁相動候」と記されており、前者は近江商人、後者は領内の百姓であるが、いずれも穀物売買・高利貸によって財を成し、谷田部藩の御勝手元御用達を勤めていたことが知られる。その他、小口の債権者が一七ヶ町村にわたって多数存在しており、うち一ヶ町村は谷田部領内である。一町村の債権者はほとんどが一人ないし二、三人であるが、前出の台町村では七人と最も多く存し、中でも村内一の大高持で名主を勤めていた今川宅三郎家は、宝暦六年に一八〇兩融資し、天保五年に至るも未返済分一五六兩となっている。

茂木陣屋借財分の大口債権者は、釜屋七兵衛（九四一兩余）、栄屋利兵衛（同額）であり、先の註記によると、両者とも近江商人であり、前者は穀物売買・高利貸、後者は穀物売買・高利貸に酒造業を営み、両者とも谷田部藩の御勝手元御用達を勤めている。その他、領内外の商人・農民・寺社・奉行所等から借財しているが、領外からの借入が多く、しかも続谷、烏山、真岡、黒羽、馬頭、日光、水戸等、広範囲にわたっている。殊に、日光御殿金、日光御山内惣物料、日光御山内実教院、日光奉行所等、日光山関係からの借金が多い。

以上のことから、深刻な財政難に陥っていた谷田部藩は、本家肥後細川家よりの多額の借金、および幕府機関よりの公金拝借、領内外の商人・農民や寺社からのきわめて多岐にわたる米・金借用などによって、かろうじて再生産を維持していた事情が知られる。藩財政を維持する上で、支柱をなしていたのは御用達商人たちである。彼らは、商業・高利貸資本として農業生産者に吸着する一方で、藩権力と共生関係を取り結び、富と社会的地位を築いていた存在であった。彼らが穀物商いを主としていたのは、先述の如く、谷田部・茂木地方が主雑穀生産地帯であったことによっているよう。

借財の積み重ねによってどうにか取り繕ってきた藩財政は、先の引用史料で述べてられているように、天保四年の凶作よって壊滅的な打撃を受けた。しかも、借財の未返済分が累積し膨大な額に上っていたため、金融の道も閉され、「無拠本所中郷下屋敷譲渡代金を以、公務家中扶助漸に凌渡⁽⁴¹⁾」という如き、まさに破産状態に陥っている。また、農村の荒廃、藩財政の窮乏は、農村に吸着し、藩権力に癒着することに自らの存在基盤を見出し出てきた御用達商人たちにも、大きな危機意識を喚起したに違いない。後述するように、尊徳仕法が導入されると、彼らが藩への貸金を帳消しにし、しかも農村復興費用を出して仕法の進捗に協力しているのも、自らの存在基盤の回復を期待してのことであつたらう。⁽⁴²⁾

(四) 領主階級の農村荒廃観と農民教化のイデオロギ―

ここでは、領主階級の農村荒廃観と農民教化のイデオロギ―について検討しておこう。

天明四年の飢饉の節、谷田部藩は農民教諭の書付を⁽⁴³⁾発布し、飢饉・農村荒廃の原因とみなした農民の生活態度を指摘しつつ、それを改めるよう次の如く説諭している。

第一条では、「近年百姓のふぎやうにおこたり、たゞとき⁽⁴⁴⁾の利とくをかんがへ、小あきんど、又しよく人等に相なり候間、としをおって、田はたの利少くなりゆき、あれ地も年々に相まし、是までのごとく米こく下じきにも候ハ、よのわざを以て金ぎんをとり、こく物かいとり候ハ、事もかましく候へども、当年のごとく、べいこく世上に無之候得バ、たちまちきんにおよび、なんぎはなはだしく候」と、百姓が農業を怠り、利欲かられて商工的余業に力を注ぐ故、荒地が増大し、ひいては飢饉を招くことになると指摘し、「いらいハよぎやうはつぎにいたし、のうぎやうを第一にいとむべき事、かつハ天道にかなふのつとめたるべく候」と説いている。

第二条では、百姓の奢侈の風俗を列挙した上で、「ひっきやう、そのぶんをわきまへず、公儀之御定法をそむく候、これによつて、分々におうじ、其ついへおほく、こんきういやがうへにつのり候、さるによつて、去あきのごとく、凶作にいたり候てハ、にわかにかのこりたるごとく、よろしからざる事とめんく存なから、やむことをあず、おしかりをくわだて、あるひハ上納をとこほり候外これなく候、よからぬ事ハめんく存候ニより、一身にて相ならず、其とうをかたらひ、大ぜひをたのミに、ふほうをおこなひ候事、人たるべきもの、所行にこれなく候、其心根とうぞくとういとハ不存候哉」と、その百姓としての分をわきまえない奢侈が困窮・飢饉の因となり、ひいては窮迫して押借を企てたり、年貢を滞納したり、徒党強訴の不法を行なったりすることになる、と非難している。そして、「平ぜひけんやくを第一」とすべきことを強調し、「身をそまつにもち候事ハ、百姓のならいに候」と説いている。

第三、四条では、人々が射幸心から博奕・諸勝負事に走り、それが悪事・身代困窮の因となっていることを戒め、「百姓ハ農業をつとめ、よきじせつにうりはらひ、金銀を得、しよく人あきんどそれぐのしやうばいをせい出し、仕合よきを以、まことの身代もちたつと申ものに候」と、百姓、職人、商人としてのそれぞれの本業に励むことによつて身代を保つべきことを論じている。

第五条では、五常の道を農民の生活に即して説いている。まず、仁については、「仁とハ人をあわれむのミちなれば、妻子けんぞく、じうるひになさけふかく仕事ニ候」と説明している。そして、「下野ひたちの国からにて、子をまびくと申事、不仁の第一なり、公儀よりもおもき御法度ニ候、子をそだて候義相ならざるゆへハ、其本をたゞし候へハ、ぶじきのふそくと、よきいるひをきせ候事ならざるニ付、外分あしきと存候より事おこり候」と、間引は不仁の第一であり、それは、農業等閑による夫食不足と、質素を恥とする見えに基因しているとして、「農業をはげみ、

けんやくにして、僮服をいとわざる時へ、おのづから子をやしなわざる道理無之候、いわれざる外分だてをいたし、不仁のおこなひをはじざるへ、大き成あやまりニ候」と説いている。

以下、義・礼・智・信について次のように説いている。「義とハ、かりニもあくじをなさず、成べきをなすをいふ、人の婦妻をうばひ、仲立なくして妻をめとるのひはもちろん、博奕諸勝負すべて天下の法度を破り、うわべはいつわりをかまへて、法をそむかざるてい、いたし候へ、不義の第一也」、「礼とハ、武家ハ勿論、儒医出家社人惣てうやまふべき人へりよぐわひのふるまひ不致、村方ニてハ、庄屋組頭ハ同じなまたりとも、時の目鑑を以其役をつとむるうへへ、ずいぶんその下知をそむかず、おや兄おぢおばしうとめ等の目上のものへたひし、りくつだて、てきたいかましき儀無之様ニ仕候を礼を知と申候」、「智ハ智恵の事ニ候へとも、百姓ハ外の智を尊ばず、能農の時をかんがへ、諸作の仕付、利害得失の勘弁、其図にかなふを百姓の正智と云、しかる所、なま才覚のもの、公事出入のこしおし、上を計下をあなとり、わるだくミいたし候るいは、姦智とて、いにしへよりにくむ所ニ候」、「信ハまことにて、五人組ハ勿論、惣て仲間之百姓、相たがいになり合、万事むつまじく申たんじ、かりにもいつわりだまし候事なと無之をいふ」。

第六条では、農村の神事を規制し、「農人ハ、農業をつとめ候てこそ天道にも叶ひ」と説いている。

第七条では、当年の飢饉を良き手本として、以来、備荒のために雑穀はもちろん、その他草木の若葉にいたるまで貯え置くように説いている。

以上の如く、領主の立場から飢饉・農村荒廢の原因とみなされた当時の農民生活のあり方が列挙されているのであるが、究極的には、それらは、農業疎略、功利心、人倫の欠如等に帰せられている。商品貨幣経済に巻き込まれた農民たちは、過重な領主収奪の下で生活を維持していくために、余業によって生計を補い、また間引によって口減しを

することを余儀なくされたのであるが、領主階級には、それらは、農民の功利心から出た農業疎略の行為、仁心の欠如と映じたのである。

そして、こうした農村荒廢觀に基づき、百姓としての分をわきまへ、余業をひかえて農業に出精し、質素・儉約に努め、人倫を遵守すべきことを教諭している。その場合、百姓は農業に専念してこそ、「天道」にかなうと力説されていることが、大きな特徴である。間引についても、「時の艱難をいとひ、たま／＼生を受来る子を育ざる時は、天道にそむき、上の御仁恵も行届かざる事に相成、其内ニは老年に及て、養を受べき子もなく、手あまり地多く相成、無抱おとろへつかれたる身をもつて、耕作にくるしみ、或は奉公にいて、終には先祖より持来る式をも取失ひ候事、いかにもなけくへき事に候、天道は物を生育するを第一とすれば、右の如き行あつて、神を祭り仏をいのり候とも、正しき神仏は、不仁の者をたすくる事あるまじく候、然はいかにもして出生を取あげ、人別相増候様に心懸る時は、上の御慈悲も行とゞき、面々天道にかなひ、神仏の加護もありて、其家永くさかゆへき事ニ候間、能々弁へ申へき事ニ候」と、それが「天道」に背く不仁の行為である故、「家」没落の因となる、「天道」によって定められた仁を実践してこそ、神仏の加護もあり、「家」も永久に栄えるという論理で以て、その禁止を農民に得心させようとしている。「家」の永続は農民の最も根源的な希求であるが、ここでは、「天道」に即して生きてこそ、それが保障される、と説かれてゐる点が特徴である。⁽⁴⁵⁾

また、農民の倫理意識の涵養のため、儒教の五常の徳目を農民の生活に即して通俗化しつつ説いているが、その意図するところは、その実践によって、農民をして天下の法度に従順させること、および自発的に農業出精へと向かわせること、「家」と「村」の秩序を遵守させ、かつ融和を実現させることにあつた。⁽⁴⁶⁾そして、そのことにより、「家」と「村」の秩序―規制と共同機能を基礎として成立している幕藩制社会の身分制秩序、および村請制支配の再編・強化

化を図っているのである。

以上の如き農村荒廃観は、谷田部落のみならず、当時の領主階級の一般的な見解であった。例えば、松平定信は、「宇下人言」の中で次のように述べている。

天明午のとし、諸國人別改られしにまへ之としよりは諸國にて百四十万人減じぬ。^(安永九)この減じたる人みな死うせしにはあらず、只帳外となり、又は出家山伏となり、又は無宿となり、又は江戸へ出て人別にもいらすさまよひありく徒とは成りにける。七年之間に百四十万人の減じたるは、紀綱くづれしがかく計之わざわひと成り侍るてふ事は、何ともおそろしともいふもおろかなり。これにて末をおさへ侍るは只花奢を禁ずるにあり。……⁽⁴⁷⁾中略……村々にてもむかしなきからかさなどさし、又は油などつけ、かみをゆひ侍るてふ、これ又奢に長じ、博奕など公行したりければ、力田の輩少なくなりて、弥生するもの少なく、つるには田里を出て江戸へ行侍るにぞ、江戸之人數次第に増し村々衰にけり。士農おとろへし行かば、工商何をもてくらし侍らんや。

定信は、農村荒廃の現象そのものは正確に認識しているものの、その原因については、先の谷田部落の農民教諭書と同様、農民が奢侈の風に染まり、「力田の輩」が減少したからだとしてとらえている。⁽⁴⁸⁾そして、農村荒廃は武家を窮乏させただけでなく、農民の村外流出―無籍人の増大により、身分・職業・居所を一体化させた幕藩制国家の社会的分業編成・封建的秩序維持方式の動揺を来たしていることに、強い危機感を抱いている。かかる危機意識が定信をして寛政の幕政改革へと駆り立て、風俗匡正、農民の余業規制、旧里帰農奨励、出稼ぎ奉公の制限等の政策により、本百姓体制の再建を図らせたことは周知のところである。

さて、先の谷田部落の農民教諭書は、天明四年の飢饉の節に出されたものであったが、概して教諭書には、飢饉の惨状を教訓にして、再びそうした事態を招かぬよう、常日頃から農業に出精し、儉約・貯蓄に努めるよう説諭すると

いったスタイルをとっているものが多い。それは、定信が「凶年はめずらしからぬ事にていままでなかりしぞ幸ともいふべし。おどろくにはあらず。凶には凶の備をなすぞよけれ。いでこの時に乗じて儉約質素の道を教へて磐石のかためなすべし」(「宇下人言」)⁽⁴⁹⁾と述べているように、凶作・飢饉という農民にとって最も悲惨な体験に訴えることによって、農民教化の浸透を図ったものに他ならない。例えば、野州黒羽藩庁、ないしはそれに近い筋において作成されたものと推定されている宝暦八年八月付の「百姓身持教訓」では、宝暦五年の凶作・飢饉が、また黒羽藩家中の農政家鈴木武助が著わした「農諭」では、天明三年のそれが、それぞれ教訓とされている。⁽⁵⁰⁾両書とも、農民教化のテキストとして他藩でも採用され、広く流布した。⁽⁵¹⁾そこには、領主階級の凶作・飢饉観が端的に表現されている。

天地の人を養ふ穀物さま／＼多き中に、就て人間生育の備へとみゆる物二種有、稻と麦と也、……ハ中略……すべて天道の人を養ひ給ふ備へ誠に有がたき事い、わんやうなし、天のほどこしの委き趣をかんがみて、五穀ハ皆人のために天より生ずる理をしるべし、右の内とりわけ稻と麦とハ他の穀物の類をはなれたる重き物也、農人たらん者ハよく、此天道のめぐみを仰ぎたつとみ、慎で天の意をうけ、村吏に稻と麦とを作るに、其術を尽し力を用ゆべし、農業ハ人間第一の大事にして万物の根本たることわりに聞く、皆人奢りだしやくの風俗にならひ耕作に力を尽さず、天道の意に違ふがゆへに、自然と天よりも不正の氣下り、春夏秋冬寒暑冷暖の氣不順となり、耕作みのらず、或時行り病イを生じ、色々難儀の事出来、世の中次第におとるへ及困窮事誠にあわれむべき事の甚しき也、然は人々天道をおそれ家業を怠るべからず候事(「百姓身持教訓」)⁽⁵²⁾

「農諭」の文意も、これと同じである。右は、「農業全書」巻一一付録の文章(この部分は貝原樂軒著)を手本としている。だが、楽軒にあつては、農民の職分だけでなく、為政者の「民に農業を教へ道びき賞罰を明らかにし、万の政事に心をとゞめ」、「万民に安業をほどこす職分」⁽⁵⁴⁾の遂行をも要求しており、むしろ後者の重要性を力説している。飢饉等の災難を招く原因についても、「凡王公といへども儉約をわするれば、国用たらずして下を貧り、不仁を行ひ災

を生ず。況四民に至り、財用を慎む事なくば、必うれへをまねき、災をいたさん事はかるべからず⁽⁵⁵⁾と、為政者の責任も厳しく追求している。しかし、「百姓身持教訓」・「農諭」では、凶作・飢饉は、農民が奢侈・懦弱の風俗にならない農業を等閑にして、「天道」の意に背いたため、天罰が下ったのだと、専ら農民の責任のみが指摘されている。そして、「唯一向に、農業のみをつとめて、天道天意にたがわざる様其職に心をゆだね、日々夜々に慮べき」⁽⁵⁶⁾「農諭」よう論している。ここでも、先の谷田部藩の教諭書と同様、農業は「天道」によって定められた農民の職分であるとして、その絶対性が強調され、その勵行が要求されている。

ここでのいう農業とは、作物栽培全般を指すものではなく、五穀の生産を意味していることが重要である。とりわけ稲と麦の生産が重視されており、それを行なうのが「天道」の定めたところの農民の職分であるとされているのである⁽⁵⁷⁾。これは、近世石高制社会における領主階級の伝統的な農業観・農民観であるが、右の教諭書では、農民が商品貨幣経済に巻き込まれ、稲・麦の生産よりも、畑方の商品作物栽培や余業の方に力を注ぐようになっていくことが、飢饉を惹起した原因であるという現状認識から、かかる伝統的な農業・農民観が改めて強調されているのである。黒羽藩の明和―寛政期の農村復興仕法を主導した「農諭」の著者鈴木武助が、商品作物生産を規制して主穀生産を強制し⁽⁵⁸⁾、幕府も寛政三年九月に、「菜種・綿種其外要用之品は格別、其余之分ハ成丈相止、米穀は勿論、麦其外雜穀迄も、穀物随分多く作出し候様致し⁽⁵⁹⁾」と布達しているのは、飢饉対策を考慮しているとはいえ、根本的には右の如き農業・農民観に基づいていたと思われる⁽⁶⁰⁾。

教諭書では、農業との関係だけでなく、あらゆる教化内容について、「天道」を持ち出すことによって、それに絶対性を付与し、農民に得心させようとしている。例えば、法度の遵守についても、「耕作に精力を尽し、かりにも悪事を慎、御法度を堅守り候へ、天道に叶ひ子孫永々安楽なるべき事、必然の理に候⁽⁶¹⁾」と説いている。幕藩制下の封建

的な社会秩序を朱子学の「天道」論の援用によって、自然的秩序として正当化・絶対化するものは、この時代の伝統的なイデオロギーである。だが、現実においては、商品貨幣経済の進展、農村荒廃の進行によって、社会秩序の動揺が著しくなってきた。こうした事態に領主階級は強い危機感を抱き、改めて「天道」論によって、幕藩制下の社会秩序の絶対性を農民に教諭し、その立て直しを図っているのである。

関東の幕領・私領においては、一八世紀後半特に寛政期以降、文化・文政期にかけて、以上のような論理を以てする農民教化を通じて、農民の内発的な生産意欲・秩序遵守の意識の涵養を図りつつ、農民の生産・生活条件整備のための貸付金、小児養育の奨励・旧里帰農の奨励・出奉公の制限等による農村人口の回復と荒地起返し、新規余業の制限、生活規制等々の具体的な政策の実施によって、本百姓体制の再建⁽⁶²⁾農村復興が進められている。

谷田部落の政策について具体的に知り得る史料を見出し得ないが、茂木領下菅又村の文政期の「諸事御触書覚帳」により、その基調はうかがえる。これを見ても、農民教化がさかんになされていたことが知られる。その趣旨は、農業に出精し、生活全般にわたって質素に努め、年貢を皆納すべしというものであるが、その場合、「此度御勝手向之儀、御用達共取調書差出シ候所、去戌年御收納減、御暮方御不足多、千三百両余之所、猶又当春積り立取調候所、御不足も相嵩候事ニ付、此度敵鋪御省略御取縮メ被仰付候得共、御領内ニ而も農業格別出精いたし、未進無之様ニ候得は、御取直ニも相成候……ハ中略……相定候年貢米之義ニ付、致出精上納仕候事、上江対し天道之冥加ニ有之候」(文政一〇年、江戸御用所より菅又村庄屋・役人中宛「申渡」と、藩財政の窮迫を農民に訴えることにより、農業出精、年貢上納を促し、しかも、年貢米は上に対する冥加として「天道」の定めたところのものである故、これを上納することとは農民の絶対的な勤めである、と説いている。また、「荒地再発いたし、其外ニも何なり共国益ニ相成候筋をいたし、成就之上は、是又急度御褒美可被下候」(同前)と、荒地起返し等、「国益」になることの実践を要求し、褒賞に

よって内発的な意欲を喚起せんとしている。

だが、先にみた如く、谷田部藩領の荒廢は、天保に向けますます進行しており、特に天保初年の凶作・飢饉により壊滅的な打撃を受けている。天保の凶作・飢饉の影響は、寛政—文政期の農村復興策の成果の程度によって差異があったであろうが、前掲の表4をみると、関東地方の人口は天保五年が最低となっており、全体的にみれば、その打撃はきわめて大きかったことがうかがえる。それ故、各領主とも、新たな農村復興・財政再建の方途を摸索しなければならなかったのである。

こうした中であって、文政六年以降二宮尊徳が進めていた野州桜町領（小田原藩主大久保家の分家宇津家の知行所）の復興仕法が成果をあげたことが、世間に注目されることとなり、天保以降、彼の仕法が広く展開していくことになった。主として小藩や旗本が彼の仕法を導入したのは、農村復興策を行なうにも資金に事欠く小藩・旗本にしてみれば、報徳金の運用によって事業を進める彼の仕法は、まさに渡りに船と映ったからに違いない。

〔註〕

- (1) 以上、秋山高志氏前掲「谷田部藩領安政四年積穀騒動」一六〇—一六一頁、大木茂氏「茂木の歴史」一〇九—一一五頁を参照。
- (2) 本稿で用いる谷田部藩細川家文書は、茨城県歴史館所蔵の写真版による（原文書は、栃木県芳賀郡茂木町茂木一、六〇九番地、八雲神社所蔵）。
- (3) 大木氏前掲書一二三頁。
- (4) 「旧復越法記録草稿」〔二宮尊徳全集〕第三卷、一八〇—一八一頁、以下、「全集」と略す。
- (5) 「越法発端記録草稿」〔全集〕第三卷、三頁。
- (6) 同前六頁、秋山氏前掲論文一六二頁、大木氏前掲書一四二—一六四頁、須永昭氏前掲「天保期の農村」八九—九一頁を参照。
- (7) 須永氏同前論文八九—九一頁。
- (8) 例えば、筑波郡の小田村は、慶長七年には村高一、六七八石余で戸数は一五〇戸であったが、その後新田開発の進展に伴い戸口も増加し、寛文七年の旗本横山氏による検地の結果、六六七石が打ち出されて二、三四五石余となり、戸口も二九四戸となっている。土浦藩領となっ

た元禄一年には、さらに三七八戸にまで増加している
〔筑波町史料集〕第三篇所収「おたまき」の解説参照。小田村に限らず、新田開発に伴い、本百姓の家の傍系統や隷属農民の新百姓への取り立て、他所よりの入百姓などによって農業人口の増加が図られた。

「世事見聞録」(日本庶民生活史料集成)第八卷、六六八頁)でも、「今彼辺(常陸・下野)の古老に問ふ御入国の頃より御四代様の頃(家綱將軍の寛文期前後)までは随分豊饒の地にて、段々人数沢山になりて新田畑も出来たる程の事也」(註・傍点、筆者、以下同)と記している。

(9) 「越法発端記録草稿」(前掲書三頁)。

(10) 金井円氏校注「土芥寇讎記」五七二頁。

(11) この点については、長野ひろ子氏も農村荒廢の歴史的前提条件として指摘されているが(「水戸藩の農村構造」、『茨城県史研究』第二九号)、新田開発と農村荒廢との關係を考える場合、後述する第二、第三の点も見落すことはできない。

(12) 日光街道は將軍・大名等の日光參詣のため通行量が多く、享保以降助郷村の範圍が拡大され茂木領も含められた(大木氏前掲書一七一―一八一頁)。日光街道の助郷村範圍の拡大、農民の負担の実態と北関東農村の荒廢化との関連については、河内八郎氏が下記の諸論で詳細に検討されている。「日光街道における宿駅と農村」(『栃木県史研究』第二号)、「日光街道助郷制の展開」(同前第

三号)、「助郷制の崩壊と宿駅制の変容」(同前第五号)、「日光社参と下野農村」(同前第九号)、「宝永五年日光社参と下野農村」(同前第一六・一七合併号)。「世事見聞録」(前掲書六六八頁)でも、国役と伝馬人足役負担の重さが農民を難儀せしめ、「堪へ兼て段々離散し荒地潰家出来る」と指摘している。殊に、荒地があつても村高を基準に賦課することから、その過重性が増加することを強調している。

(13) 例えば、熊山蕃山は、「新田畑は古地の害になるもの也。となりの害になるもあり。国には不毛の野山多是牛馬を養ふにたよりよく、薪をとるに足者也。新田これらの害となるものあり」(『集義和書』(補)、日本思想大系第三〇卷「熊山蕃山」四〇一頁)、「下に新田を殖し水をかけんとする故に、多くの古地を損ずるなり。新田の多きは国の為よろしからず。おこさざるにはしかじ」(『大学或問』、同前書四二〇―四二二頁)と、新田開発が既存の耕地の山野利用・水利等の生産条件を圧迫することになることを、指摘している。

(14) 須永氏は、北関東農村では寛文―元禄に小農経営が成立するが、新たに自立してきた小農にとって耕地・林野・用水をめぐる条件は劣悪であり、そのことが小農経営を金肥導入に執着させることになった、と指摘されている(前掲「近世後期北関東の農業構造」)。

(15) この点については、宝暦九年に常州の人眞壁用秀が記

した地方書「地理細論集」(「日本経済大典」第二巻、二一八—二一九頁)でも指摘されており、特に関東における大規模な新田開発が、この地方の水害を甚しいものにしたことが強調されている。

なお、笠谷和比古氏は、享保期の国役普請制度成立の背景には、新田開発による水害激発状況が存在したことを指摘されている(「近世国役普請の歴史的位置」、『史料』第五九巻第四号)。だが、この制度は、先の「世事見聞録」の指摘のように(註12参照)、荒地の存在にもかかわらず村高を基準に賦課する国役が、農民をますます疲弊させる因ともなる、という矛盾をも内包していた点に留意する必要がある。

(16)・(17) 「越法発端記録草稿」(前掲書三頁)。

(18) 大木氏前掲書二〇二頁。

(19) 今川家文書(旧台町村名主)は、茨城県歴史館所蔵。

(20) 大木氏前掲書一三六—一三九頁。

(21) 下菅又村の旧名主文書は、栃木県芳賀郡茂木町大字下菅又四八九番地山納武雄家と同下菅又四九六番地山納博家に分割所蔵されている。

(22) 大木氏前掲書一四一頁。

(23) 幕府の年貢収納量も一八世紀後半以降下落しているが(古島敏雄氏「幕府財政収入の動向と農民収奪の画期」、『日本経済史大系』近世下)、特に北関東農村では、支配領域を問わずその傾向が顕著であったことは、すでに多

くの論稿で明らかにされているところである。

(24) 寛政七年については、大木氏前掲書一三一頁、文化元年、文政一三年については、それぞれ「下菅亦村人別御改帳」、「宗門御改帳」(山納武雄家文書)による。

(25) 谷田部藩の「五人組帳」でも、身体不自由なるもの、離村した農民があれば、庄屋・五人組で助け合い、その分の年貢を納めるべきこと、という規定がみられる(大木氏前掲書一三五頁)。

(26) 「下野国芳賀郡村々相統筋永定免並取下场無年季定免之儀相伺候書付」(「全集」第二巻、九五頁)。

(27) 「越法発端記録草稿」(前掲書六頁)。

(28) 須永氏前掲「近世後期北関東の農業構造」

(29) 大木氏前掲書一五五—一五七頁。

(30) 「茂木夫食見積中勘土台帳」(「全集」第三巻、六三—六五三頁)。

(31) 大木氏前掲書一五七頁。

(32) 広瀬隆久氏「農村荒廃過程と中層農民の動向」(「歴史学研究」第四三六号)、須永氏前掲「近世後期北関東の農業構造」。

(33) 乾宏巳氏「荒廃期農村の特質」(「地方史研究」第一四二号)では、従来の研究成果に基づき正鵠を得た整理がなされているが、ここで上層農民の没落事例をいくつかあげられ、「質地集積は小農没落による未回収金の増加という商業高利貸経営の破綻を示す指標であり、小作収

益は期待できないため大高持のまま絶家する上層農も出現する」という指摘がなされている。

- (34) この点については、須永氏前掲「近世後期北関東の農業構造」で具体的に分析されている。

- (35) この点については、広瀬氏前掲論文で論じられている。

- (36) 常州・野州の諸藩・旗本の近世後期における財政について分析した論稿には、以下のものがある。竹中端子氏前掲「天保改革の片鱗―下館藩の場合―」、林玲子氏前掲「下館藩における尊徳趣法の背景」、植田敏雄氏「麻生藩の財政」(「茨城史林」創刊号)・「麻生藩財政に関する一考察」(「満井教授還暦記念論文集」、伊東多三郎氏「水戸藩財政収支の検討―享保と文政―」(「茨城県の思想・文化の歴史的基盤」、鈴木光夫氏「牛久藩の幕末財政改革」(同前書)、小室昭氏「笠間藩の化政改革―家中対策を中心として―」(「茨城史林」第三号)、鷹見安二郎氏「古河藩の財政難と藩政改革」(「古河市史研究」第二号)、須永昭氏「黒羽藩の藩政改革」(「栃木県史研究」第六号)、奥田謙一氏「近世後期における旗本井戸家の財政と改革」(同前第一三三号)、「弘化四年旗本高田家の家政改革と村」(「教育とちぎ」第二八九号)、白川部達夫氏「近政後期、一旗本の家政改革と農村の動向」(「佐野市史近世編論文集」)等。

- (37) 「趣法発端記録草稿」(前掲書三、四頁)。

関東農村の荒廃と尊徳仕法 (大藤)

- (38) 谷田部藩同様二万石の小藩である常州下館藩でも、この時期には財政難が深刻化し、尊徳仕法を導入しているが、それでも天保九年時の借財総額は三万五千両余であり(林氏同前論文)、谷田部藩の借財総額一三万両余というのはいかに多額かが分かる。

- (39) 「全集」第三卷、二七九―二八二頁。

- (40) 例えば、釜屋治郎兵衛の場合、天保七年段階で、領内村々への貸付金残額は二、三三一両余、領外へのそれは八九九両余にも上っている(「家株有物取調書上帳」、「全集」第三卷、九七一頁)。

- (41) 「趣法発端記録草稿」(前掲書四頁)。

- (42) 林氏は前掲論文で、下館藩の尊徳仕法導入及び実施に当たって、藩上層部を動かしたのは、城下町下館の御用達商人であったことを指摘され、それは、彼らが農村の晒木綿生産に買次商人として吸着していたことから、農村荒廃による自らの経営基盤の崩壊を食い止めるために、農村復興による本百姓体制の立て直しの必要性を痛感したからだと説明されている。

- (43) 「栃木県史」史料編・近世三、八五四―八五八頁。

- (44) 「間引禁命につき農民共へ教諭書」(同前書八五八頁)。

- (45) 二宮尊徳の場合は、後述する如く、ただ「天道」に委ねて生きていたのでは、自然の法則によって田畑は荒地と化し、「家」は潰れる、それ故、農民は人間として自律的・主体的に生きなければならないとして、「天道」

- (43) と「人道」とが対置されている。
- (46) 高橋実氏「旗本支配と知行所法の特質」(『茨城県歴史館報』第六号)で、常州茨城郡上安居村、下安居村、上飯沼村に知行地を有する旗本小菅氏が寛政六年に農民に下した「為申聞候趣」の全文が紹介されているが、それでも、農村荒廢によって弛緩していた「家」と「村」の秩序を立て直すことを意図した倫理規範が、説論されている。
- (47) 岩波文庫本「宇下人言・修行録」一一三一一一六頁。
- (48) こうした農村荒廢観は、幕府の法令にも、以下の如く、あらわに表現されている。「近来在方村々之もの共、耕作を等閑にいたし、却て困窮之儀申立、奉公稼ニ出候もの多、所持之田畑を荒置候類有之由相聞、不埒之至ニ候」(安永六年五月、「御触書天明集成」三〇一四号)、「百姓之風儀も近年榮耀かましく、おのつから業にも怠候様ニ相成候ニ付、手余地等出来いたし、手入等閑ニ付、作方も多分不宜様成行候事、甚以不可然候」(天明七年八月、「牧民金鑑」上巻、四七頁)。
- (49) 「宇下人言・修行録」五六頁。
- (50) 両書とも、「栃木県史」史料編・近世八に収載されている。
- (51) 同前書解題参照。なお、茂木領下菅又村の旧名主山納武雄家にも、「農諭」の写が伝存されている。
- (52) 同前書七五八頁。
- (53) 「日本農書全集」第一三巻、三六〇一三六一頁参照。
- (54) 同前書三三三—三三四頁。
- (55) 同前書三二〇頁。
- (56) 「栃木県史」史料編・近世八、七七三頁。
- (57) この点からすると、「余稼」「余業」に冠されている余は、原理的には「御百姓」の年貢米づくりの「本業」「家職」からはずれているという価値観を明瞭によくむものであった」という深谷克己氏の指摘は(江戸時代の兼業農家、「現代農業」第二二一号、一一九頁、正鶴を得ている、と思われる)。
- (58) 須永昭氏前掲「黒羽藩の藩政改革」。
- (59) 「御触書天保集成」六〇三七号。
- (60) だが、商品貨幣経済が進展している段階での主穀強制は、現実にはそぐわなかった。黒羽藩でも化政期の改革では、領内の特産物生産を奨励し、商品貨幣経済へ積極的に対応する方向へ転じている(須永氏前掲論文)。幕府の寛政以降の農村復興仕法においても、本文に示した法令にもかかわらず、現実には仕法を実行する代官のレベルでは、現実的な認識から、利益になる換金作物があれば積極的に作り試すよう指示している(須永昭氏「寛政期における幕府代官の地方支配の展開」、『栃木県史研究』一六・一七合併号)。
- (61) 「栃木県史」史料編・近世八、七五九頁。
- (62) 関東の幕領の復興策について具体的に分析した論稿と

しては、秋本典夫氏「北関東の荒廃とその復興策」(「北関東下野における封建権力と民衆」、須永氏前掲「寛政期における幕府代官の地方支配の展開」)があり、両者とも野州の幕領を対象としている。諸藩の復興策について分析したものは、小室昭氏「笠間藩の化政改革—農村

対策を中心として—」(「茨城県史研究」第七号)、須永氏前掲「黒羽藩の藩政改革」、「水戸市史」中巻(口)等がある。
(63) 山納武雄家文書。

二 農民と心学運動・尊徳仕法

(一) 荒村下の農民の思想形成と農事改良の特質

家督相続ハ、先祖より代々伝ひたる家材・田畑・山林等に、至迄皆預りの家材也。大切に相勤め、預りの物、何に品によらず、手入致し、損じたる品ハもとめ、一品たりとも不足にならぬ様に致し、子孫へ遜るべくハ相続人の第一の勤め也。然るを氣随ひ、自恣に成る物と心得る人間々多し。故に暮方行届き難く、終にわ大借などを致し、先祖より伝ひたる家材・田畑等売却ひ、先祖へ不孝而已ならず、其身迄も居所立所に迷ふ者あり。其訳ハ、我か物と思ふ故也。身上を堅く守るべきハ、部屋住でも何者にても堅く守るべきが、人たる道の一生の第一の勤と心得べし(「吉茂遺訓」)⁽¹⁾

家財・田畑・山林は先祖よりの預かり物である「家産」であり、「家業」に出精し、「家産」を減ずることなく子孫に譲り渡すことが、先祖およびそれに連なる父母に対する「孝」であるという觀念は、近世の農民に一般的なものであり、これこそが彼らの生活意識の核をなしていた。⁽²⁾

自分の生まれた村で、先祖伝来の田畑を耕し、先祖を祀り、また先祖の靈に見守られながら生産・生活を営み、死後は自分も「家」の先祖として子孫に祀られる—これが、この時代の農民の伝統的な人生のあり方であった。「家業」

である農業に出精し、「家」を存続させることは、自己の死後における魂の安住の場を確保することでもあった。欠落も、領主の収奪の重圧下で、勤労に努めながらも、生計が成り立たず、ぎりぎりのところまで追い詰められた農民がやむなくとった、それ自体、「家」存続のための手段という側面を持っていた。⁽³⁾

農村荒廃は、領主からみれば年貢収奪基盤の崩壊であるが、農民にとっては生産・生活、さらには魂の安住の場である「家」の崩壊である。荒廃は農民の精神をも侵蝕し、挫折感から生産意欲を失い、自暴自棄となって博奕諸勝負事や遊興に身を委ねたり、あるいは強盗などの犯罪に走る農民を生み出し、風俗の頹廃や治安の紊乱を招いていたことは、この期の種々の見聞記から知られるところである。だが他方では、こうした深刻化した農村の状況に強い危機感を抱き、精神・生活のあり方を深く内省し、「家」の再興・維持、農村の復興を実現するための原理・方途を真剣に摸索して、自力で更生せんと努力する農民も輩出した。⁽⁴⁾ 近世後期には、農民の間でも家訓や遺訓が多く作成されており、農民自身の手で農書も著わされている。⁽⁵⁾ これらは、そうした農民の思想的・実践的営為の表現であった。

また、この期には、寺小屋・私塾・郷校が簇生し、民衆教育が勃興しているが、⁽⁷⁾ それは、例えば、駿河国駿東郡下田町の郷校新民舎の綱規に、「学問ハ勉強シ成業ヲ期待スル事勿論ナリト雖トモ、農工商ノ者各身本業ヲ守リ其職ニ勤勵スル事、固ヨリ今日ノ要務ニシテ、即チ家ヲ治ムルノ基礎ナリ」と規定されている如く、農・工・商それぞれの家業に必要な知識の習得、生活倫理の修養によって、齊家の基礎とすることを本旨としていた。

最初に掲げた「吉茂遺訓」の著者田村仁左衛門吉茂は、寛政二年に下野国河内郡下蒲生村に生まれ、明治一〇年に八八歳で生涯を閉じている。下蒲生村も、近世中・後期には激しい荒廃に見舞われ、田村家もその埒塙の中にあつて大きく揺す振られた。田村家はこの村の草分け百姓であり、寛永一〇年には八六石余を所持していたが、元禄九年には三四石に減じ、延享四年には破産している。⁽⁹⁾ 田村家再興の担い手となったのは、分家から出て本家の家督を継いだ

吉昌とその子吉茂であった。

吉茂は、幼少より篤農家である実父に付き添い農業に出精し、文政四年、三一歳で家督を相続した。以来、天保一〇年に息子に家督を譲るまで家政再建に努め、天保期には再び村役人としての地位を確保するに至っている。慶応四年の所持高は二四石余で、昔日の面影こそないが、この村では上層に属する。吉茂は、家政再建の大役を果たすことができたのは、「先祖の陰徳」のおかげであると述べている。⁽¹⁰⁾ 彼は晩年こそ楽隠居の身となっているが、幼少より人生の大半は、農村荒廃の渦中において、「家」再興のために捧げられた。彼の強靱な自律性・主体性、および知識・思想もその過程で培われた。

吉茂は、天保一二年に「農業自得」を成稿している。この書は、序文で「後世の為に愚を恥て著す所の農書。実父の自得くお受て、予若年より農業を好み、余念なく勤め、終に万穀諸草木至迄、天地・陰陽・五行、自然の理有ことを發明して農業を勤め居ける。然るに、天保四癸巳年凶作、同七丙申年大荒年といへとも、兩年ともに稲を始、諸作物共実のり多し、是全農業わ、天地生養の根本たる徳ならんと心付、冥賀を施さんために、自得の大略を次々に記す」と述べているように、若年より父に従って農業に精勵してきた過程で「自得」した農法を記したものである。その「自得」農法が、天保四・七年の大凶年に際しても大きな成果をあげたことにより、その技術への確信、さらには農業の「徳」に対する確信を得たことが、これを農書にまとめ世に広めんとした直接の動機となっている。

その農法の要諦は、以下の文章に端的に示されている。「穀物ハ生養の根元たる宝の第一也。仍而種を下す時ハ、天地と種を三拝して、土神へ五穀成就お願べし。其願方は、種のあらみ方を第一として、種の多少、蒔時を違ず、手入、肥培の過不足、虫のがひをのそぎ、土地厚薄、旧地・恐地をあらみ、作物の相生相尅の理をたかぬ様に心掛、五穀成就を願へし」。⁽¹²⁾ すなわち、熊代幸雄氏の言を借りれば、⁽¹³⁾ 採撰種の敵密化、播種の「量規定」の確立、適期播種

による以上の定踐、四これに應ずる肥培・除害等、管理の集約化、因合理的な作付け体系、となる。

吉茂は、「農業自得」の中で、圃場別に播種期・播種量・品種名・肥培・收穫量を記した耕作帳を作成し、実験と観察の結果を記録・整理していく必要性を説いている。彼の農法は、こうした実験と観察の積み重ねによって「自得」したものであり、まさにこの点が、この農法が科学的農法の先驅をなすものとして、従来高い評価を得ている所以である。殊に、当時の農学者の通説であつた雌穗・雄穗論を、種子変化についての科学的・合理的観察によって否定し、変わり種を除き充実種を撰ぶ独自の撰種法を打ち出している点に、吉茂の「自得」農法の真髓がよく示されている。

吉茂は、農業技術の改良と共に、生産費・生活費・収益性等の厳密な計算に基づいて、農家経営の改善にも努めており、「農家肝要記」(天保一二年成稿)、「農家根元記」(明治三年成稿)、「農業自得付録」(明治四年成稿)等を著わしている。⁽¹⁴⁾彼の経営合理化への努力は、「借金と言ふりやうはへハ恐しき物也。夜ねむりたる内ハもちろん、一寸と大小便をたす内も利かくふ事止む時なし。依て、借金と言ふ兩はへに取付れてハ、其身を生とられるのミならず、家財屋敷迄も利に喰い取らるゝ也。恐れ慎むべし。依て、是ヲ除る為に右ニ記シ置なり。片時もわするべからず」(「農家肝要記」)と述べているように、借金こそが「家」没落の因であり、債務奴隷化は、農民が農事の「緩急、前後、軽重」⁽¹⁶⁾(同前)に配慮を欠いている――一年間の農作業に應じた合理的な労働力配分をしていない――ために起こる、という認識が動機をなしていた。

彼の農法・経営論は、備荒への配慮から主雑穀生産が中心をなしているが、しかし、決して自給的農業に固執し、商品貨幣経済への対応を考慮していなかったのではない。彼の場合、単に換金性の高さのみに目を奪われて作付けすることの危険性を指摘し、各作物ごとに自然環境への適応性、反当り生産費および年貢・小作料等の総額と收穫物の販売代金との過不足、収益性を厳密に検討した上で、合理的な作付け体系を確立し、以て安定的に収益を確保すると

ともに、備荒対策を万全にすることを目的としていた。「農家根元記」で、元文期より明治三年までの物価の変動について考察を加えているのも、商品貨幣経済の渦中において経営を維持していくためには、経済の動向に留意し、有効に対応せねばならなかったからである。

吉茂は、「自然の理」を究め、それに即して農法と経営を合理化することによって、農村荒廃の克服を図ったのであるが、それは、近世的農業経営形態⇨家族労作経営形態を基本とするものであり、それ故、その合理化の方向は、労働過程の変革による労働生産性の向上ではなく、多労多肥投下によって栽培管理の集約性を高め、反当り収穫量を増大させること⁽¹⁷⁾にあった。したがって、それを実現するためには、家族労働力を最大限に燃焼させることが必要となる。「吉茂遺訓」（明治六年成稿）には、吉茂が「守儉不撓」の生涯の中で形成してきた生活思想が、子孫への教訓として余すところなく語られているが、そのモチーフは、勤勉・儉約を本とする禁欲的な生活態度を自覚的・主体的に樹立し、「家業」に出精して「家産」の保持を図ること⁽¹⁸⁾にあった。これは、当時の家訓・遺訓に遍く共通するところであり、家が経営単位をなしていた段階では、その成員の労働力を最大限に発揮することが、経営存続のための要諦とならざるを得ないことに基づく。

最初に紹介した文言に示されているように、農民にとつては、先祖より預かった「家産」を減ずることなく子孫に譲り渡し、先祖の祭祀を絶やさないことが最大の責務であり、これこそが、先祖およびそれに連なる父母に対する「孝」の第一とされていた。この「孝」を実現するための日常生活の規範が、勤勉・儉約であったのである。

ただ吉茂は、「むりに家禄を増し金⁽¹⁹⁾を積⁽²⁰⁾み子孫へ譲る」ことは、「其人の大孝にして子孫へは甚⁽²¹⁾あた也。其訳ハ、子孫の者家業⁽²²⁾過て家業をも覚⁽²³⁾ひず、遊芸遊参等を好⁽²⁴⁾み奢りに長し、終⁽²⁵⁾わ家を亡⁽²⁶⁾す根元と知るべし」と、これを戒めている。「衣食住の三ツハ分限より内ばよしとす⁽²⁷⁾」というのが彼の基本姿勢であり、これは、二宮尊徳の「分度」論に通ず

る考え方である。そして、「金子はたまるわよし、ためるわ悪しといへ共、ためるとたまるわ同様なれ共、ためるにわ無利^(理)という利を多く取りためねば大金持にわならぬもの也。二三十年に大金持になる者世間多し、何事によらず世間のあり様を能々気を附て見聞して、己か身の慎ミ方を能々考へ見べし⁽²⁰⁾」、「無利取り無利遣りハ、恥もかきツミもあり。終にわ短命の元手となるものと心得てよし⁽²¹⁾」、「大金持になるも、あまり望むことにもあるまし。金子を多く持と色々⁽²²⁾の事にて心支も多し。事ニハ世間見るに、長持もなく亡ぶる人多し」と、高利貸によってあこぎに大金持ちになろうとすることを敵に戒め、それよりも、「借金と言う阿はひに取り付れてわ叶わぬもの也。用心専一也⁽²³⁾」と、借金をせぬよう用心することの方が肝要である、と説いている。

こうした吉茂の考え方は、高利貸は他人の「家」を滅ぼすばかりでなく、ついには自分の「家」をも滅ぼし、農村を荒廃させる因となっているという現状認識から生まれたものであり、それ故、自己の「家」および「村」の存続を図るためには、経済活動が倫理性に裏付けられる必要があることを、強く主張するのである。彼は、「義理」・「正直」・「信心⁽²⁴⁾」を重んじ、「私欲」を厳しく排撃している。「儀理無き者ハ実子たり共、家名相続ハ遜るべからず⁽²⁴⁾」とまで言い切っている。以上の如き、経済と道徳の一致の主張は、この期の民衆思想に共通するところのものであり、二宮尊徳の場合は、それをより理論化して社会思想にまで高めている⁽²⁵⁾。

吉茂は、農村の荒廃化の中で没落した「家」を再興する営為を通じて、「不撓」の精神・主体性を培い、極度に禁欲的な生活実践に裏付けられた思想を形成し、また「自然の理」の「自得」に基づく科学的・合理的な農法・経営方法を創り出した。彼のような篤農・老農は荒村下では数多く誕生したことは、周知の事実である⁽²⁷⁾。また、一般の小生産者の場合、たとえ家訓・遺訓を著わさなくても、勤勉・儉約の実践は、経営の特質からして、より切実な課題とならざるを得ない。尊徳が「貧家の者は活計の為に、勤めざるを得ず、且富を願ふが故に、自ら勉強す⁽²⁸⁾」と述べている如く、

貧者は、いわば自明の當爲として、それを実践せざるを得ない条件下に置かれていたのである。

(二) 心学運動の展開と衰退

前節で検討した如き、荒村下の農民が直面した課題に即し、かつ領主の政策とも関係しつつ、農村更生を図る様々な社会運動が展開した―心学・国学・不二道・道教等の教化運動、大原幽学・二宮尊徳らの農村復興事業等々⁽²⁹⁾。その中でも、展開の範囲、社会的影響力からみて、心学運動と尊徳仕法が注目される。そこで、まず尊徳仕法に先行して展開した心学運動について概観した上で、尊徳の思想・仕法の原理について考察を加えることにしたい。

享保期に京都において石田梅岩が創唱した石門心学は、その後、彼の門流に相承され、活発な教化運動によって、地域的にも階層的にもきわめて広範囲の人々に受容された⁽³⁰⁾。

梅岩の思想の根本をなすのは、「心を尽し性を知る」ということである。「心を尽し性を知り、性を知れば天を知る……△中略▽……心を知るときは天理は其中に備る。其命に違ざる様行ふ外他事なかるべし」⁽³¹⁾。この「性」は、普遍的實在・規範であり、一切万物の根源である。「心」を尽くし「性」を知ることによって、天理を身に受けた人間としての根源的な自覚に至ることができ、かつ規範は、外在的に自己を規制するものではなく、自己の心に内面化して内在的なものになり、その実践は自己の心の必然的な実現となる。梅岩の説く儉約・正直等の実践道徳は、そこに基礎が置かれていた。

梅岩の理論は儒学の性理説に基づいているが、しかし、「心」を儒学の如く、形色を離れた一般的なものとみなないで、形色の中に顕現する具体的な普遍にして特殊なるものとして把握したところに、その独自性が存した。梅岩のこうした理解は、「形に由る心」という言葉で表現されている⁽³²⁾。こうした考え方からすれば、「心」は武士にあっては武

士の道として、町人にあるは町人の道として現われることになる。

士、農、工、商は天下の治る相となる。四民かけては助け無かるべし。四民を治め玉ふは君の職分なり。士は元來位ある臣なり。農人は草莽の臣なり。商工は市井の臣なり。臣として君を相るは臣の道なり。商人の売買するは天下の相なり。細工人に作料を給るは工の禄なり。農人に作間を下さるゝことは是も士の禄に同じ。天下万民産業なくして何を以て立つべきや。商人の買利も天下御免しの禄なり。夫を独売買の利ばかりを欲心にて道なしと云ひ、商人を悪んで断絶せんとす。何以て商人計を賤め嫌ふことぞや。(33)

梅岩は、幕藩制社会の身分制秩序を否定はしていない。だが、四民がそれぞれの職分（家職）を遂行し、天下に奉ずることによって社会は成り立っているであり、天下への寄与という点では、士・農・工・商の職分も同等の価値を持っている、と強く主張していることに留意せねばならない。その主張は、士・農・工・商それぞれ職分は異なっているけれども、そこには普遍的な道が存するという認識に立っている。彼は言う、「士農工商をのく職分異なれども、一理を会得するゆへ、士の道をいへば農工商に通ひ、農工商の道をいへば士に通ふ」(34)と。こうした見解は、従来きわめて非道德なものとみなされてきた商業活動を倫理的に正当化し、四民の最下位に位置づけられている商人の存在の社会的意義を強調せんがために生まれたものである。(35)

彼によれば、商人の職分は、「余りあるものを以てその不足ものに易て、互に通用するを以て」(36)天下の人々に奉仕することであり、それ故、売買によって得るところの利潤は、その職分の遂行に対する正当な報酬であって、先の引用文の如く、士の俸禄にも比せらるべきものとされているのである。こうして、商業活動を倫理的に正当化することにより、商人をして精神的な劣等意識を克服させ、信念をもって自らの家業に出精せしめんとしたのである。

だが、梅岩の直接的意図が、商人には商人としての道があることを教えるにあつたとはいへ、商人の道を徹底的に原理的に追求したことにより、彼の学は単なる町人の哲学に止まらず、万人に共通する人間としての生きる道を説く人間学としての性格を持つことになったのである。それ故、後に心学が精神修養の学として、あらゆる階層の人々に受容されていくことになった。彼の思想の根本をなしている「性」は、各人が儉約に努め、正直に自己の職分（家職）を遂行することによって、「自得」せらるべきものであつた。封建的身分制の桎梏の下にあつて、それを自明の前提としつつも、人々（特に道德的劣等者とみなされていた農・工・商民）が人間としての自覚と信念をもって生きるべき道を説いたところに、彼の心学の本質があつたのである。⁽³⁷⁾

石門心学は、最初、社会・経済の変動によって「家」没落の危機意識を強めていた上方の町人層に、それを克服する生活原理として受容されたが、その後、梅岩の門流の者たちの活発な教化活動により、全国的に普及し、農民層や武士層にも受容された。

安永八年、中沢道二が江戸へ進出し、参前舎を開いたことにより、それを拠点に関東・奥羽地方にも急速に普及した。幕藩制解体過程にあつて、人々は様々な矛盾・困難に直面し、それを克服し「家」を存続させていく原理を求めていた。それが、修身齊家の道を説く石門心学が急速に普及した社会的背景となつていた。⁽³⁸⁾ また、石門心学は、それぞれの職分（家職）に即した人間道を説き、以て「家ととのひ国治り天下平なり」という齊家治国平天下を実現せんとするものであるだけに、幕藩制国家の秩序維持のイデオロギーとして機能しやすい側面を有していた。それ故、激しい農村荒廃に見舞われていた関東・奥羽の諸領主は、農民をして職分（家職）である農業に出精させ、農村復興と社会秩序の回復を図るためのイデオロギーとして心学に注目し、心学者を領民教化に動員した。

常州・野州では、幕府代官所の他、水戸、土浦、府中、牛久、下館、谷田部、宇都宮、大田原、烏山、壬生、足利

の諸藩が、心学講師を招いて領民教化に当たらせている。⁽⁴⁰⁾ 村のレベルでは、村役人層が心学導入の主体をなしていた。心学運動は、慈善的な救済事業を行なう場合もあるとはいえ、それはあくまで付随的なもので、組織立ったものではなく、あくまで精神面の教化が主体であった。その点、精神面の教化と具体的な復興策を組み合わせ、組織化・体系化した二宮尊徳の仕法とは異なっている。また、農村荒廃の根因である封建的収奪に対し、尊徳仕法では「分度」を設定してこれを規制しているが、心学運動では収奪を規制することはしていない。石門心学はもともと上方の町人の精神修養の学として生まれたものであり、それ故、まさに農村荒廃の渦中から生まれた尊徳の思想・仕法とは、現状認識においても、復興の具体的方策においても、著しく劣っていた。

農村荒廃の現実には、単なる精神面の教化によって効果をあげ得るようなものではなかった。殊に小農民の場合、いくら儉約・正直に努め家業・農業に出精しても、領主・前期的資本の収奪にさらされている限り、絶えず没落の淵に追い詰められ、一揆・村方騒動に立ち上らざるを得ない。常州筑波郡小田村（土浦藩領）では、村役人層が主体となつて寛政期に心学講舎尽心舎が設立され、以後文政期にかけて心学運動が活発に展開された。⁽⁴¹⁾ 村役人層は、心学による小前層の教化によって、農村の復興と村落秩序の再編・強化を図つたのであるが、現実には、年貢勘定や村入用徴収等をめぐつて、小前層は越訴や村方騒動を度々起こしている。しかも、出入の中心となつていた農民は、心学運動に熱心な者たちであつた。精神面の教化のみで具体的な施策を伴わない心学運動では、経営の安定と村落秩序の回復は実現し得なかつた。天保に入ると、尽心舎の活動は衰退していつている。そして、心学運動に熱心に参加してきた小田村田向の名主長島尉信は、心学に見切りをつけた後、実務的な農政学の研究に転じている。⁽⁴²⁾

下館藩でも、天保期に入ると心学運動は急速に衰退した。藩内の社会・経済の諸矛盾は、心学による庶民教化では解決がつかなかつた。そして、心学に代わつて、精神面だけでなく藩財政をはじめ農民や町人の経済・生活面の改

革・更生をも目指す尊徳の思想と仕法が、藩士や城下町商人の気持をとらえていった。事実、天保八年以降下館藩に尊徳仕法の導入が図られたが、その際、藩を説得してその導入・実施を推進した御用達商人中村兵左衛門は、寛政以来心学運動の中心にあった人物である。⁽⁴³⁾ 谷田部藩・烏山藩でも、天保期には心学に代わって尊徳仕法を導入している。駿河国駿東郡の村々でも、文政一〇年以降村役人の主導の下に心学運動が展開し、この地方の民衆教育にも大きな影響を与えていたが、天保の凶作・飢饉によって農村荒廃が決定的になった時、もはや心学の精神主義ではどうすることもできなくなった。心学にとって代わったのは、やはり尊徳仕法であり、天保八年に尊徳が飢饉対策のために駿東郡七八ヶ村を巡回したのが契機となって、北駿の指導的農民たちは心学運動から転じて尊徳仕法の実践者となった。ここに、北駿地方に一大報徳運動が展開することになり、尊徳の理論に基づき「余力学文」が民衆教育の普及と徹底を支える教育観として実質的に確立した。⁽⁴⁴⁾

天保以降、心学運動が衰退していったのは、全国的な傾向であった。⁽⁴⁵⁾ それは、天保期の凶作・飢饉によって深刻化した幕藩制解体過程の諸矛盾は、もはや心学の精神主義では解決できないことを人々が自覚したことに基因していたことが、如上の諸事例から知られよう。そして、関東およびその周辺の地方では、心学運動に代わって尊徳仕法が広く展開していった。

尊徳の思想・仕法の様式は、文政六年より実施されていた野州桜町領（旗本宇津家知行所）の復興仕法推進の過程で体系化されており、それが一応の成果をあげたことにより、天保の凶作・飢饉を契機に、領主や農民・商人らから仕法の依頼が相次いだ。主要な仕法実施地は、谷田部・下館・烏山・小田原・相馬・掛川等の諸藩領、真岡代官所管轄下の幕領、日光神領、宇津・川副・斎藤・中根・佐々木等の諸旗本知行所等々であり、その他、武家・商家・農家の個人的な家政再建仕法も数多く行なわれている。地域的には、福島県から滋賀県に及んでいる。⁽⁴⁶⁾ 尊徳自身が指導し

た仕法は主として領主行政の一環として行なわれているが、遠州地方では、農民が自主的に組織した報徳社が主体となって仕法が推進されており、それが拠点となって、明治以降、報徳社運動が全国的に展開していくことになる。

(三) 二宮尊徳の思想と仕法の原理

尊徳は、何よりも「言行一致」⁽⁴⁷⁾を重視した人物である。荒廃の極にあった農村の現実を直視し、如何にしたらそれを復興できるかという問題意識に立って独自の実践哲学を形成し、その哲学に基づいて理論的体系性を持った農村復興仕法を考案して、生涯をその実践に捧げた。

それ故、我々は、まず彼の思想を内在的に考察し、彼が仕法によって実現せんとしたところを十分理解した上で、その仕法が現実の歴史的諸関係の中にあつて客観的にどのような機能を果たしたか、またどのような矛盾に直面せねばならなかったかを考察していく、という手順を踏まねばなるまい。ここでは、尊徳をして思想形成・社会的実践へと駆り立てた内発的な契機、およびその立脚点、そしてそれによって形成された思想および仕法の原理について、少しく検討しておきたい。特に、彼の思想・仕法の歴史的な性格を考える上で、その農民観・社会観・政治観、そして現実の農村荒廃観を中心に考察を加えることにする。

二宮尊徳、通称金次郎は、天明七年七月二三日に相模国足柄上郡栢山村（現、小田原市栢山）に生まれた。天明の飢饉により、まさに農村荒廃が極に達していた時期にこの世に生を受けたわけである。父利右衛門が家督を相続した頃には、二町三反余の田畑を所持していた金次郎の家も、打ち続く災害によって没落の一途を辿った。さらに寛政一二年には父を、翌々享和二年には母をも失った。金次郎一六歳の時であった。財産も父母も失った彼は、一人「荒地起し返し、米麦取増し、口腹を養ひ、家名致相続度、一途に力を尽し」⁽⁴⁸⁾た。「家」再興の悲願を精神的支えとして、赤

裸挺身荒地に鋌を打ち込み、すべてを「無」から切り開いていく刻苦精勵の体験が、彼の人間としての主体性を鍛え上げ、また彼の思想形成の原点となった。

「夫誠の道は学ばずしておのづから知り、習はずしておのづから覚へ、書籍もなく、師匠もなく、而して人々自得して忘れず、是ぞ誠の道の本体なる……ハ中略V……夫我教は書籍を尊まず、故に天地を以て経文とす」と語っているように、彼の思想は、天地の運行とともに営まれる農民としての生活の中で、自然および人事の理を「自得」することによって形成されたものである。この「自得」の精神こそがこの期の農民の思想形成を支えるものであったことは、先にみた田村吉茂の例からも知られるところである。

金次郎は、廢田を開墾して、そこに他家の捨て苗を拾って植えたところ、その秋一俵の收穫を得た体験から、「積小致大」の原理を悟り、「家を興さんとは思はゞ、小より積初むべし」と、「家」再興の方途をそこに見出している。この例などは、農民としてのごく日常的な体験の中に、普遍的な原理を見い出していく「自得」の精神を象徴的に示しているといえよう。⁽⁵¹⁾ 金次郎が「自得」したこの「積小致大」の原理こそが、彼の「家」再興を目指す勤勞、さらに後年の社会的な農村復興事業を根底において支えたのである。そして、「小より積初む」彼の勤勞の「徳」に対し、天地自然が大きな收穫を恵む「徳」を以て報いてくれ、それによって「家」再興を達成した体験が、「天地人三才の徳」に報いることを説く「報徳」思想の淵源となった。⁽⁵²⁾

「家」再興の悲願に燃え、農業に精勵する過程で、金次郎は自己の主体性を確立し、思想を形成していったのであるが、こうした生き方、思想形成の仕方自体は、先述した田村吉茂もそうであったように、当時の農民に一般的に共通するところのものである。だが、自家・自村の再興に止まっている限りは、その思想も「家・村」の論理的枠内に止まり、それを超えて社会的思想・社会的農村復興運動へと発展していく契機は存しない。金次郎自身、後年、「私

儀幼少之時、父母に後れ、困窮致難浹居候儀に付、如何様共、貧苦艱難を免れ、親先祖之跡式を致相統、安く食ひ、暖に衣、今日を安樂に暮す、私欲身勝手而已、一途に存込、相勵罷在候」⁽⁵³⁾と、自家再興の勤行を、私欲のみしか念頭になかったと、反省をこめて述懐している。

彼をして、その自己中心的な個人的自覺を超えて社会的人倫的自覺に至らしめる契機となつたのは、文政五年、小田原藩主大久保忠真より分家宇津家知行所野州桜町領の復興を命ぜられたことである。「不容易大業に付、達て及辭退候処、不得止事被仰付候に付、自分一己之安樂自在を願ひ求るより、命令に随ひ、荒地を起し、潰を取立候方、天理にも相叶可申哉と致憤發、身代限り不殘差出」し、以後、「凡二十余年之間、荒地起返し、入百姓人別増仕法昼夜尽心魂、取行」⁽⁵⁴⁾なりこととなつた。

先述した如く、当時の農民にとって、先祖伝来の田畑を保持することは先祖に対する最大の責務であり、それを売り払って仕法資金をつくり、他家の再興に乗り出すこと決意するまでには、大きな心理的葛藤があつたはずである。金次郎自身、その時の複雑な心境を次のように語っている。

「予極貧の家に生れ孤となり、一家の廢亡を興し父母祖先の靈を安せんと欲し、日となく夜となく心力を尽し、其始一苞の米を種として遂に廢家を挙げ祖先の田圃を復し聊か追孝の道を立るに至れり。豈図んや君公の知を受け宇津家の采色を旧復せよとの命を蒙んとは、今忠を尽さんとすれば必此家を破り不孝に陥んか、孝を全くせんとせば君命を廢し忠義を全くすること能はず」⁽⁵⁵⁾。先祖父母に対する孝と君公に対する忠との狭間に立ち、両者の矛盾に悩み抜いた末、彼は次の如く、その矛盾を止揚するに至っている。「元來忠孝一道にして二道あるにあらず。人至孝なる時は忠自ら其中にあり。至忠なる時に孝もまた其中に存せり。君命を得ざる時は一家を興し祖先の祭祀を永くするを以て孝とせり。一度君の知を得て百姓を安ずるの命を受くるに至ては此民を安ずるを以て孝とせん。若し仁君の命を廢し假令

億万の財を積一家の繁栄を以て十分の祭祀を尽すといへども、父母の靈必ず不孝の子となさんこと明かなり。僅々たる一家を廢し、万民の疾苦を除き、上君の心を安じ、下百姓の經營を安ぜば、父祖の本懐何事か之に如んや」⁽⁵⁶⁾かくして、「一家を廢して万家を起こす」覚悟を決め、自家の田畑家財をすべて売り払い、それを仕法資金の足として、桜町領の復興に乗り出すことになった。

以上の如き内面的な葛藤を経て、彼は自家の存続・繁栄のみを願う自己中心的な考え方から脱却し、「生涯一途に世のため人のためのみを思ひ、国のため天下の爲に益ある事のみを勤め、一人たりとも一家たりとも一村たりとも、困窮を免れ富有になり、土地開け道橋整ひ安穩に渡世の出来るやうにと、夫のみを日々の勤とし」⁽⁵⁷⁾という社会的人倫的自覺に至ったのである⁽⁵⁸⁾。

尊徳の「報徳」思想・仕法の淵源は彼の一家再興の体験に発するが、一つの知行所の復興を実現するためには、それを「家」の論理を超えて社会化せねばならない。長年にわたり悪戦苦闘して桜町領の復興事業を遂行していく過程で、彼の思想・仕法は陶冶され、社会的な思想・仕法様式へと体系化されていった。

桜町仕法が一応の成果を収めたことに自信を得た彼は、天保五年に「三才報徳金毛録」(以下、「金毛録」と略)・「報徳訓」を著わしている。「金毛録」は、天地間の諸事象を根本的に考察することを通じて把握した理法に基づき、人類の生活をして永遠に安泰を保ち得る方法を開示したものであり、そこには彼の全思想体系が示されている⁽⁵⁹⁾。

この書で、彼は、宇宙の根元(大極)から天地万物、現実世界の諸事象が生成する過程を円形の図を以て進化論的に説明しているが、その宇宙の根元は混沌として未だ未分化の状態であり、彼はこれを「空」の円で示している。この「一円空」の概念こそが、彼の思想の根本をなすものである。すなわち彼は、男女・君臣等々、現実世界において対立する関係にあるものも、その根元は同一なのだと一元的に把握することにより、その関係を相対化し、それ故、

私欲を排して他と敵対しない「一円空」の心境を開き、それをすべてを慈しみ生かす「一円仁」の徳で満たし、この「一円仁」の心をもって自他ともに幸福になれるよう助け合う絶対愛の絶対行に生きるべきことを説くのである。⁽⁶⁰⁾

さて彼は、一円混沌の宇宙の根元から五大・体・気の動きによって、天界・地界・人界が開闢したことを説明した上で、人間社会の成立について、次のように説明している。

それ本は一円無田なり。無田変じて一田を発す。一田あれば十田を発す。十田あれば百田を発す。百田あれば千田を発す。千田あれば万田を発す。万田の本を想へば無田に帰す。田なければすなわち生養なし。田あるによって生命を育つ。田徳あるが故に君は君たり。田徳あるが故に父母は父母たり。田徳あるが故に自己は自己たり。田徳あるあるが故に妻妾は妻妾たり。田徳あるが故に子孫は子孫たり。田徳あるが故に眷属は眷属たり。田徳あるが故に衆民は衆民たり。田徳あるが故に財宝は財宝たり。田徳あるが故に交友は交友たり。田徳あるが故に諸芸は諸芸たり。田徳あるが故に車馬は車馬たり。田徳あるが故に万器は万器たり。もし田徳なければ、人倫をしてついに人倫たらしむるを得んが。⁽⁶¹⁾

つまり彼は、田地よりの生産物「田徳」こそが人間社会の基盤であり、諸々の人間関係および文化・道徳などはその上に成り立っている、と考えているのである。その田地は「一円無田」の状態から人間が刻苦して切り開いたものであり、それが基礎となって人間社会は成立したのである。こうしたいわば唯物史観的な社会成立史観は、彼自身が農村荒廢の進行の中で「一円無」の荒蕪に帰した自家の田畑を自力で切り開くことによって一家を再興した体験に裏付けられている、と思われる。そして、かかる社会観から、農業・農民の存在の重要性を力説するのである。

社会の基盤である田地は、決して自然に生じたものではなく、人間の自然への主体的な働きかけによって開かれたものであるとみる以上、尊徳にあっては、当然、「天道」『自然と「人道」』作爲とが区別して考えられることにな⁽⁶²⁾る。

夫元一円、原、国民之衣食、從、天、量、地、理、逆、天、開、田、畠、從、天、為、自然、名之謂、天道、以、人、為、作、事、名之謂、人道。人道、開、田、畠、天、道、廢、田、畠、人、道、植、五、穀、天、道、為、生、育、天、道、為、自然、人、道、為、作、事、天、道、和、人、道、百、穀、結、実、法、原、一、變、為、田、田、一、變、為、稻、稻、一、變、為、米、米、一、變、為、人、⁽⁶³⁾

「天道」と「人道」を一体視する朱子学の自然的秩序観は、いわゆる学問の世界においては、获生徂徠が自然と人間を分離して以来崩壊しつつあったことは周知のところである。⁽⁶⁴⁾だが、そこでの作為の対象は制度であり、作為主体は武士階級に限定されていた。そして、一般庶民は相変わらず愚民とみなされ、彼らの人間としての自律性・主体性は無視されていた。先に検討した領主の農民教化においても、ただひたすら「天道」によって定められた職分・人倫を勵行し、天下の法度を尊守して生きるべきことが力説されている。これに対し、農民として生まれた尊徳が、自らの農業体験に基づき、人間と自然との関係について原理的に考察し、生産者である農民の人間としての自律的主体性と、その作為の意義を、理論的に根拠づけた点は注目される。

本来農業は、自然的秩序観と最もよく表象的に結び付く經濟營為であり、その社会的基盤となっていたのである。⁽⁶⁵⁾しかし、尊徳の眼前にあるのは打ち続く天災によって荒廃した農村であり、彼自身の生家の田畑もまた、それによって荒蕪に帰してしまった。そこから立ち直ったのは、刻苦して荒地を切り開いた彼自身の人間的力であった。こうした彼が生きた時代の社会状況およびその中の体験が、農民の生活は決して「天道(理)」―自然の恩恵のみによって成り立っているのではなく、農民自身の主体的營為こそが、自らの生活および社会を成り立たせている根本であることを、実感させたに違いない。

「天理に任ずる時は、皆荒地となりて、開闢のむかしに歸る也、如何となれば、是則天理自然の道なれば也」⁽⁶⁶⁾。「自然の道は万古靡れず、作為の道は怠れば靡る、然るに其人作の道を誤て、天理自然の道と思ふが故に、願ふ事成らず思ふ事叶はず、終に我世は憂世なりなどといふに至る。夫人道は、荒々たる原野の内、土地肥饒にして草木茂生する処を田畑となし、是には草の生ぜぬ様にと願ひ、土性瘠薄にして草木繁茂せざる地を秣場となして、此処には草の繁茂せん事を願ふが如し、是を以て、人道は作為の道にして、自然の道にあらず、遠く隔りたる所の理を見るべきなり」⁽⁶⁷⁾。如上の言葉は、「天道」は自然の道であり、「人道」は作為の道であるとする尊徳の見解が、荒村下での体験の中で「自得」されたものであることを、よく示している。それ故、荒廃から立ち直るためには、何よりも農民自身の

主体的勤労こそが基本だという観点から、彼らに人間主体としての自覚、自発的な勤労意欲を促すのである。⁽⁶⁸⁾

だが、決して彼は、「天道」と「人道」とを対立関係においてのみとらえていたのではない。先の引用文に、「人道植五穀、天道為生育……ハ中略……天道和人造、百穀結実法」と述べているように、「天道」と「人道」とが和合することによって、はじめて作物は実を結ぶのだと考えているのであり、それ故、天地の徳と人の勤労の徳、いわゆる「天地人三才の徳」に報いる「報徳」の道を説くのである。つまり、人間としての自律的主体性を確立した上で、自然との調和を保って生きるべきだというのが、尊徳の思想のモチーフなのである。

以上の如く、尊徳は、農民の人間としての主体的営為の意義を、人間社会の成立に遡って理論的に根拠づけた。「農民は国の本」という言葉自体は、幕藩領主が農政の理念として用いてきたものであるが、尊徳がそれを言う場合、農民という存在の社会的意義の積極的な主張としてである。

翁曰、根元たる者は、必卑き物なり、卑しとて根元を輕視するは過なり、夫家屋の如き、土台ありて後に、床も書院もあるが

如し、土台は家の元なり、是民は国の元なる証なり、⁽⁷⁰⁾ 扱諸職業中、又農を以て元とす、如何となれば、自作て食ひ、自識て着るの道を勤ればなり、此道は、一国悉く是をなして、⁽⁷¹⁾ 差^{ツツカ} 閥^{ツツカ} 無きの事業なればなり、然る大本の業の賤きは、根元たるが故なり、凡物を置くに最初に置し物、必下になり、後に置たる物、必上になる道理にして、是則農民は国の大本たるが故に賤きなり、凡ノ事天下、一同に之を為して、⁽⁷²⁾ 閥^{ツツカ} なき業こそ大本なれ、⁽⁶⁹⁾

武士階級が身分制的秩序観に基づいて農民を卑賤視するのに対し、尊徳は、農民を本⁽⁷³⁾ 土台として成立している社会の構造を家屋の構造にたとえて、土台は必ず下になるのは構造上必然の道理であり、それを卑しいとして軽視するのは誤りである、と痛烈に批判している。⁽⁷⁰⁾ すなわち、支配階級が観念的な「天道」論によって身分制秩序を絶対的なものだとして人民に説くのに対し、尊徳は、唯物論的に社会の成立・構造の原理を認識することにより、上下関係を相対化してとらえているのである。⁽⁷¹⁾ しかる上で、社会の土台である農民という存在の社会的意義を、強く主張している。

ただ、彼が農民の立場から人道⁽⁷⁴⁾ 作爲論を唱えたことは、確かに思想史上の画期をなすものであったが、しかし、それは農民による政治・社会制度の変革までも展望してのものではなかった⁽⁷²⁾—後述するように、彼の仕法も、決して社会変革を志向したものではない。

彼にあつては、農民はあくまで生産面における作爲主体であり、立法・政治の主体は聖主賢臣であつた。「人道は譬ば料理物の如く、三倍酢の如く、歴代の聖主賢臣料理し塩梅して拵らへたる物也、されば、ともすれば破れんとす、故に政を立、刑法を定め、礼法を制し、やかましきうるさく、世話をやきて、漸く人道は立なり、然を天理自然の道と思ふは、大なる誤也」。⁽⁷³⁾ 「人身あれば欲あるは、則天理なり」⁽⁷⁴⁾、それ故、天理自然に委ねていれば、「終に横道のもの出来人倫の道を破る」⁽⁷⁵⁾。したがって聖主賢臣が、人倫の道が立つよう、政を立て、刑法を定め、礼法を制して統治する必

要があるのだ、と彼は考えているのである。⁽⁷⁶⁾そしてこうした理解に立って、為政者の責任の重大さを、次のように力説している。

それ本は一円不徳なり、不徳転変して聖賢となる。聖賢の本は道を学ぶにあり。学あれば政に明かなり。明かなれば必ずその徳を敬す。敬することもあれば民農を情らず。怠らざれば田廩せず。廩することなければ国は豊饒なり。豊饒を保って仁恵を行ひ、恵あれば民叛かず。叛かざれば規矩を慎む。慎むことあれば刑罰を省く。省くことあれば民聚る。聚ることあれば税斂を陪ぬ。陪ぬることあれば臣信ず。信ずることあれば国寧し。⁽⁷⁷⁾

為政者といえども、生まれながらにして徳を備えているわけではなく、⁽⁷⁸⁾人間の自然の性情は「一円不徳」なのであり、道を学び徳を涵養することによって、はじめて聖賢となり得るのである。為政者が徳を具え、民に仁恵を施せば、民はその徳を敬い、規矩を守り、農業に出精して、自然と国は治まり、豊饒となる。先述の如く、尊徳は、人倫の道が立つためには、刑法・礼法を制定する必要があることを主張しているのであるが、決して強権的に法で以て人民を規制・抑圧すべきだと考えているのではなく、あくまで徳治主義を基本としていることが知られよう。それ故、為政者が不徳であれば、民心は離れ、国は乱れ衰退することを強調するのである。⁽⁷⁹⁾

現実の農村荒廃についても、尊徳は、「田畑の荒るゝ其罪を情農に歸し、人口の減ずるは、産子を育てざるの悪弊に歸するは、普通の論なれ共、如何に愚民なればとて殊更田畑を荒して、自困窮を招く者あらんや、人禽獸にあらず、豈親子の情なからんや、然るに産子を育てざるは、食乏しくして、生育の遂難きを以てなり、能其実を察すれば、憫然、是より甚きはあらず、其元は、賦税重きに堪ざるが故に、田畑を捨て作らざると、民政届かずして堤防溝洫道橋破壊して、耕作出来難きと、博奕盛んに行れ風俗頹廢し、人心失せ果て、耕作せざるとの三つなり」と、⁽⁸⁰⁾その根因を貢

租の過重、民政の不行き届き、博奕の流行による風俗頹廢にみている。先に検討した領主の農民教諭書では、農村荒廢の原因は憎農および農民の仁心の欠如に基因する間引にあるとして、その責任をすべて農民に帰していたのであるが、尊徳は、こうした荒廢論を真っ向から批判・否定し、領主の責任こそを厳しく指摘しているのである。

彼は、「古語に『民は常ノ産なければ常の心なし』⁽⁸¹⁾とかや。全く常の産不足致し候故、余業を相励み、田畑荒作に罷成り、人少く困窮、荒地亡所の根となり候哉⁽⁸²⁾」と認識しているのであり、それ故、農村を復興させるためには、「收納を免じ、土地を潤し、民食を足すの外有御座間敷⁽⁸³⁾」と力説するのである。彼の農村復興仕法は、こうした観点から構想されている。

過去・現在・将来の三世一貫の「天・地・人三才の徳」に報いる「報徳」道の綱領は、「至誠」・「勤勞」・「分度」・「推譲」である。このうち、とりわけ「報徳」思想の独自性を示すものは「分度」と「推譲」であり、尊徳の仕法の根本原理となっていた。

彼の言う「分度」は、決して身分制的概念ではなく、各々の収入に応じて支出に限度を設け—すなわち、予算を立て—、その範囲内で生活する合理的な計画経済を意味している。⁽⁸⁴⁾一家・一村・一国の財政を維持するためには、それぞれの収入に応じた「分度」を確立することが肝要であり、「定・分・立・度⁽⁸⁵⁾。我道之本原也」と言っている。だが、個々の農家・村が「分度」を確立していても、国家財政の「分度」が確立していなければ、聚斂誅求によって不足を補おうとするため、農家・村の財政は破壊されてしまう。彼が、農村復興仕法を行なうに当たって、まず領主財政の「分度」を確立し、恣意的な収奪強化を規制することから始めるのは、「若夫分不定、度不立。則雖有三大國。而國用不足矣。乃以聚斂誅求補之。竟陷於衰廢焉。何興國之有。何安民之有⁽⁸⁶⁾」という認識に基づいている。それ故、「制分度⁽⁸⁷⁾」而後國家可經理也。守分謹度。則余財日生。可富國安民也」と、國家が「分度」を確立し、それを守

ることこそ富国安民の要諦である、と考えているのである。

収入よりも支出を少な目に見積もって「分度」を設け、儉約によってその「分度」を守れば、余剰が生ずる。そして、勤勉に努めて収入をふやせば余剰も増大する。この余剰を自己の将来のため、子孫のために譲り—すなわち、貯蓄—、また親戚・朋友のため、郷里のため、さらには国家のために譲るのが「推譲」である。⁽⁸⁸⁾

このうち、自譲は容易なことであり、現に「世間知らず／＼人々行ふ処」であるが、自己の勤勉・儉約の成果を他に譲ることは難しい。それ故、教化によって人々の「心田」を開発することが必要となるのである。⁽⁸⁹⁾ 尊徳は、「我か教是を推譲の道と云、則人道の極なり」と言っている。

勤勉・儉約は、当時の農民の家訓・遺訓に、守るべき規範として遍く説かれていたところであるが、それ自体はあくまで自己の「家」の存続・繁栄を目的としたものであり、そこには社会化の契機は存しない。勤勉・儉約の成果が単に自家の経営の拡大再生産のみに投下されたらならば、富める者はますます富む一方、貧窮者はますます貧窮化し、争いが絶えなくなり、社会は衰退する。⁽⁹¹⁾ 尊徳の思想は、「分度」を確立し、勤勉・儉約に努めることによって生ずる余剰を、個人生活のレベルに止めず、他人のため、社会のため、国家のために「推譲」することを積極的に説き、これを以て社会・国家の福祉と繁栄—彼の言う「興(富)国安民」—を実現する原理として意義づけた点に、大きな特徴がある。

「国家之衰廢。在於君民交征^{ナガレ}利也。君不^レ愛^レ民。唯^レ食^レ賦税^ニ。民不^レ敬^レ君。唯^レ逞^ニ通租^ニ。君民各失^レ其職^ニ。食^レ與^レ逞^ニ。兩無^レ所得^ニ。而民窮^ニ。君衰^ニ矣^ニ」⁽⁹²⁾と、尊徳は、現実に国家が衰廢に瀕しているのは、君民互いに争って利を食っているからだとして認識している。こうした現実に対する危機感から、彼は、私欲を抑え、互いに「推譲」の「人道」を実践しなければ、農民の「家」・「村」は崩壊し、それを土台として成り立っている社会・国家も滅んでしまうことを、

力説するのである。彼の「報徳」思想は、こうした危機意識に基づき、「興国安民」を実現する原理を探求したところに成り立っているのである。

先述したように、彼は、「興国安民」を実現する上で、為政者の責任を最も重視している。彼によれば、政道の担い手である武士の職分は、「国土安穩、平安無事の政」を行ない、農民をして、安心して「田畑山林を作り立、妻子眷族養うことができるようにすることにあつた。⁽⁹³⁾」だが、現実には、領主は過重な貢租収奪によって農民を疲弊させている。先の引用文でも、それが国家衰廢の根因であることを指摘している。彼が仕法を引き受けるに当たって、領主に、国の本である農民の撫育こそが肝要であることを力説し、それを実現させるために、領主財政の「分度」を確立し、それによって生じた余剰を救民撫育・荒地開発のために「推讓」することを強く要請するのは、如上の現実認識に基づいている。

「推讓」は、その性格上、領主や地主・商業高利貸資本等、当該社会における経済的上位者に対して、その実践がより強く要請される規範であり、それによって、その収奪下に喘いでいる一般農民を救済し、その経営・生活を成り立たせるための政治的・社会的条件を体制的に整えることにこそ、彼の主眼が置かれていたのである。「我道以恕為要。乃恕貧民之心、或給口食農器。或給馬舎養舎。從国君見之。則悉似無用。然於貧民。則死生存亡所係。不可一日欠者也」⁽⁹⁴⁾と、彼は自分の仕法の主眼が貧民の生活を安定させることにあることを明言している。

尊徳の仕法が体制変革を志向したものではないこと、またそれが主として領主行政の一環として行なわれた点を以て、彼の思想・仕法の性格を領主階級の立場に立つ保守的・体制的なものと規定する見解もある⁽⁹⁵⁾。しかし、それは、当時の農村・農民が置かれていた歴史的條件を考慮せず、単に社会体制論・階級関係論を図式的に当てはめただけの皮相的な見解に止まるものでしかない。

現実には生死の淵に臨んでいる多くの農民を救済せねばならないという緊急の課題を果たそうとする時、所与の歴史的条件に幕藩体制を前提に農民救済・農村復興策を構想し、実践せざるを得ないのは当然である―それは、この期の農村復興運動全般について言えることである。それを体制内に止まるもの云々と高所から論断するのは、物質的繁栄を享受している現代人の思ひ上がり以外の何ものでもなからう。しかも、そういう論者に限って、苛酷な条件下に置かれていた当時の人々の膏血のにじむような思想的・実践的営為の意味を内在的に考察し、それが当該の時代状況に對して投げかけている種々の問題点を理解しようとする姿勢が全く欠けている。

幕藩体制という歴史的な枠組の内にながらも、農村更生を目指したこの期の多くの人々の真摯な思想的・実践的営為には、鋭い現実認識・批判から、様々な新たな契機が孕まれることになったのである。ここで考察してきたように、尊徳の思想でも、人間の生き方、さらには社会・政治のあり方に対して根源的な問いかけがなされており、幕藩体制という枠組を前提としながらも、その内部には、封建制を原理的に相対化する契機―近代へ向けての新たな萌芽も孕まれているのである。

尊徳の仕法が主として領主の行政機構を通じて実施されているのは、事実である。しかし、彼の思想を内在的に考察するならば、その仕法は徹底して農民の立場から構想されていることが知られる。彼は、農村荒廃の根因を領主の聚斂誅求・勸農の不行き届きにみている。そして、その聚斂は、領主が自らの財政の「分度」を確立していないため、その不足を補おうとすることに基因している、と認識している。したがって、いくら農民に「分度」の遵守、勤勉・儉約の実践を説いても、領主財政の「分度」が確立していなければ効果はない、後者を確立して遵守させ、余剰を救民撫育・荒地開発のために「推譲」させることこそが、農村復興を図る上で第一要件だと考えているのである。彼は、自ら領主の行財政を指導することによって、自分の意図するところを実現しようとした。⁽⁹⁶⁾

では、現実には彼は、具体的にどのようなそれを指導したのか、一方領主側が彼の仕法に期待していたところは何か、そして彼の仕法が現実の政治過程に組み込まれた時、彼の論理は領主側の論理とどのような矛盾・対立を引き起こさざるを得ないか、以上の諸点を、谷田部藩の仕法の実態に即して検討することにしよう。

〔註〕

(1) 『日本農書全集』第二卷、二三四—二三五頁。

(2) 近世においては、上層農民だけでなく、一般の小農民もこうした「家」意識を持つに至っていた点が特徴である。なお、「家」意識の一般的な成立過程とその特質については、拙稿「近世における「家」意識の一般的成立と相続」(東北大学「日本文化研究所研究報告」別巻第一二集、同「身分と家—身分制支配下の家と村」)(講座日本近世史第三卷「幕藩制社会の構造」)を發表しているの

で、参照いただければ幸いである。

(3) 例えば、野州桜町領東沼村の幾右衛門は、文政一〇年、欠落の罪で入牢を申し付けられたが、彼は尋問に対し以下のように答えている。「私儀、元来家内多にて幕方難儀御座候処、近來分て困窮相當必至と差詰候に付、不得止事機之所持田畑之儀も質入等致し候て、漸御年貢諸役相勤居候処、近年内外ともに差詰候て中々取続兼極々難儀仕居候之処、為取続綿打日雇稼罷越候之処、……(中略)……家内之者共計にては日々之営等も差支候に付、当惑あまり妻子共迄右稼先へ不計罷越居候、……(中

略)……素より一同離散仕候中々心底にては毛頭無御座候、全く困窮に迫り当座為稼不計他村へも罷越候」『全集』第三卷、二六頁。

(4) また、「家」の崩壊、農村の荒廃の根本原因であった領主・前期の資本の収奪を抑制せんとする農民闘争も、一八世紀後半以降激発している(常州における事例については、植田敏雄氏編「茨城百姓一揆」の卷末に詳しい年表が付されているので、参照されたい)。谷田部藩領でも、一八世紀後半以降、領主に対し年貢減免を要求する一揆や村役人・特権商人の不正を糾弾する騒動が頻発している(大木茂氏「茂木の歴史」一九三頁、二〇九—二七頁参照)。また、茂木領下菅又村の文政期の「諸事御触書覚帳」(山納武雄家文書)をみても、年貢減免や夫食・種貸を要求する願書が多く書き留められている。

(5) 『栃木県史』史料編の近世の部に農家の家訓・遺訓が数多く収載されている。

(6) 現在刊行中の『日本農書全集』(全三五卷)に、農民の著わした農書が数多く収められている。

(7) 石川謙氏「日本庶民教育史」二六七—二七一頁の「寺

小屋開業数年代別調査表」、三六七—三七九頁の「庶民教育のための郷学一覽」参照。

(8) 高橋敏氏「江戸時代の民衆教育とその思想」(「史潮」

第一一三号、三三頁、後に「日本庶民教育史研究」に所収。駿河国駿東郡の村々では、近世後期に、村役人を勤める村内の指導者が寺子屋師匠となつて、最下層農民までも包摂する教育運動が展開している。

(9) 下蒲生村の構造および田村家の経営については、須永昭氏「幕末維新时期における手作地主経営の存在形態」(「栃木県史研究」第一八号)に詳しい。

(10) 「吉茂遺訓」(前掲書二二二頁)。

(11) 「日本農書全集」第二巻、七頁。

(12) 同前七一八頁。

(13) 熊代幸雄氏「校註農業自得」の解題。なお、「農業自得」に関しては、その他以下の論稿で様々な視角から検討・論究されているので、詳細についてはこれらに譲る。古島敏雄氏「学者の農書と百姓の農書」(「古島敏雄著作集」第五巻)・「日本農業技術史」、島崎隆夫氏「関東地方一農村に成立をみた農書」(「三田学会雑誌」第四九巻第二号)、熊代幸雄氏「農業自得の農法」(「栃木県史しおり」No. 5)、長倉保氏「農業自得」の成立とその時代的特質」(「栃木県史研究」第一五号)・「田村吉茂の生涯とその思想」(「日本農書全集」第二巻解題)、稲葉光國氏「農業自得」における稲作の技術的特質」(同

前)、須永氏前掲「幕末維新时期における手作地主経営の存在形態」、今井敏行氏「北関東に成立した百姓の農書『農業自得』」(飯沼二郎氏編「近世農書に学ぶ」)。

(14) 「日本農書全集」第二巻に収載。

(15) 同前一五八頁。(16) 同前一五七頁。

(17) この点を吉茂の農法の後進性を示すものとする見解もあるが(例えば、前掲島崎氏の論稿)、幕末期の農業生産力の発展がかかる特質を持っていることは、この地方のみならず一般的な傾向であり(海野福寿氏「農業生産力発展の特質について」、「自由民権期の研究」第四巻所収、参照)、むしろ、その生産力の脆弱性から近世中期以降の農村荒廃化の中で一度破綻に帰した家族劳作経営を再建する過程で、集約化という近世的農業技術の延長線上ではあるが、そこに一定の科学性・合理性を持ち込み、土地生産力の向上をもたらした点を、評価せねばならない。この集約的・合理的な栽培管理技術が、幕末・維新时期の小商品生産を支えたことは、須永氏によって指摘されているところである(前掲「幕末維新时期の手作地主経営の存在形態」)。

(18) 「日本農書全集」第二巻、二二五頁。

(19) 同前二二六頁。(20) 同前二二四頁。

(21) 同前二二三頁。(22) 同前二二三頁。

(23) 同前二二三頁。(24) 同前二二四頁。

(25) 吉茂の思想には、尊徳の思想と共通している点が多い

が、「吉茂遺訓」の最後に熟読すべき書物として挙げてゐるのは、貝原益軒の「冥加訓」と「養生訓」、水野南北の「相法拔萃」のみであるから、直接の影響はなかったと思われる。彼の思想は、基本的には自らの人生体験の中で「自得」したものである。

- (26) 日本においては、民衆の主体性は「家」意識を媒介にして形成された点が、特徴である。「家」は人々にとって、それを存続させることが絶対的な規範であるだけに、人々の主体性形成のバネとなり得ると同時に、逆にそれだけに人々の意識・行動を規制する力も強く、自我意識に基づく真の意味での近代的な主体性の確立を抑止する方向にも機能したと思われる。

- (27) 下野の農村では、「農家捷徑抄」を著わした芳賀郡小貫村の名主小貫万右衛門（宝暦二一―天保八年）が、田村吉茂と並んでよく知られている。

- (28) 福住正兄「二宮翁夜話」二四（日本思想大系第五二巻「二宮尊徳・大原幽学」一三三頁。以下、「夜話」と略）。

- (29) 荒村下の諸運動を総論的に述べたものとしては、安丸良夫氏「日本の近代化と民衆思想」第一・二章、宮田登氏「農村の復興運動と民衆宗教の展開」（岩波講座「日本歴史」第一三巻）。鎌田道隆氏「農村復興の農民運動」（林屋辰三郎氏編「幕末文化の研究」）等がある。また、

秋山高志氏「近世常総地方の民衆運動について」（『茨城県歴史館報』第五号）では、常総地方に即して諸運動の

関東農村の荒廃と尊徳仕法（大藤）

展開、およびその相互交渉について述べられている。

- (30) 石門心学については、石川謙氏が多大な研究業績をあげられており、その大著「石門心学史の研究」では、心学を人間学としてとらえ、梅岩の思想体系とその門流の思想変遷、および心学教化の普及の具体相について詳細に跡づけられている。氏の研究の系譜を引くものとしては、竹中靖一氏「石門心学の経済思想」、柴田実氏「梅岩とその門流」がある。これらに対し、津田秀夫氏「教育の普及と心学」（岩波講座「日本歴史」第二二巻）では、心学思想はその発生期から、近世国家の危機回避の体制安定化講策に依拠しての、町人層側からの順応論としての性格を持っていたとして、石川氏らの研究を非歴史的方法論に立つもので、心学思想発生の社会的基盤を解明し得ないと批判されている。だが、石川氏をはじめとする如上の諸氏においては、封建的抑圧下で庶民が人間として目覚め、主体的に生きる道を追求したところに、その意義を見出されているのであり、津田氏のように、近世国家支配の秩序への順応論として一面的にきめつけてしまったのでは、封建社会において心学が提起した意味を理解し得なくなり、まさに心学思想発生の社会的基盤を見落としてしまうことになる。

- (31) 「都鄙問答」卷之二（岩波文庫本「都鄙問答」五一頁）。石川謙氏は、「形に由る心」という考え方を梅岩の思想の核心をなすものとみなされ、彼の思想の体系把握を

試みられてゐる（前掲書七四—八一頁）。

(33) 「都鄙問答」巻之二（前掲書六一頁）。

(34) 「齊家論」下（日本思想大系第四二巻「石門心学」二七頁）。

(35) 梅岩は、貞享二年に丹波国桑田郡東懸村に生まれ、幼少より京都の商家に奉公に出ており、彼の思想は、商人としての自己存在の意味を徹底的に問いつめたところに生まれた。梅岩のみならず、近世中期以降展開した民衆的諸思想は、儒教によって封建的ヒエラルキーが道德・人間性のヒエラルキーとして擁護され、それが社会的通念となつていた下において、民衆の産業活動の道德的正當性を強く主張するという特徴を持つており、そのことによって、民衆の日常生活活動に限りない信念や積極性を引き出した点に大きな意義を有していたことは、安丸氏がつとに指摘されているところである（前掲書三三—三四頁）。

(36) 「都鄙問答」巻之一（前掲書二六頁）。

(37) 特に梅岩の職分等価値論は、それを徹底すれば、幕藩制的身分制を内から克服する可能性も秘めていたと言えよう。だが、石門心学は、その後、身分制秩序を克服するという方向には思想内容は深められず、領主権力の民衆教化政策の一翼を担つたことにより、秩序維持のイデオロギーとしての性格を強めることになった。

(38) 石川氏前掲書一六八—一七〇頁に、心学者の道話にき

わめて多くの聴衆が集まつた事例が列挙されている。常州筑波郡小田村の尽心舎における文政一三年初夏の道話でも、五晩で三六八人が出席している（斎藤茂氏「石門心学活動の経済背景—常陸国尽心舎の場合—」、『茨城史林』第四号）。いかに当時、人々が心学に期待を寄せていたかがうかがわれよう。

(39) 「齊家論」（前掲書二六頁）。

(40) 石川氏前掲書一一一—一二三頁。

(41) 以下、斎藤氏前掲論文参照。

(42) 長島尉信の農政論については、斎藤茂氏「幕末村落指導者の農政思想—長島尉信の場合—」（『地方史研究』第一六〇号）を参照されたい。また、彼の生涯について知るには、鈴木常光氏「長島尉信」（『茨城ふるさと文庫』）が便利である。

(43) 以上、長谷川伸三氏「文政期下館町における石門心学の青少年教育の実態」（『茨城県史研究』第一六号）、林玲子氏前掲「下館藩における尊徳趣法の背景」参照。

(44) 以上、高橋敏氏前掲論文参照。

(45) 石川氏前掲書第二編第五章参照。

(46) 「いまいち市史」通史編・別編一七九—一八一頁に、主要な仕法実施地の一覧表が掲載されているので、参照されたい。

(47) この観点から、尊徳は、儒者・僧侶・神官らを、単に高邁な理論をもてあそんでいるだけで、荒廃下に苦しん

でいる多くの人々を眼前にしながら、何らそれを救済する実践的意欲・力を持っていないとして、痛烈に批判している。そして、真に「経世済民」の学たんとするならば、「雖讀聖經。而不行其実。則不能知其味。」(斎藤高行「二宮先生語録」三五、「全集」第三六卷、四四〇頁、以不、「語録」と略)と、机上の勉強だけでなく、それを実行に移して、その理の正当性を証明してみる必要性を説いている。また、彼は、単なる眼前の利害のみにとらわれた実行も厳しく排している。彼の説く実行主義は、一理を究めた上での実行である(尊徳の実行主義の特質については、内山稔氏「尊徳の実践経済倫理」第一章で、倫理学的観点からの考察が試みられている)。

(48) 二宮金次郎「日光御神領仕法に付き上申書」(日本思想大系第五二卷「二宮尊徳・大原幽学」一〇二頁)。

(49) 「夜話」一(同前書二二頁)。

(50) 「夜話」一五(同前書二二九頁)。

(51) 奈良本辰也氏は、廃田が免租地であったため、そこでの収穫が全部金次郎の手に入った体験から、彼はそこに封建社会の盲点があることを自覚したのであり、「積小致大」の言葉には、そうした盲点をついて成果を自分のものにしていく考え方が含まれていると主張されている(「二宮尊徳」二七―二九頁)。だが、廃田を開墾した場合、一定期間免租するのは、その開墾奨励のために領主

関東農村の荒廃と尊徳仕法(大藤)

がとった政策であり、封建的農政と何ら矛盾するものではない。尊徳の思想は、決して封建社会の盲点について富を蓄積する生き方をして形成されたものではなく、あくまで現実の社会的条件を正面から受けとめ、その下で農村を復興するにはどうしたらよいかという課題を、一貫して追求することによって形成されたものであり、奈良本氏の解釈はうがちすぎの感がある。

(52) 尊徳の人生体験と思想形成との関係については、下程勇吉氏「二宮尊徳の人間学的研究」第七章第一〇節で深い考察がなされている。

(53) 弘化二年一月二三日「二宮金次郎より山内総左衛門宛書状」(全集)第七卷、三八二頁。

(54) 同前。

(55) 富田高慶「報徳記」(全集)第三六卷、七七頁。

(56) 同前七七―七八頁。

(57) 「夜話」一〇(前掲書二二七頁)。

(58) 上杉允彦氏前掲「報徳思想の成立―桜町仕法を中心にして―」では、「旧来も指摘のあるとおり、それ以前の彼の全財産を処分し、一家をあげて、桜町の地に移住して、文字通り身命を賭してその再建に当ろうとしたが、ここで特に強調しなければならないのは、それが旧説のように、最悪の地に仕法を行うためという理由のみならず、その対象である農民に対する徹底した愚民感を背景にしていたことである。」(七一頁、傍点引用者)と、述

べられている。当時の農民にとって、先祖に対する最大の責務であった「家産」の保持を放棄してまで、他家の再興に乗り出した内発的な契機を、何故、農民に対する徹底した愚民観ということで説明し得るのか、全く理解に苦しむところである。上杉氏は、後の天保期に金次郎が書翰の中で述べた野州農村の荒廃状況およびその下での農民の生活状況に関する文言を取り上げて、金次郎が農民に対して徹底した愚民観をいだいていたと断定されておられる。だが、その文言は、金次郎が荒村下の農民の状況をどのように認識していたかを示すものではあっても、彼が社会における農民という存在についてどのように観念していたかを示すものではない。彼の思想形成・実践の立脚点を理解するためには、後者こそが、彼の社会観とのかかわりで、注意深く考察されねばならない。彼がどのような農民観を持ち、そして現実の農村荒廃の原因をどのように認識していたかについては後述するが、決して、愚民観ときめつけ得るようなものではない。彼が現実の荒村下における農民の生活の素乱を問題にしているも、根本的に批判しているのは、農民の生活を破壊し、そうした状態に追いやった領主の収奪の苛酷さなのである。上杉氏のような一面的なきめつけでは、金次郎の思想形成についても、結局、領主的立場に立ち、農民に対する愚民観に基づいて行なった農民統制としての本質を持つ桜町第一期仕法が捻折し、それに対す

る反省から、領主対農民の矛盾を止揚し、領主の体制再建に農民を主体的に協力させる巧妙な詭弁として報徳思想が成立したという、階級関係論をきわめて図式的に当てはめただけの理解に結果せざるを得ないのは当然である。だが果たして、当時の農村荒廃の状況は、単なる詭弁で解決し得るほど生易しいものであったのであろうか。否、そのすさまじい状況は、人々をして、人間の生き方や社会・政治のあり方について原理的に内省させずにはおかなかったであり、それ故、尊徳の「報徳」思想をはじめ、多くの特質的な思想がこの時期に生まれることになったのである。それを単に一面的に性格規定していたのでは、そうした思想を生み出した社会的背景、およびその思想の特質について、深くアプローチすることはできない。我々は、この時期の人々の諸営為の意味を、深く掘り下げて考察する必要がある。

(59) 尊徳は、先述した如く(註47)、神官・儒者・僧侶らの実践的意欲・能力の欠如を批判しているが、しかし、神・儒・仏の三道そのものを否定しているわけではなく、「予は高尚を尊ばず、卑近を厭はず、此三道の正味のみを取れり、正味とは人界に切用なるを云、切用なるを取て、切用ならぬを捨て、人界無上の教を立つ、是を報徳教と云ふ、戯に名付けて、神儒仏正味一粒丸と云」(「夜話」二三一、前掲書二三三頁)と述べているように、実践に移して有用と思われるものは積極的に摂取してい

る。したがって、彼の著作には神・儒・仏の典籍からの引用が多くみられるが、それは単なる受け売りではなく、自らの体験の中で「自得」した真理をその言辭を借りて表現したものである。「金毛録」でも神・儒・仏の典籍の言辭が多く用いられているが、彼がそれをどのような意味に用いているかについては、日本思想大系第五二卷「二宮尊徳・大原幽学」で、奈良本辰也氏が適確な解説を加えられている。また、彼が自己の思想を完成する上で、不二道孝心講の指導者小谷三志の思想から少なからず影響を受けているが、両者の交渉については、秋山氏前掲「近世常総地方の民衆運動について」、内山稔氏「尊徳の実践経済倫理」第八章を参照されたい。

(60) 「二円空・二円仁」の概念については、下程氏前掲書第七章ですぐれた考察がなされている。

(61) 「金毛録」二六（日本思想大系第五二卷「二宮尊徳・大原幽学」三五―三六頁）。原文は漢文であるが、ここでは奈良本辰也氏による書き下し文を引用する。

(62) この点については、近代的思维様式の萌芽として、丸山真男氏（「日本政治思想史研究」三〇八―三〇九頁）や奈良本辰也氏（「二宮尊徳」一三九―一四一頁、同前書解説四三二―四三四頁）をはじめとする諸氏によって、近世思想上、高い評価が与えられている。

(63) 「二宮金次郎『万物発言集草稿』（『全集』第一卷、三九三頁、以下、「発言集」と略）。

(64) 丸山氏前掲書参照。

(65) 同前三〇〇頁。

(66) 「夜話」二（前掲書一九二頁）。

(67) 「夜話」五（前掲書二二四頁）。

(68) この点、先に検討した如く、領主階級が農民に対し、ただひたすら「天道」に即して生きてこそ、「家」の永續が保障される、と説いているのとは対蹠的である。

(69) 「夜話」一四一（前掲書一九二頁）。

(70) 前節でみた石田梅岩の場合、商人の立場から社会におけるその役割の意義を強く主張しているが、尊徳はそれを農民の立場から行なっているのである。身分制秩序の下で卑賤視されて来た農・工・商民の社会的役割の意義を積極的に主張するのは、民衆的立場に立つ諸思想の大きな特徴である。ただ、梅岩は、身分制秩序自体は「天道」に基づく自明ものとしてとらえているのに対し、尊徳は、唯物論的な社会観から、それを原理的に相対化してしまっている。

(71) 尊徳は、士・農・工・商、その他儒者・書家・医者・数学者等がそれぞれの職業に勤めることによって社会は有機的に機能することを述べているが（「金毛録」二九、前掲書三九―四〇頁）、それを尊卑の秩序としてとらえているわけではないことは、本文で述べた彼の認識論の特質から理解し得よう。彼は、「官禄家格ありて世に知られ、人に用ひらるゝは、それは官禄家格あるが故な

り、之なくして世に知られ、人に用ひらるゝ者は、賤業の者といへども侮るべからず。是は生れつき勝れたる者なればなり。六尺、手廻の頭、雲助の頭など是なり。
 〔中略〕：斯る賤民にても、其の變りたる所、いちじるし、賤民とて侮るべからず、賤業とて賤むべからず。〔夜話 統篇四、全集 第三六卷、八三二—八三三頁〕、「徳根本勤苦也」〔報徳訓 一八、全集 第一卷、五五五頁〕、「徳と貴とは本末にして古今の差ひのみ、古しへ徳を積候ものは今貴し、今徳を積候ものは後世貴し、勤めて徳を積み、子孫に与へ、今を勤めて後世を楽み可申候」〔報徳訓 一九、同前書五五五—五五六頁〕と述べている如く、人間の価値を、身分・家格を基準としてではなく、個人の能力・徳性に基づいて判断すべきことを、強く主張している。つまり彼は、身分制的な固定の人間観にとらわれていないのであり、それ故、士・農・工・商にかかわらず、勤労の徳を積み限りにおいて人は皆貴いのであり、その徳によって社会生活は成り立っているのであるから、お互いその徳に報い助け合わなければならない、と説くのである〔報徳訓 一、同前書五三六頁〕。尊徳の人間観は、その価値基準において、近代的人間観に近づいていると言えよう。尊徳の士・農・工・商がそれぞれの職業に出精し、社会に寄与すべきことを説いた道歌を取り上げて、それは封建社会本来の分の思想を強調したものであるときめつける見解もみられるが

(例えば、奥谷松治氏「二宮尊徳と報徳社運動」一九四頁、上杉氏前掲論文八二頁)、それは、使用されている言葉のみに着目して、そこにこめられている尊徳独自の意味内容を理解しないことに基づく、全く皮相的な見解にすぎないことは、以上述べて来たことから明らかである。

(72) だが、人民をも作為主体としてとらえたことは、理論的には、人民が主体的に社会を變革する可能性の端緒を開いたことになる点は、思想上の画期として評価せねばなるまい。

(73) 「夜話」二(前掲書二二三頁)。

(74) 「夜話」六(前掲書二二四頁)。尊徳は、「天道(理)」と「人道」を単に自然界と人間界の關係としてのみとらえているのではなく、人間自身の中にも「天道(理)」部分と「人道」部分との相克が内包されている、と考えている点特徴である。彼の仕法において、具体的な復興策が自然界に対する人間主体の働きかけであるなら、教化は人間の内なる「天道」部分Ⅱ私欲への働きかけと言えるであろう。彼がしばしば「心田の開発」の必要性を説くのも、そのためである。

(75) 「発言集」一(前掲書三三九頁)。

(76) 尊徳は、「帝威の嚴重なければ四海安寧せず。帝威の嚴重によって四海安寧をなす。四海の安寧は帝威の嚴重にあり。武威の政道なければ国家平治せず。武威の政道

によつて国家平治をなす。国家の平治は武威の政道にあり」(「金毛録」二九、前掲書三九頁)と、帝威(天皇)の權威と武威(武家)の政道によつて天下国家は安寧に平治するのだ、と主張している。つまり、現実の幕藩制国家の權威・権力のあり方を肯定しているのである。彼は、天皇の權威の源泉を、農の先務をなしたこと(「金毛録」二六、前掲書三六頁)、および法を定めて人民を導き法界を確立したことに(「発言集」一、前掲書三三九頁)に求めている。一方、武家については、「耕作農業をなして五穀を作り出す者を守護し、横道のことを懲しむ、是則武門の根元なるべし」(「発言集」一、前掲書三三九頁)と、横道を掣肘し、農民を守護すべき役割を担った存在として認識しており、まさにこの点において武家による政道を肯定しているのである。

(77) 「金毛録」二三(前掲書三三頁)。

(78) 「聖人も聖人にならむとて、聖人になりたるにはあらず、日々夜々天理に随ひ人道を尽して行ふを、他より称して聖人といひしなり、堯舜も一心不乱に、親に仕へ人を憐み、国の為に尽せしのみ、然るを他より其徳を称し、聖人といへるなり」(「夜話」三三、前掲書一三六頁)と述べている如く、尊徳は、聖人を天命を受けた超越的權威者とはとらえていない。つまり彼は、儒教のように、聖賢の道というものは天道であり、それは永世動かすことができない絶対的なものだとは考えていないのである。

る。彼が聖人による政道を説いたとしても、それはあくまで人道である。「天理は万古変ぜず」、だが「人道は一日忘れば忽ちに廢す」(「夜話」六、前掲書二二五頁)、それ故、為政者たる者、常に徳を積んで聖人たるよう心がけ、仁政を実践しなければ、国は亡んでしまふと、その責任の重大さを力説するのである。これが、彼が為政者に仁政の不断の実践を要求する理論的根拠となっている。

(79) 「金毛録」二四(前掲書三三頁)。

(80) 「夜話」一三六(前掲書一九〇頁)。

(81)・(82) 二宮金次郎「宇津汎之助様知行所村々へ申渡書」(日本思想大系第五二卷「二宮尊徳・大原幽学」五三頁)。

(83) 安丸氏は、尊徳は貧困の原因を民衆の生活態度に求めており、そのことによつて、荒廢の根源が封建権力と商業高利貸資本のすさまじい収奪にあったことがおおいにくされてしまつてゐる、と論断されている(前掲書一九頁)。だが尊徳は、決して荒廢の原因を農民の生活態度のみに求めているのではなく、領主の収奪の苛酷さ、勸農の不行き届きこそが、農民の生活を破壊し、紊亂させた根因であると認識しているのである。それ故、彼の農村復興仕法は、後述するように、まず領主の農政を救民撫育を基調としたものに改めさせ、農民の生活が成り立つ条件を体制的に整えることを第一要件としており、しかる上で、農民の人間としての主体性の確立、内発的な

勤勞意欲を促すのである。安丸氏の論稿は、現実の社会的諸問題を生活態度の倫理性の問題としてとらえる民衆的諸思想の精神主義論のイデオロギーの意味を追求することが主題の一つとなっているため、全体的に氏の主題に引き付けすぎた尊徳解釈になっている感がある。

- (84) 「天下有^ハ天下之秩^ニ。一国有^ハ一国之秩^ニ。一郡有^ハ一郡之秩^ニ。一村有^ハ一村之秩^ニ。一家有^ハ一家之秩^ニ。是自然之天分也。因^ニ天分^ニ以^テ制^ス用度^ヲ。是謂^フ三分度^ニ。叔世趁^ニ奢侈^ニ。而守^ニ三分度^ニ者鮮矣。苟不^レ守^ニ三分度^ニ。則有^ハ大國^ニ猶且不足^ニ。況於^ニ不知^ニ三分度^ニ者乎。有^ハ四海^ニ。亦不能^ハ補^フ其不足^ニ也。何也。天分有^ハ限^ニ。而奢費無^ハ窮^ニ也」
- 〔語録〕六、前掲書三四三頁。農業を主たる基盤としている社会においては、一家・一村・一郡・一国それぞれの生産総量と収入は天地自然の理によつて自ずから限度がある。これが、尊徳の言うところの「自然之天分」である。この「天分」を超えて消費すれば、一国といえども衰弊するのは自然の理であり、そこで「天分」に応じて支出に限度を設け、計画的に財政を運営していく必要がある。これが人道である。尊徳が仕法を行なうに際し、まず領地の生産力を調査し、その上で領主財政の「分度」を設定するのは、そのためである。

(85)・(86) 「語録」一五（前掲書三四七頁）。

- (87) 「語録」六（前掲書三四四頁）。
- (88)・(89) 「夜話」七九（前掲書一六六一・一六七頁）。
- (90) 「夜話」七七（前掲書一六六頁）。
- (91) 尊徳は、それぞれの村の生産力には、天地自然の理によつて自ら限界（「天分」）があり、したがって特定の者が富裕化しようとすれば、他人を貪らざるを得なくなるのは必然の理である、と説明している。したがって、「天分」をわきまえず「富貴を求めて止る事知らざるは」、結局、他人の「家」を滅ばし、村は衰退し、自らの「家」も没落することになる、と説いている（「夜話」八〇、前掲書一六七頁）。農民の間でも、こうした事態に対する自覚的な反省から、経済と道徳の一致が主張されるようになっていたことは先述したところであるが、尊徳の場合、それを「分度」の法則と「推譲」の法則によつて実現せんとしているのであり、かつ「家」・「村」の存続の原理に止めず、社会・国家の存続の原理にまで高めている。

- (92) 「語録」三七三（前掲書四四五頁）。
- (93) 尊徳は、年貢は、そうした武士の職分に対する報恩として位置づけている（「報徳訓」七九、前掲書五九六頁）。
- (94) 「語録」二八（前掲書三五〇頁）。
- (95) その代表的なものは、戦前に出された奥谷氏前掲書であり、尊徳および報徳運動に対する徹底した批判的立場から論述されたものであるが、マルクス主義の歴史理論

を機械的に適用されすぎている。最近の研究者の中にも、奥谷氏の視点と見解を継承されている人が多い。例えば、上杉氏前掲論文もそうであるし（註58参照、川又英一氏「幕末の農村計画」でも、尊徳仕法は本質的に領主のための封建的農村更生計画であり、尊徳の性格も封建権力の一端を担う下級役人であると規定されている。竹中氏前掲「天保改革の片鱗」は、尊徳仕法を導入した下館藩の改革を、財政改革を中心に分析したものであるが、その結論は、支配階級のむなしさがきすぎず、それは領主財政を、かたくなに勤儉と生産物地代原則の強化によって救おうとする改革指導者＝尊徳の限界がもたらしたものである、という平板なものに終わっている。尊徳の仕法の第一義的な目的は領主財政の再建ではなく、農村復興にある。前者は後者を実現するための前提であり、それ故、年貢搾取の強化によって再建させるのではなく、「分度」内で計画的に財政運営させることによって再建させ、「分度」外の年貢収入は救民無育・荒地再発に充てさせる点に特徴があるのである。しかもこれは単に仕法期間中だけでなく、仕法が終わった後でも「興国安民」を維持していく上での行財政の基本として説いているところである。したがって、実際の政策分析に当たっては、尊徳の論理と領主側の論理とがどのように絡み合い、また対立しているかに留意する必要がある。竹中氏の論稿は、政策の実態イコール尊

徳の構想として性格規定されてしまっている。安丸氏も、奥谷氏の見解に依拠して、「尊徳仕法は、封建社会末期における苛酷な収奪をおおいかくして、いやがうえにもきびしい労働儉約を民衆に強制するものであり、民衆支配のための若干の新味をもったイデオロギーだった、ということになる」（前掲書二〇頁）と述べられている。ただし、氏の場合は、一面的な性格規定に終えることなく、尊徳の思想をまったくの虚偽意識（支配のためのイデオロギー的装置）と解したのは、その思想の独自性も、明治以降に広汎な民衆運動として報徳運動が展開したことも、まったく理解できないとして、現在の貧困から逃れるためには、何よりも現在の生活習慣を变革してあらたな禁欲的な生活規律を樹立しなければならない、というのが尊徳の一貫した立場であり、こうした見解は、一面ではたえず強制という契機をとめないながらではあるが、その時代の広汎な民衆の自己形成＝自己鍛練の要求にそったものだった、と結論されている。氏の論稿では、一見通俗的・前近代的にみえる幕藩制解体＝近代化過程の様々な民衆の諸思想にこめられている意味内容に執拗にアプローチされており、氏の論稿の生命力はまさにこの点にある。ただ、氏は、その諸思想の性格を「精神主義論」で一括されすぎている感がある。心学は別にして、先の田村吉茂のようなこの期の老農や尊徳の思想には、自らの観察・体験に基づいて自然・人事の

理を「自得」する精神に支えられて、科学的・合理的な思考の成長も顕著にみられるのであり、こうした側面も考慮して、民衆思想の成長を跡づけていく必要がある。尊徳の場合、そうした思考様式に基づいて、封建制を原理的に相対化しているのである。また彼は、仕法を行なうに際し、領地の生産条件、生産力、農民の生活状態、領主財政の状態等について、過去から現在に至るまで綿密に調査し、その上で仕法の計画を立てている。その仕法の計画書（雛形）は数量で以て表現されているところに特徴があり、それは、「此帳簿は計算書と見るべからず、是皆一々悟道にして天地自然の理なり……へ中略……」是を理論にて云ふ時は種々の異論ありて面倒な

れば、予は算術をかりて示せるなり（「夜話」続編四七、前掲書三七六―三七七頁）と説明しているように、自らの観察・調査・体験によつて「自得」した真理を数学的に定式化し、客観的に示すことが、他人を納得させる上で有効であるという確信に基づく。これは、近代科学の真理の表現方式に通ずるものである。

（96）当時、周知の如く、農民たちは、百姓成立ちのための「仁政」を要求して、度々一揆に立ち上がった。尊徳の場合、下からの要求という方法ではなく、自らが領主の行政を指導して「仁政」を実施せんとしたのであり、方法は異なるとはいえ、当時の農民の一般的な要求に立脚していた、と言えよう。

三 谷田部落の尊徳仕法の導入と経緯

（一）尊徳への仕法の依頼

谷田部落が尊徳仕法を導入したそもそもの発端は、野州芳賀郡中里村の出身で、江戸に医術の修業に出ていた中村元順が、親族の桜町領物井村の百姓岸右衛門から、尊徳の仕法のことを伝聞したことにある。

元順は、自らが借財に苦しんでいたことから、それに関心を持ち、岸右衛門に仕法金拝借を尊徳に懇願してくれるよう依頼している。これに対し、岸右衛門は、元順が借財に苦しんでいるのは、「財を施す事は扱置、草根木皮之類にて薬代を食り、其身を富」すことしか念頭にないため、世間の人々にその人徳を慕われることがなく、したがって医

者の家業も不振にならざるを得ないからだ、と批判している。そして、自分もかつては、自己の利益しか考えなかったが、二宮様の御教諭によって、他人の生活が成り立つよう献身してこそ、自己の家業も安泰を保てるということを悟り、「唯々大勢相助候道に付、自分之事は暮方之内取縮、為冥加無給にて」、二宮様の手足となつて働いているのだ、と話している。⁽¹⁾ この岸右衛門の話には、尊徳の教諭によって、農民がどのように精神変革を遂げたかがよく示されている。

後に元順は、谷田部落医中村周圭の養子となり、養父の死後家督を相続して細川侯の侍医となった。細川家の財政窮乏を知った元順は、若殿喜十郎に、尊徳の仕法が農村復興・財政再建の妙法なることを話した。天保四年の凶作によって破滅的打撃を受けた細川家は、窮状の打開を尊徳の仕法に期待し、天保五年一月、喜十郎は内々に元順に命じて、桜町陣屋の尊徳の許に仕法の依頼に赴かせた。⁽²⁾ 依頼に対し、尊徳は、「国之興廢、一家之執政存亡に相拘り候儀は、不容易之根元」にて、まして喜十郎殿は養子に來られたばかりで、性急に家政改革を行なつて失敗したら、奸佞の臣は喜び、父子の間の疎隔も生じることになる、「自己を慎、天然之時を期、誠精尽候はゞ、除外患被行可申」と論じて断わっている。

二月七日、江戸の大火で谷田部落上屋敷の柳原屋敷が全焼し、細川家はますます窮地に陥つた。この非常事態を契機に、「長門守父子、重役共一同挙て衆儀相決し」、元順をして、公式に尊徳への仕法依頼に当たらせることになった。六月一日、元順は尊徳の許に赴き、藩の窮状を訴え、仕法を懇願した。これに対し、尊徳は、「国家之興廢、民力之盛衰により可相発問、篤と国之元は民成事を、得と勘弁治定於有之は」、御世話もしよう、と答えている。

すなわち、仕法を引き受けるに際して、民を根本とする為政の基本方針を確立することを、第一条件としてあげているのである。尊徳の質問に応じて、元順は、藩の借財の状況、貢租収納状況、領内の生産条件、荒廢状況等々につ

いて説明しているが、農村の荒廢の根因は、「兩在所村々情農勝にて、年来之弊風相止」まざることにあり、と述べている。これに対し、尊徳は、「天に無私、可恐、依之自己之分限を退、窮民を救、子孫相統之行、遺念一國に差はまり、水脈整分理、荒地開発、其米麦を以、窮民を養ひ、領民を賞し候はゞ、善種を縁て善草を生じ、天之自然に叶可申」と説き、この仕法の趣旨を兩殿様が御承引下さるならば、仕法を引き受けよう、と返答している。

元順が尊徳の説諭内容を長門守父子・重役ともに報告したところ、承諾された。そして、九月一四日、元順はその旨を尊徳に告げている。その際、尊徳は、藩財政の「分度」を確立し、經常費および家中の俸禄・役料はその内で賄い、「分度」外の収入を以て、「窮民撫育、荒地再発、難村取直し手当備に可致」という具体的な条件を提示し、これが受け容れられない限り、「興国救民、趣法取興」を引き受けるわけにはいかない、と申し渡している。

谷田部落側は、右の条件を受け容れ、元順と在所役人に命じて、桜町陣屋に詰めさせ、尊徳の指導の下で田圃諸帳面類を調査させている。その結果、貢租収納量は延宝期に比べ近年は半分近くに減少し、累積借財未返済額は一三万兩余にも上っていることが判明した。これは、一年分の貢租をすべて借財返済に充てたとしても、二五年余かけてようやく元金のみ返済できる額である。このことを長門守父子・重役ともに報告したところ、「上下挙て驚入、此上可立直手段も可有之もの哉と打寄評議」している。これまで谷田部落では、財政帳簿の整理は行なわれておらず、したがって借財高がどのくらいかも確認されていなかった。藩財政が計画的に運用されることなく、場当たり的に借財を重ねてきていたのである。

改めて事態の深刻なことを知った谷田部落首脳は、「愈以上下一和、衆力精誠相凝」して、尊徳に仕法を懇願することを評決した。一〇月一七日、藩命を受けて仕法懇願にやって来た元順に対し、尊徳は、具体的に藩財政の「分度」案を示し（表14）、一〇ヶ年の仕法期間中は絶対にこれを遵守するよう命じている。谷田部落側もこれを承諾したが、

「救民興國趣法」の資金が無いので、尊徳に相談したところ、彼は、桜町領の「分度」外の収入を積み立てた報徳金のうちより一、〇〇〇兩程融資することを約している。

(二) 藩財政の「分度」の設定と

仕法趣旨の教諭

尊徳仕法の導入を正式に決定した谷田部藩は、天保六年一月、中村元順を選俗させて中村勸農衛と改名させ、勝手元江戸取締・茂木谷田部両在所取締支配役・趣法方兼務を申し付け、改革仕法の責任者とした。⁽³⁾また、尊徳の要請で、弟子の大島勇輔を「趣法為調方」に召し抱え、岸右衛門にも扶持を与え荒地再発の指導に当たらせることにしている。

尊徳仕法の根幹は領主財政の「分度」の確立にある。彼は、文政二―天保四年の平均貢租収納高を以て「平均土台高」に定め、⁽⁴⁾この限度内で財政を運用させるため、家中の俸禄・役料、⁽⁵⁾藩の経常費、借財の一枚

表 14 尊徳の立てた谷田部藩財政の分度

茂木田方平均土台高	米 5,769俵3斗4升1合7勺8才	文政12～天保4
谷田部田方平均土台高	1,890. 0. 9. 4. 2	年の平均収納高
計	7,659. 4. 3. 5. 9. 8	
三ヶ所家中渡米	2,589. 2. 8. 2. 1	
残高 (払米高)	5,070. 1. 5. 3. 8. 8	
a 払米代金	金 2,383兩分朱・銀4匁2分9厘3毛	1石に付き1兩替
b 茂木畑方平均土台高	1,240. 3	2. 7. 4. 2
谷田部畑方平均土台高	326	7. 2. 6
c 計 (a + b)	3,949. 3. 2	6. 8
d 三ヶ所定用土台高	2,033. 2. 2	6. 2. 2
三ヶ所借物一ヶ年元利 払見渡備高	1,732. 3	4. 4. 0. 3
残高 (c - d)	183. 1. 2	3. 6. 7. 7
		臨時出費の備

〈註〉・「趣法発端記録草稿」(『二宮尊徳全集』第23巻, 11-12頁)により作成。

・三ヶ所とは江戸・茂木・谷田部を指す。

年元利返済分の額を表14のように決めている。そして、「平均土台高」内の残高は臨時出費の備えとし、「収納平均外米之儀は、興国救民撫育、趣法筋に相用可申旨」論じている。

仕法開始に先立ち、その趣旨の藩士・領民への徹底が図られた。尊徳は、谷田部・茂木両在所掛役を呼び寄せ、「国之元は民にて、民安則国固と申事にて」、我が仕法は救民撫育・荒地再発によって民力を強化することを以て大本とする、と説明している。そして、「一家之仁及万民」ぼさなければ、「一家之荒廢取直し候儀」は成就しがたく、「万石之欲」は荒廢を来たすことになる⁽⁶⁾と論じている。また尊徳は、長門守父子・重役ども、その他勝手掛役人どもに面会し、「興国救民御趣法」の道理を説論している。

長門守は、家中に対し、尊徳仕法の導入を達し、その趣旨・内容を詳細に説明しているが、その中で、「此度之趣法人二宮金次郎儀、諸方之仕送り、人之行所とは相違、一体仕送り、致候様成事は、相好不申、自然天道を重じ、前々如申百姓撫育之業より、窮民力つき、再発開発等も多く相成、領分収納相増、今日之経済にも取付候処を根元とす」と述べている。つまり、従来の仕送り人は担保引き当ての融資だけであったのに比べ、尊徳は担保を取らず経費を要せず農村復興・財政再建を行なってくれる、まさにこの点に、領主階級が尊徳仕法を歓迎し、期待を寄せた理由があったのである。尊徳仕法が主として自己資金に事欠く小藩・旗本に受け容れられた理由も、右の言葉によって理解し得よう。

領民へは、仕法の責任者となった中村勸農衛が廻村し、「百姓小前未々之者迄呼集置、各人別」にその趣旨を教諭している。だが、最初は尊徳仕法の趣旨について述べているものの、後半では専ら年貢未進・延納によって上を難渋に陥れた百姓たちの罪を指摘し、以後「其身之分限を守」、農業に出精し、「上納辻大切に相心得」、「是迄不納之分、当年より年賦にても上納可致、左も無之ては、大切之御年貢、不納と申儀は、於百姓は不軽罪に候」と、百姓たちの年貢納入の責任の重大さのみを強調している。尊徳の教諭では、農村荒廢の根因は放漫財政からくる過重な年貢収率と

勸農の不行き届きにあると指摘した上で、領主財政の「分度」を確立して、余剰を救民撫育・荒地再発のために「推譲」し、「国之元」である民力の涵養を図るべき領主の責任の重大さを力説しているのであるが、勸農衛の農民への教諭は、これとは齟齬をみせている。

つまり、年貢の増収によって藩財政の再建を図ることを第一義的目的とする領主階級の意図と、「分度」の設定によって恣意的な収奪強化を規制し、財政再建は儉約によって「分度」内で行なわせ、余剰を救民撫育・荒地再発に「推譲」させることにより、百姓成立ちのための条件を体制的に整えんとする尊徳の意図とは、仕法開始に際して、早くも齟齬を露呈しているのである。

実際に尊徳の仕法が藩政の一環に組み込まれると、両者の立場・論理の矛盾は次第に明白化し、ついには確執を招くことになる。また、藩士の中には、尊徳の仕法に対して、あからさまに反対の意を表わす者もいた。仕法開始早々、支配掛役志賀平兵衛なる者が、「大勢を倡、趣法筋不奇依之旨、数ヶ条相認、重役共へ讒言之奸書、数ヶ条相認」という事件が起きている。この件について、尊徳は「事換、品変時は、人情得失難極……ハ中略……良匠は無棄材、明君、無棄士云々、依之其者之存慮を賞し、詳明に尋問尽し候はゞ、小人之遺念を断、終には自己之過を顧、君徳を貴候様可相成」と述べており、長門守もこの意を受けて志賀を呼び出し説諭したが、結局、彼は聞き入れず離散している。

(三) 仕法の経緯

谷田部藩の尊徳仕法は天保六年に開始されたが、その後、いく度か曲折を経ている。

天保八年に藩主興徳が死去し、養子喜十郎（興建）が新藩主に就任している。天保九年には、興建は幕府より大番

頭に任ぜられ、大坂城番を命ぜられた。そのため、勤務期間中は、仕法は公式には中断されることになった。但し、尊徳は、勤務に伴う出費の増大はなるべく借金で賄うようにし、「平均外は御土台へ不繰込、勤農衛へ御渡、御勝手筋へ不抱、挙良民、困民を撫育、第一勤農怠を禁、荒地を切起、一向に為取行候はゞ、追々御領内古に復、御物成相増、縦令御増借に相成候共、無尽蔵金多分出来候間、元利御払切、御無借に可相成、左候はゞ御規則相立、御役御勤続、御趣法御取行、御安堵之御見詰可有御座」と、「分度」外の収入は藩財政に繰り込まず、あくまで農村復興のために支出していくよう論じている。そして、もし「御法則崩居候ては」、農村は再び荒廃に帰し、結局、「御公務、並御家中御扶助等も難御届、諸御借財口々、御不義理御出来候」と警告している。

だが、現実には、尊徳の指示に反して、「平均土台高」外の米・金は藩の勝手方に繰り込まれている（この点については、後で具体的に検討する）。そのため、尊徳は、中村勤農衛宛の書翰の中で、「先年差上置候雛形之通り、年々繰返し、御趣法被遊候はゞ、御趣意押立、上下御安堵之場に至可申管之所、或ハ進、或ハ退、節宜治定不仕、御窮迫残念至極に奉存候」と批判している。天保十一年、藩主興建は病気のため御役御免となったので、仕法の再開を尊徳に申し入れた。尊徳は、「分度」を遵守することを確約させた上で、これを承諾している。だが、その後も、「分度」は守られておらず、仕法の内実は藩財政再建を第一義としたものに変質していつている。このことが、尊徳と谷田部藩側との確執を生む因となった。

天保十三年七月、尊徳は幕府に登用され、「利根川分水路見分目論見御用」を仰せ付けられた。尊徳が幕臣となった以上、従来彼に仕法の指導を仰いできた諸藩・旗本は、幕府に願書を提出して、その許可を得なければ、引き続きその指導を受けることができなくなった。他家では予め尊徳に願書の文面を内閲してもらった上で幕府に提出し、御用手隙の節は可との許可を得たが、細川家のみは尊徳に相談もせず直接に提出したため、「書面之趣は難相成」という一

言のもとに却下されてしまった。⁽⁸⁾ 具体的な理由は記されていないが、おそらく文言・文意が不当と判断されたのであらう。

書翰および日記を見ると、尊徳は、谷田部藩の仕法継続について心配し、藩の重臣・中村勘農衛・郡奉行らに度々面会を申し込んでいるが、藩側は事ごとにこれを回避している。おそらく、藩内部では尊徳を忌避する空気も強く、引き続き彼に指導を仰ぐかどうか藩論が決しないまま、彼に相談することもなく、とりあえず幕府に願書を提出したものと推測される。これが却下されたことにより、尊徳と谷田部藩との関係は断たれた。そして、これ以降の仕法は、中村勘農衛が単独で指導するところとなった。

四 仕法の内容と結末

(一) 藩財政再建仕法

尊徳の借財整理は、「借財は借財之費にて立直候⁽⁹⁾」ということを基本方針としている。彼は、債権者と交渉して棒引きまたは無利足長年賦返済にし、さもなければ高利を低利に引き下げるなどして、表15の如く、谷田部藩の借財返済計画を立てている。

これによると、借財総額の六割近くを占める細川本家よりの借財の棄捐を除くと、残りの大半は無利足の一〇〇ヶ年もしくは五〇ヶ年の長年賦返済となっている。尊徳は、この計画に基づき、「分度」内より年々一、七三三兩を元利返済に充てるよう指示している。そして、「分度」を遵守させるため、藩主の生活費・家中の俸禄と役料・諸役所の費

表 15 尊徳の立案した谷田部落の借財返済計画 (天保5年11月)

返済方法	金額	内 訳
乗 捐	兩 分 朱 % 60,923. 0. 0 (50.5)	細川本家より借財分 (100)%
無 利 100 ケ 年 賦	28,760. 2. 2余 (24)	兩 分 朱 江戸 21,234. 3. 3余 (45.4) 谷田部 4,288. 5. 2余 (77) 茂 木 3,236. 0. 3余 (51.6)
無 利 50 ケ 年 賦	15,097. 1. 0余 (12.6)	江戸 (32.2)
無 利 10 ケ 年 賦	925. 0. 2 (0.7)	江戸 800. 0. 0 (1.7) 茂 木 125. 0. 2 (2)
1割2分 利 付 10 ケ 年 賦	720. 0. 0 (0.6)	茂 木 (11.5)
1割利付5ケ年賦	250. 0. 0 (0.2)	江戸 (0.5)
高利に付当年返済	1,168. 1. 0余 (0.9)	谷田部 360. 3. 1余 (6.5) 茂 木 907. 1. 3余 (14.4)
米代金当年払	128. 3. 1余 (0.1)	谷田部和泉屋 (2.3)
渡方滞の分当年払	2,463. 3. 3余 (2)	江戸 (5.2)
利付その他各種	9,069. 0. 0余 (8)	江戸 6,990. 0. 3余 (15) 谷田部 790. 0. 0余 (14.2) 茂 木 1,288. 3. 1余 (20.5)

〈註〉・「細川家新古借財取調帳」(「二宮尊徳全集」第23巻, 21~58頁), 「細川長門守様報徳借貸返済録」(同前, 275~282頁)により作成。

- ・表13中の追加調査分はこの案には入っていない。
- ・銀高表示の端金は「余」と略した。
- ・「金額」欄の比率は借財総額に対するもの。「内訳」欄の比率は江戸, 谷田部, 茂木それぞれにおける借財高に対するもの。

用の減額、藩士間の音物贈答の禁止等々、財政の緊縮化を細かく指導している。⁽¹⁰⁾つまり、領主は一般的に年貢増収によって財政再建を図ろうとするのに対し、尊徳は、「分度」の設定によって恣意的な収奪強化を規制した上で、財政再建は緊縮化によって「分度」内で行なわせ、それを超える収入は、農民の生産・生活の安定、農村復興のために支出せんとしたのである。この点に、彼の仕法の特徴がある。

表 16 谷田部藩の借財未返済額の推移

年次	未返済金額	未返済米額
	両 分 朱	俵
天保 5	134,840. 1. 1	2,638
6	125,145. 0. 0	2,638
7	122,998. 1. 0	3,020
8	54,557. 3. 2	2,870
9	46,178. 3. 0	30
10	48,860. 3. 2	30
11	48,725. 2. 0	30
12	47,932. 0. 0	30
13	46,537. 0. 0	30
14	40,904. 1. 2	30
弘化元	39,468. 1. 0	30
2	38,008. 2. 0	30
3	37,124. 3. 0	30

〈註〉・「細川家御借財米金済方取調帳」(「二宮尊徳全集」第23巻, 318~342頁)により作成。但し、銀高表示の端金は略した。

谷田部藩の借財未返済額は表16の如く推移していったる。

天保八年に大幅に減額しているのは、細川本家よりの借財六万両余を、仕法助成の名目で棄捐してもらったことによる。また、天保六年に仕法が開始されると、谷田部の釜屋治郎兵衛・和屋吉左衛門、茂木の釜屋七兵衛・栄屋利兵衛らの御用達商人たちは、これまでの藩への貸米・金を帳消しにし、さらに仕法の資金を献上したり、荒地再発・入百姓の世話をするなど、仕法の推進に積極的に協力している。第一章第三節で述べたように、彼らは藩権力と癒着

し、商業・高利貸資本として農民に吸着していた存在であり、藩財政の再建・農村の復興は、彼らの経営再建・維持のための必要条件でもあったのである。⁽¹¹⁾

天保一〇・一一年には、藩主の大坂城番勤務による出費増大のため新借しているが、仕法が再発された天保一二年以降、返済は順調に進んでいる。特に、尊徳と谷田部藩の関係が断え、中村勸農衛が単独で仕法を指導するようにな

った天保一四年には大幅に減額している。

このように、藩の借財整理はかなり進捗しているが、これは後述する如く、天保一二年以降、特に同一四年以降、仕法は藩財政再建を第一義とする方向に転換し、「分度」外の収入も藩財政に繰り込まれた結果である。

(二) 農村復興仕法

先述した如く、谷田部落の尊徳仕法は天保六年に開始され、中村勸農衛が責任者となり、桜町陣屋に居住している尊徳に面談あるいは書翰によって指導を受けながら遂行されることになった。

その後、天保九—一一年は藩主の大坂城番勤務のために公式には中断され、同一一年に再開となった。だが、この頃から藩側は次第に尊徳を忌避するようになり、仕法の基調も、本来救民撫育・農村復興を第一義としていたのが、藩財政再建を第一義とする方向に転換しはじめる。そして、天保一四年に尊徳と谷田部落の関係が断え、中村勸農衛が独自に仕法を指導するようになると、その内容も大きく変質していった。

ここでは、天保六—一三年と同一四年以降とに区分して、各々の農村復興仕法の内容を具体的に検討することにした。

I 天保六—一三年の仕法

1 仕法の資財

最初に仕法の資財について検討しておこう。表17に仕法入用米・金の収支を、表18・19に各年次の収入と支出の内訳を米・金ごとに示しておく。

表 17 仕法入用米・金の収支

年 次	収 入				支 出	
	米		金		米	金
	前年より繰越	当年収入	前年より繰越	当年収入		
天保5	俵斗升台	俵斗升台	兩分朱	兩分朱	俵斗升台	兩分朱
6		1,279.1.3.7		172.3.2余		172.3.2余
7	1,087.0.4.9	576.0.5.7	1,196.2.2余	1,560.2.2余	192.0.8.7	364.0.0余
8	994.2.8.8	1,258.1.2.3	851.0.2余	210.3.2余	668.2.8.8	556.1.2余
9	157.4.2.4	44.0.0.3	775.3.0余	1,625.2.2余	2,095.7.6.5	1,701.0.0余
10		1,499.3.4.5		775.2.2余	201.4.2.7	1,531.1.2余
11	49.3.4.6	1,086.3.4.6		344.1.0余	1,449.4.6.8	498.2.0余
12	81.1.5.0	1,723.1.8.8		149.2.2余	1,055.1.8.9	267.3.2余
13	72.1.8.1	1,609.0.5.8		109.3.0余	1,732.1.5.6	132.2.2余
				78.2.2余	1,681.2.3.9	43.1.0余

〈註〉・「田畑収納平均外米金請払無尽蔵帳」(『二宮尊徳全集』第23巻, 571~583頁)により作成。表18, 19も同。

・米の勺以下は切捨。銀高表示の端金は「余」と略。表18, 19も同。

尊徳の農村復興仕法は、「荒地は荒地之力を以起返」⁽¹²⁾ことを理念としている。つまり、荒地開発・救民撫育・人別増加策等によってもたらされた農業生産力回復の成果を繰り返し農村復興のために投下していくことによって、その進展を図るのである。それ故、その成果が領主財政に吸収されてしまふのを阻止するため、「分度」を設け、それを超える年貢⁽¹³⁾および再発地よりの冥加米は⁽¹⁴⁾「無尽蔵」と称する特別会計に繰り入れることにしている。

表20—1をみると、天保四年の凶作によって激減した年貢収納額は、仕法開始後かなり回復しており、「平均土台」『分度』外の米・金も生じている。問題は、尊徳の指示通りに、藩がこの「平均土台」外米・金を「無尽蔵」に繰り入れ、農村復興のために支出することを実行しているかどうかである。表20—2の天保八・一〇年分については、表18—1・2と照合できるが、それによると、天保八年の茂木領の畑粗土台外金三三兩余を除き、他は全額「無尽蔵」に繰り入れられている。前者は、この年藩主興徳が死去したため、その葬儀費用に廻したものと思われる。

表 18-1 収入米の内訳 (前年よりの繰越分を除く)

年次	茂土 水平平均 俵斗升合	谷田部再 全田平均 土台外米 俵斗升合	茂木再発買加米 俵斗升合	谷田部再 買加米 俵斗升合	買加米 俵斗升合	その他 俵斗升合
天保 6	244. 1. 4. 0	120. 1. 6. 7			1. 0. 0. 0 (茂木)	茂木天保4.5年 米納分取立米 913. 2. 9. 9
7				10. 4. 1. 0 (小野崎村)		天保6年買入備米 576. 0. 5. 7
8	684. 3. 7. 0	352. 2. 0. 5	13. 0. 0. 0 (馬門村)		96. 0. 7. 5 (茂木)	茂木御家中推譲米 30. 1. 3. 6 茂木貸付米上納 70. 4. 2. 5
9		44. 0. 0. 3		88. 4. 2. 0 (境松村)		
10	804. 0. 8. 9	543. 1. 8. 5				茂木貸付米上納 63. 1. 2. 0
11	1,024. 1. 6. 4					同上 62. 2. 5. 3
12	963. 1. 8. 1	589. 1. 4. 6	40. 4. 0. 2	49. 2. 7. 0	16. 0. 0. 0 (茂木3ヶ村) (谷田部1ヶ村)	同上 50. 0. 4. 1 谷田部貸付米上納 14. 1. 2. 9
13	1,204. 0. 9. 4	343. 4. 4. 1	27. 0. 1. 9			茂木貸付米上納 33. 4. 4. 2
計	4,925. 1. 0. 1 (54.396)	1,993. 2. 1. 0 (22)	80. 4. 2. 1 (0.9)	149. 1. 6. 0 (1.6)	113. 0. 7. 5 (1.2)	1,815. 3. 0. 2 (20)

〈註〉 ● 合計欄の比率は総収入米に対するもの。

表 18-2 収入金の内訳 (前年よりの繰越分を除く)

年次	茂木 町分米	平均 外金	谷田部 町分米	平均 外金	其 加金	桜町より 借入金	そ の 他
天保 5							
6	23. 0. 0余		64. 2. 0余		74. 1. 0余	172. 3. 2余 938. 0. 2	茂木城山明屋敷年貢 御勝手入用米私代金 454. 2. 2余
7			20. 3. 0余		38. 2. 2余	137. 0. 2余	茂木城山明屋敷年貢 茂木山内村上ノ地年貢 7. 3. 0 6. 1. 2
8			90. 3. 2余		11. 1. 2余	328. 1. 0余	茂木城山明屋敷年貢 和泉屋吉左衛門推譲金 (銀3匁7分5厘) 100. 3. 2 1,064. 3. 2 1,064. 3. 2 30. 0. 0 谷田部御林私代金 谷田部山私代金 7. 1. 0 4. 1. 2余 茂木山内村上ノ地年貢 茂木山内村上ノ地年貢 46. 2. 0 50. 0. 0 御手元より御下金 茂木城山明屋敷年貢 7. 0. 0 茂木山内村上ノ地年貢 5. 0. 0余 茂木山内村上ノ地年貢 1. 0. 0 茂木山内村上ノ地年貢 204. 1. 0余 谷田部300俵私米代金 茂木城山明屋敷年貢 13. 2. 0余 茂木山内村上ノ地年貢 5. 0. 0 茂木山内村上ノ地年貢 5. 0. 0 茂木山内村上ノ地年貢 4. 3. 2余 茂木山内村上ノ地年貢 8. 1. 2余 茂木山内村上ノ地年貢 4. 3. 0余
9	34. 0. 0余		98. 1. 0余		139. 0. 0余	374. 3. 0余	
10	18. 1. 2余		88. 1. 0余		20. 0. 0余		
11	9. 3. 0余		99. 2. 0余		21. 2. 0余		
12			74. 1. 2余		25. 1. 0余		
13	7. 1. 0余		16. 0. 0余		42. 0. 0余		
計	92. 3. 2余 (1.99%)		553. 0. 0余 (11.0)		372. 0. 0余 (7.4)	1,951. 0. 2余 (39)	2,036. 1. 2余 (40.7)

〈註〉・合計欄の比率は総収入金に対するもの。

表 19-1 支 出 米 の 内 訳

年次	荒地再墾入用	募民御救	諸普請入用	新百姓取立入用	褒 美	そ の 他
天保 6	俵 斗 升 合 75. 0 0. 0 (茂木村々々) (谷田部村々々)	俵 斗 升 合 72. 3. 3. 7	俵 斗 升 合 5. 2. 1. 0	俵 斗 升 合 137. 3. 0. 4 (小野崎村)	俵 斗 升 合 202. 0. 0. 0	茂木能持御殿失助成米 21. 0. 1. 0 谷田部台町御殿御救米 18. 0. 0. 0
7	112. 4. 2. 0 (茂木村々々) (谷田部村々々)	215. 5. 0. 4		35. 3. 6. 2 (小野崎村)	88. 5. 1. 7	茂木御教小屋入用 54. 1. 7. 0 谷田部同断 10. 3. 4. 0 茂木榎木村雄失人御救米 7. 2. 9. 3 私 米 1,280. 0. 1. 1 御勝手へ貸 265. 0. 5. 0 (13%) 谷田部小野崎村類雄人 } 5. 0. 0. 0 其外御救米 100. 0. 0. 0 (50) 御勝手へ貸 300. 0. 0. 0 谷田部私米 806. 2. 1. 6 (56) 御勝手へ貸 985. 3. 8. 5 (93)
8	0. 0. 0. 5 (境松村)	347. 2. 1. 1				
9	4. 3. 2. 5		23. 4. 1. 2 (養育米共)	56. 3. 9. 0 (谷田部村々)	13. 0. 0. 0	
10		175. 5. 2. 4	19. 1. 7. 3		147. 4. 9. 1	
11		38. 2. 4. 9		31. 0. 2. 4 (谷田部村々)		
12	15. 2. 1. 0 (谷田部村々)	53. 7. 1. 3			15. 0. 9. 0	茂木私米 6. 2. 2. 3 江戸廻米 88. 0. 0. 0 御勝手へ貸 1,552. 3. 2. 7 (90)
13			6. 0. 0. 0			27. 1. 2. 4 茂木私米 1,647. 5. 8. 4 (98) 御勝手へ貸
計	208. 1. 6. 0 (2.296)	905. 1. 9. 2 (9.9)	54. 3. 2. 6 (0.5)	261. 2. 8. 0 (2.8)	467. 1. 5. 9 (5.1)	7,177. 3. 3. 3 (79.5)

〈註〉 ●合計欄の比率は総支出米額に対するもの。

●その他の欄の御勝手へ貸米の比率は、その年次の総支出米額に対するもの。

表 19-2 支出金の内訳

年次	荒地再墾入用	窮民御救	諸普請入用	新百姓取立入用	褒美	その他
天保5	両分朱	両分朱	両分朱	両分朱	両分朱	両分朱
6	195. 3. 0余 (茂木村々、) 小野崎村 145. 1. 0余 (茂木村々、) (谷田部村々)	79. 1. 2余	161. 2. 0余 (高岡村土手普請、 谷田部村 諸道普請)	6. 0. 0余 (谷田部)	88. 3. 0余	岸右衛門帰国入用 藩財政非常用意 荒地再墾窮民養育料 2. 0. 0 100. 0. 0 70. 3. 2余
7		60. 1. 0余	41. 1. 2余 (茂木用水普請、 谷田部諸普請)	61. 2. 2余	茂木村々出生人養育金 窮民施薬料 窮民救済買上代 茂木無尺蔵米廻米運賃 按町返金分 御救種買上代 茂木御救小屋入用 谷田部同断 茂木村々出生人養育金 御勝手へ貸 御勝手へ貸 御勝手へ貸 3. 0. 0 4. 1. 0余 33. 3. 0余 11. 1. 0余 68. 3. 0 340. 1. 0余 3. 0. 2余 2. 1. 2余 3. 0. 0余 1. 144. 1. 0 1. 1. 0 1. 101. 0. 0 (67%) (71)	
8	0. 2. 2 (台町中山)	20. 3. 0余	103. 2. 0余 (谷田部諸普請)	65. 0. 2余 (茂木村々、) (谷田部村々)	211. 2. 0余	
9	47. 2. 2 (谷田部村々)		69. 2. 2余 (谷田部諸普請、 茂木用水普請)	16. 0. 0余 (谷田部村々)	188. 2. 0余	
10	224. 0. 0余 (茂木村々、) (谷田部村々)		13. 0. 0余 (茂木用水普請)	10. 0. 0余 (茂木村々、 田部村々、谷)	162. 0. 0余	谷田部小私並再墾田 耕作入用役路用手当 御勝手へ貸 御勝手へ貸 御勝手へ貸 62. 3. 2余 0. 3. 0 10. 0. 0 1. 0. 0 107. 1. 2余 (98) 10. 1. 0余 (23)
11	22. 0. 0余 (茂木村々、) (谷田部村々)			10. 0. 0 (小野崎村)	22. 1. 2余	
12		0. 2. 0余				
13						
計	636. 1. 0余 (12. 1%)	161. 0. 2余 (3. 1)	389. 0. 0余 (7. 4)	107. 1. 2余 (2)	891. 2. 0余 (16. 9)	3, 080. 1. 2余 (58. 5)

(註)

- 合計欄の比率は總支出金額に対するもの。
- その他の欄の御勝手へ貸金の比率は、その年次の總支出金額に対するもの。

國史館蔵の記録と複製仕訳 (木鐸)

表 20-1 谷田部藩の貢租収納額の推移

区分	年次	茂 木 領		谷 田 部 領	
		田 租	畑 租	田 租	畑 租
仕 法 以 前	文政12	俵斗升合 6,578. 3. 0. 9	兩分朱 1,239. 0. 0	俵斗升合 1,907. 4. 1. 0	兩分朱 389. 2. 0
	天保元	6,320. 2. 9. 4	1,221. 0. 0	2,004. 2. 5. 2	383. 0. 0
	2	6,386. 1. 4. 3	1,230. 2. 0	1,977. 1. 1. 7	378. 0. 0
	3	6,478. 2. 8. 1	1,227. 0. 0	1,998. 2. 3. 0	397. 3. 0
	4	3,593. 1. 6. 0	1,224. 2. 0	1,562. 3. 9. 7	356. 1. 0
	5	4,743. 0. 6. 7	1,208. 1. 0	2,129. 4. 0. 8	353. 0. 0
仕 法 以 後	8	6,454. 2. 4. 2	1,274. 2. 0	2,242. 2. 9. 9	417. 0. 0
	10	6,573. 4. 3. 1	1,259. 1. 0	2,418. 3. 3. 1	414. 1. 2
	14	6,182. 1. 2. 0	1,241. 1. 0	2,515. 3. 9. 2	404. 2. 2
	弘化元	5,555. 0. 7. 3	1,276. 3. 0	2,171. 1. 8. 7	427. 0. 0

〈註〉・「荒地開発窮民撫育難村旧復之趣法御土台帳」(「二宮尊徳全集」第23巻, 592~594頁), 「西米金取捌三箇所差引目録」(同前, 342~344頁), 「亥米金三箇所差引目録」(同前, 369~372頁), 「御收納米三ヶ所取捌正現見渡帳」(同前, 395~297頁), 「辰米金取捌三ヶ所差引目録」(同前, 399~402頁)により作成。

・天保14年の分は見積もり。

表 20-2 「平均土台」外米・金額

年 次	茂 木 領		谷 田 部 領	
	田租土台外米	畑租土台外金	田租土台外米	畑租土台外金
天保 8	俵斗升合 684. 3. 7. 0	兩分朱 33. 3. 0	俵斗升合 352. 2. 0. 5	兩分朱 90. 3. 2
10	804. 0. 8. 9	18. 1. 2	528. 2. 3. 7	88. 1. 0
14	394. 4. 0. 8	9. 3. 0	570. 1. 1. 3	20. 1. 0
弘化元		45. 1. 0	225. 3. 8. 9	40. 1. 0

「無尽蔵」収入米・金の内訳をみると、米では、基本である土台外米と再発算加米の両者を合わせた額が天保六一三年の全収入米額の八〇パーセント近くに達しており、殊に前者が七六パーセントを占めている。金では、土台外金の全収入金額に占める比率は一二パーセント余と低く、再発算加金は天保八年に谷田部領根崎村より五両あるのみである。両発地以外からの冥加米・金としては、村々からの上納分（米一一三俵、金一二八両余）の他、「茂木北郷河役算加金」（四両余）・「茂木水車人共其外諸算加問屋荷口共」（二四両余）・「茂木片貝・牧野村両所運米算加金」（四九両余）・「茂木酒造人共冥加金」（二二六両）等の茂木領の諸営業に賦課された冥加金がある。

収入金の中では、桜町領よりの借用金の占める比率が最も高い。この中には、桜町領の報徳金繰り入れの他に、鉾・鋤等の農具、飢饉対策用の米雑穀の借用分を金額に換算したものが含まれている。これは無利足五ヶ年賦の貸付であり、谷田部藩の初期の仕法および飢饉対策において、桜町よりの援助が大きな比重を占めていたことが知られる。⁽¹⁵⁾

また、天保六年には御勝手入用米を売り払って、その代金を「無尽蔵」に入れており、仕法開始に当たっての藩の熱意を示している。天保八年には、飢饉対策のために「無尽蔵」米を大量に売り払って、代金を「無尽蔵」金に繰り入れ、それをまた活用するという措置もとられている。「無尽蔵」米の払い下げはその後も天保一〇・一二・一三年と行なわれているが（表19―1）、その代金が「無尽蔵」金に繰り入れられているのは一〇年の分のみである（表18―2）。次に支出についてみてみよう。農村復興関係の出資で主なもの、荒地再発、窮民救済、用水排水路・道橋等の諸普請、入百姓、褒美等の入用米・金である。その他、天保七・八年には飢饉対策関係の出費が多くみられる。

注目されるのは、天保八年以降、「無尽蔵」米・金を藩の御勝手へ貸し付け（実質的には流用）していることである。天保八年の貸付については、藩主興徳が死去したため、その葬儀費用に廻した旨註記されている。天保九―一一年の貸付は、新藩主興建の大坂城番勤務のために藩の出費が増大したためである。先述の如く、尊徳は、この期間中にお

いでも「分度」外の収入は御勝手に繰り入れず、農村復興のために用いるよう指示していたのであるが、実際には守られていない。そして、天保一二年、谷田部藩が尊徳に仕法再開を懇願した際、再び「分度」生活に戻すことを約したにもかかわらず、一二・一三年も「分度」外の米・金を御勝手へ繰り入れている。殊に繰り入れ米額は、その年次の総支出米額の九〇パーセントを占めている。

また、先に指摘した如く、天保一二・一三年も「無尽蔵」米の払い下げが行なわれているが、その代金は「無尽蔵」金には入れられていないので、御勝手に繰り込まれたものと思われる。

以上の如く、藩財政の「分度」を遵守させ、それ以外の収入を救民撫育・荒地開発・人別増加策に「推譲」させるという尊徳仕法の根幹は、完全に骨抜きにされているのである。そして、この時期には、先述の如く、仕法の責任者である中村勸農衛はじめ谷田部藩の役人たちは、尊徳の指図を忌避するようになっていた。

2 仕法の内容

a 窮民救済—飢饉対策を中心に—

窮民を救済し、その潰れ化を防ぐことは、荒地開発と並ぶ尊徳仕法の大きな柱である。

表19をみると、天保六一一三年の間に、「窮民御救」として、米九〇五俵余（茂木領七〇一俵余・谷田部領二〇四俵余）と金一六一両余（茂木領一二一両余・谷田部領三九両余）が支給されている。地域的には茂木領の方が多く、時的には仕法が開始された天保六年と、凶作に見舞われた同七・八年が多い。殊に凶作・飢饉は、一挙に人別を減少させ、荒地を増大させる一大契機であるだけに、尊徳は、その対策に非常な力を注いでおり、それ故、彼の農政の理念が最も集約的に表現されている。

尊徳の飢饉対策の特徴は、いち早く凶作を予知し、飢饉状態に陥らないように、前もって夫食の確保策を講じ、生活指導を徹底することにある。しかも、綿密な調査に基づいて対策を立てている。彼は、大凶作をはじめ大災害の六〇年周期説を唱えており、必ずやって来るものである以上、常日頃から凶災に備えて貯穀（将来への「推譲」）をしておく必要性を力説するとともに、凶災時には、領主・富農商の貧民に対する「推譲」の実践を、特に強く指導している。凶作の予知という点では、彼は、農民としての長年の自然現象についての観察の体験から、すぐれた能力を培っていた。天 七年、彼は、春以来の気候不順と、土用に食した茄子の味が秋茄子のようだったことから、いち早く凶作を予知し、当時仕法を依頼されていた諸藩・旗本に対し、早急に備荒対策を講ずるよう指示している。⁽¹⁷⁾ 谷田部藩へは、六月八日に使者を遣わして指示しており、以来、谷田部藩は、尊徳の指導を仰ぎながら、飢饉対策を実施に移している。⁽¹⁸⁾

まず、領内の夫食確保を図り、物持ちちらへ領外に売穀しないよう申し渡し、また農民たちに、各々所持の有穀、その他菜・大根に至るまで貯えるよう、そして、悪地で従来作付けしなかった場所にも、蕎麦・菜・大根等を蒔き付けるよう諭している。⁽¹⁹⁾ さらに、一〇月初旬より、尊徳の指示に従って掛り役人が廻村し、茂木領・谷田部領それぞれ一村ごとに人別・必要夫食量・貯穀高・収穫見込み高を調査している。茂木領・谷田部領ともに年貢収納分はすべて領内に払い下げること⁽²⁰⁾を前提にして夫食量を見積もっているが、前者は一、〇一八石余夫食不足の見込みとなり、逆に後者は九二石余の余裕が見込まれている。これは、夫食量の見積もり基準が、一人当り一日に付き茂木領米雑穀六合宛・谷田部領同五合宛と、前者の方が一合多くなっていることにもよるが、基本的には、人別の絶対数の差異―前者六、七〇二人・後者三、五二六一人―に基づいている。

茂木領の夫食不足分は、他所より米雑穀を買い入れて補うことにしている。尊徳は桜町領物井村の喜左衛門・横田

村の久蔵に米・麦を調達して茂木領に送るよう申し付け、兩人はこれに応じて、天保七年一〇月下旬より同一一月上旬にかけて、真岡の若松屋慶助・塚田兵右衛門、川崎河岸間屋藤蔵らより米二〇六俵（八六石）・小麦二〇四俵（九二石余）⁽²¹⁾を買い付けて茂木に送っている。代金は駄賃・藏敷銭を合わせて四三八兩余となっているが、この分は決済されている。⁽²²⁾また、桜町領より種粳三二俵（代金一六兩）・大麦一五〇俵（同一一二兩二分）、その他蕎麦・大根（同五兩）を借り入れている。

しかし、「最早八州方より穀留御触有之、買入難屈」、夫食の買い入れは思うように進捗しなかった。そこで、天保七年一二月には、夫食を喰い延ばすために、その使用方法を細かく指導している。⁽²³⁾先の見積もりでは、一人当り一日に付き茂木領は六合宛・谷田部領は五合宛として計算していたのであるが、これを二合粥にして、その他菜・大根を用いるか、あるいは三合雑水にして喰い延ばすよう指示している。ただ、現実には、家により夫食の所有量に差がある。そこで、夫食の無い者は錢を稼いで穀持ちの者に無心をするよう、一方穀持ちの者は「貧富一和之以示談」、無利永年賦で貸し出すか、安売りをするよう論している。⁽²⁴⁾「推譲」した者には褒美を与えることにして、その実践を促しているが、現にそれによって各村とも数名表彰されている。⁽²⁵⁾⁽²⁶⁾

他方、不正を行なって利を得んとした者に対しては、厳罰で以て臨んだ。天保七年十一月、杉田五郎左衛門なる者が他所出穀の禁を犯し、他所へ隠し売りをしていたことが発覚し、中村勘農衛が尊徳にその処罰について相談したところ、彼は、「犯大禁、不束之至、且同人儀は是迄庄屋相勤、農間為稼、穀物売買、質物稼、食欲非道之心懸にて、數人為致迷惑候族之噂に及候」として、五郎左衛門に入牢を命じ、家屋敷・衣類一通りは残し置き、食料は窮民くらの分だけ家内の者に渡し、それ以外の米・金等の財産はすべて没収して同村・隣村の窮民に与え、質物は質入れ人に戻すという厳罰に処し、「此上犯大禁、人命保護食道相妨候もの有之間敷」戒めとすべし、と答えている。

また、穀持ちの者で、払い穀したい旨申し出れば、藩が相場よりも三升高に買い上げ、窮民に対し、「御救」として相場よりも三升安に払い下げるといふ措置も講じている。⁽²⁷⁾ 谷田部領では、天保七年十二月二〇日に、三三ヶ村一九三戸に対し稗三六石八斗（一戸当り平均一斗九升）、翌年三月一九日に三五ヶ村二五〇戸一、〇三九人に対し米一〇石四斗九升・稗三一石八升（一戸当り平均米四升一合・稗一斗二升四合、一人当り平均米一升・稗二升九合、五月二四日に、三五ヶ村二八九戸一、二五九人に対し麦二三石五斗六升・稗三七石七斗七升・味噌六石二斗九升（一戸当り平均麦八升一合・稗一斗三升・味噌二升一合、一人当り平均麦一升八合・稗三升・味噌四合）を下している。⁽²⁹⁾ 茂木領では、天保七年八月一八日に、二七ヶ村一一戸に対し米六石八斗四升（一戸当り平均六升一合、同年一月六日に、一九ヶ村五九戸に対し稗一四石六斗（一戸当り平均二斗四升）、同年二月六―八日に、二七ヶ村二四一戸に対し米一七石七斗九升・稗五二石一斗（一戸当り平均米七升四合・稗二斗一升）を下している。⁽³⁰⁾

天保七年十一月、尊徳は、藩の定用米・家中への渡し米を七割減じ、その分を窮民救済のために差し出すよう指示した。これを受けた重役中村市郎右衛門は、「御同意御尤には御座候へ共、七分減にては家中人氣難調に付、私愚案を以、号勸善録、御手前様御諭之旨、茂木家中へ相達し、粥雑水等にて相凌、一日五合之食相減じ、省出し米を以積立、其身之俸禄応分限、出来可致相達し、是を以飢渴之民食致足合候様」にしたい旨、尊徳に諮問している。尊徳も、これを了承し、「是にて上下一和、飢難凌方に可有之旨に付、追々無弛救穀、其外鰥寡孤独之者、粥施専一之旨」諭している。

かくして、同年十二月、藩主自ら定用米を節約して「窮民御救米」を醸出し、家臣および農民・商人にも、余裕のある者は米穀を醸出するよう勧め、これにて「御救小屋」を設置して、飢渴の窮民を引き取り、粥の焚出をするよう命じた。⁽³¹⁾ 谷田部領における醸出品目と額は表21の如くである。救小屋は、茂木領では藤縄村の弥勒院中に、谷田部

表 21 救荒用米雑穀・金の醸出 (谷田部領の分)

醸出人	醸出品目と額	備 考
藩 主	米 200 俵	御定米より
家臣17人	米 40 俵 4 斗 2 升, 味噌 10 貫目 施薬 1 年分	
商人 1 人	金 100 両	和泉屋吉左衛門
農民13人	米 2 俵 5 斗 8 升, 稗32俵 2 斗 5 升, 大麦 1 俵 1 斗 3 升 5 合, 金 1 両 2 分	刈間村 10人 境田村 1人 境松村 2人

〔註〕・天保 7 年 12 月「報徳窮民勸善録」(『二宮尊徳全集』第 23 卷, 655~657 頁) により作成。

領では一乗院寺中に設置され、一人当り一日二合宛「御救粥」を施与した。⁽³²⁾
 以上、尊徳指導下の谷田部藩の飢饉対策についてみてきた。彼は何よりも合理性を重視する精神の持ち主であり、何事をなすにしても、まず予備調査を徹底して行ない、しかる上で、一つ一つの施策が全体として有機的に機能するよう立案し、実行するという性向を持っている。それは、飢饉対策にも、よく表われていると言えよう。

彼の力説する「救民撫育」の農政の理念・「推譲」の精神は、飢饉という非常事態においてこそ、より徹底して発揮されねばならない。それ故、武士階級および富裕農民・商人に対して、窮民への「推譲」の実践を、強く論じている。藩としても、尊徳に仕法を懇願し、開始早々直面した難局であっただけに、彼の指導下、積極的に対策に当たっており、尊徳自身、「飢饉の用意を、諸方に通知したる内、厚く信じて能行ひたるは、谷田部・茂木領邑なり」⁽³³⁾と語っている。また、尊徳の弟子で、谷田部藩の仕法に従事していた大島勇輔も、飢饉対策が効を奏し、極窮の者も無事凌ぐことができた、と述べている。⁽³⁴⁾ 人足の者が「近辺百姓共、茂木領浦山敷存申聞」と⁽³⁵⁾と他領に比べかなり行き届いたものであったことがうかがえる。

b 表彰制度
語っていることから、その飢饉対策は、

農村復興を実現する上で原動力となるのは、言うまでもなく、農民の主體的な勤労である。農民の内発的な勤労意欲を喚起し、積極的に仕法に協力させるために、表彰制度は、教化と共に尊徳仕法の中で重要な位置を占めている。ここでは、『全集』第二三巻所収の表彰関係の書類を年次順に分析することによって、各年次の表彰の実態と特徴を考察してみたい。

①天保六年八月「谷田部村々出精人御褒美取調帳」

表彰者の選定は、藩役人の見立てと村民の入札の二通りの方法で行なわれている。まず、前者について検討しよう。仕法開始後、田畑一筆ごとに耕作者名と反別を記した杭を立てさせ、藩役人が頻繁に廻村して農事を奨励し、その出精度を検分している。⁽³⁶⁾それに基づいて表彰者を見立てた。表22—1に表彰者の名前・表彰理由・褒美の内容を示しておく。

表彰者の性格・表彰理由から、三類型に分けられる。A類型は、一般農民の中から、「農業出精、心掛宜敷年来御定之通御上納致皆済、親へ孝道相心掛ケ、本家潰れ跡取立致相続、本末之信義相弁」(境松村直右衛門に対する表彰理由)という、まさに幕藩領主からみた理想的農民像に合致した者を選んで表彰したものである。なかんずく、潰れ跡さを再興した者や荒地再発に力を注いだ者を重点的に選んでおり、彼らを模範農民として表彰することにより、農村復興への内発的意欲を喚起せんとしている。女性では、親と死別、あるいは夫と死・離別した後、女手一つで農業に励み、子供を養育した者が表彰されている。B類型は、役向に出精した村役人。あるいは荒地再発に努めた村の惣百姓に対する表彰である。C類型は、家業に出精し、藩に御用金を献上した豪農・商に対する表彰である。

以上の如く、仕法を遂行する上で模範となる農民・村・商人を藩役人が見立てて表彰することにより、全領民の仕法への協力を促さんとしている。

表 22-1. 天保 6 年 8 月谷田部領出精人表彰 (藩役人見立て)

村名	名 前	理 由	褒美の内容	類型
台 町	弥 五 郎	農業出精, 孝行	青銅 1 貫文	A
若 栗	久右衛門	荒地再発先祖跡再興	新鎌 2 挺	A
大 井	庄屋・組頭	役向出精, 村方取締行き届き	庄屋鉄 1 挺, 組頭 鎌 2 挺	B
大 井	惣 百 姓	村方一致出精	鎌 1~2 挺	B
市ノ台	久 助	農業出精	鎌 2 挺	A
境 松	直右衛門	農業出精孝行, 本家潰れ跡再 興	一代上下御免	A
刈 間	孫右衛門	農業出精, 御用金差し出し	一代上下御免	C
	釜屋治郎兵衛	御用金差し出し, 仕方協力	鑄鉄10挺, 新鎌15 挺	C
	和泉吉左衛門	御用金差し出し, 仕方協力	鑄鉄10挺, 新鎌15 挺	C
境 松	重左衛門・久平	役向出精, 村方取締行き届き	新鎌 3 挺宛	B
新 町	嘉右衛門後家りい	農業出精, 子供養育	鎌 2 挺	A
百 家	常七妻すい	農業出精, 実家潰れ跡再興	新鉄 1 挺	A
刈 間	伝 兵 衛	農業出精	新鉄 2 挺	A
根 崎	吉三郎・六三郎	農業出精, 荒地再発	新鎌 2 挺	A
高 田	義右衛門娘りん	農業出精, 子供養育	新鎌 3 挺	A
小野崎	庄屋・組頭・惣百姓	農業出精, 荒地再発	年貢米金 3 ケ年免 許	B
不動町	政右衛門	農業出精, 潰れ百姓跡再興	一代上下御免	A
上横場	伝右衛門	農業出精, 潰れ百姓跡再興	一代上下御免	A
中 内	富 兵 衛	村方小前支配行き届き	新鉄 1 挺	B
今和泉	四郎兵衛	農業出精	新鉄 1 挺	A

〈註〉・天保 6 年 8 月「谷田部村々出精人御褒美取調帳」(「二宮尊徳全集」第 23 巻, 692~701 頁) により作成。

表 22-2 台町村で表彰された者の持高

名 前	入札数	持 高 (天保4年)
忠 藏	10	石 11.175
広 三 郎	7	10.589
弥助 粹 繁 藏	7	11.497
重右衛門 粹 榮 藏	4	17.159
忠 吉	4	14.704
庄 七	3	11.196
吉 兵 衛	2	10.842
弥右衛門 粹 兵 七	2	11.490
弥 五 郎	藩役人 見立	4.077

〔註〕・持高は天保4年「人別并所持高書上帳下書」(今川家文書)による。なお、村外の持高も含めた(表24も同)。

上から見立てて表彰する仕方は、従来幕藩領主が行なって来た伝統的な方式である。これに対し、村民の入札によって選ばれた者を表彰する方式は、尊徳仕法に特有なものであり、公平な立場からみて妥当な者が選ばれるようにとの配慮、および村民の自主性・主体性と自己の行為に対する責任感を涵養せんとする意図に基づくものである。⁽³⁷⁾

この方式で、谷田部領全体で七四名表彰されている。表彰者ごとに入札数と入札者の名前が記されており、誰が誰に入札したか分かるようになっていいる。表彰された者は当主が大部分を占めているが、粹が選ばれている事例もあり(七名)、入札対象は当主だけでなく、その家族も含めていたことが知られる。ただ、例えば、台町村では弥助粹の繁蔵が入札七枚で選ばれているが、当主の弥助は忠蔵に入札しており、粹の繁蔵は入札者としては名前が出てこない。したがって、入札資格者は当主に限られていたものと思われる。各村の戸数に応じて予め当選定数が決められていたようで(一〇八名)、当選者のボーダーラインは村によって異なっている。褒美は鉏・鎌の農具であり、鉏は各村の高

位当選者に与えられており、鎌の数も当選順位によって差が設けられている。

台町村で表彰された者の所持高を調べてみると(表22-2)、入札によって選ばれた者はすべて一〇石以上となっている。持高自体は家族労働による自作規模であるが、表12と照合すると、この村では上層に属する。出精人を選ぶ際、経営の安定という具体的表象が出精度を示すものと判断されたのかも知れないが、村内における力関係も多分に反映していたと思われる。後の天保九年に入札がなされた際にも、この年とほとんど同じメンバーが選ば

れている(表24)点からしても、その感が強い。したがって、入札方式によって尊徳の意図していたところが、実際にどの程度農民に浸透したか、疑問が残る。逆に、藩役人の見立てでは、四石余の弥五郎が選ばれており、表面上の貧富に関係なく、日常の生活態度に基づいて選んだことがうかがえる。

◎天保七年十二月「茂木皆済並穀持共御褒美帳」・◎同八年三月「谷田部窮民御救並村々助成御褒美被下帳」

◎・◎とも、貯穀をした者、および窮民助成のために貸穀・売穀した者が表彰されており、飢饉時の表彰の特徴が表われている。各村とも数名表彰されており、褒美として苗字・帯刀・上下を免許されるか、白銀・歟・鎌等を下与されている。

また、◎では、年貢の早期皆済の村あるいは農民個人に対する表彰も行なわれている。褒賞の基準を役所が詳細に規定しており、要約すると、以下の如くなる。(一)、皆済期日は一月二五日で、一月一五日までを一番皆済、同月一八日までを二番皆済、同月二一日までを三番皆済とする。(二)、一番皆済・二番皆済の村には、前者では村上納米高の五パーセント、後者では二・五パーセントを下す。三番皆済の村には、鎌一挺宛各人に下す。そのうち五俵以上の者には新鎌二挺宛、七俵以上の者には新歟一挺宛下す。但し、一〇俵以下の村方皆済は、二番皆済の通りに褒美を下す。大村の場合は、一組皆済でもよい。曰、一番皆済期日まで一村皆済の無い場合は、皆済した個人ごとに、五俵以上皆済者には上納米高の二・五パーセントを下し、五俵以下の者には上納高に応じて鎌二挺あるいは一挺を下す。また、二番皆済期日まで一村皆済の無い場合は、五俵以上の者には新鎌一挺、五俵以下の者には鎌一挺を下す。以上の如く、皆済時期によって褒美に差を設けるなど、皆済意欲を引き出すために、かなり細い配慮をしている。殊に、一・二番皆済の村には、褒美として年貢米の一部を下すことにして、皆済奨励と同時に飢饉対策をも兼ね合わせているのが、この年の特徴である。これについては、「米にて御褒美被下置候儀は、不御容易儀に付、後年之例に不

相成候間、其旨可心得もの也」と、当年限りの特例である旨、役所より申し渡している。

表23をみると、茂木領の大半の村が褒賞資格を得られる期日までに年貢を皆済しており、しかも、一番皆済が最も多く、次いで二番皆済で、三番皆済はわずか二村のみである。年貢米の一部が下与される一・二番皆済が大部分を占めているところからして、飢饉対策を兼ねた年貢皆済奨励策がかなり効を奏したことがうかがわれる。また、三番皆済期日までに一村皆済に至らなかった村でも、かなりの農民が個人的に表彰を受けている。

表 23 天保7年12月茂木領
年貢皆済村・組の表彰

表彰村・組名	皆済時期 区 分
藤 村	1 番皆済
高岡村	1 番皆済
同 村	1 番皆済
芦 村	2 皆皆済
石坂井	1 皆皆済
御槻村	2 番皆済
檜木村	1 皆皆済
河井村	1 番皆済
増井村	2 番皆済
馬門村	3 番皆済
河又村	1 番皆済
入郷村	1 番皆済
小山村	1 番皆済
内村	1 番皆済
同 村	1 番皆済
同 村	1 番皆済
同 村	1 番皆済
同 村	2 番皆済
同 村	2 番皆済
同 村	2 番皆済
飯野村	3 番皆済

〈註〉・天保7年12月「茂木皆済並穀物共御褒美帳」(「二宮尊徳全集」第22巻, 701~719頁)により作成。

① 天保九年四月「谷田部農業出精人御褒美帳」・②同年十二月「谷田部奇特出精人御褒美並御救被下帳」・③同年一月「茂木奇特出精人御褒美被下帳」⁽⁴⁰⁾

④・⑤には、最初にこの年の表彰の趣旨について述べた役所よりの「申渡」が記されている。例えば、⑥では、「先般、御入部に付、御巡見被為済候之所、兼て被、仰出候御趣意、不泥旧弊、誠実に相守、一致之丹誠相連、農業相励、改革之姿押移、追々村柄一際取直し候哉、御見渡 御賢察被為在、御満足に被 思食、出精之族へは、夫々御褒美可

被下置御沙汰に付、今般其村々呼出、出精之族へ入札申付、依次第御褒美可被差遣」と述べている。つまり、この年の表彰は、巡見の結果、仕法がかなり成果をあげつつあるとの認識に立ち、仕法の趣旨を守り、農業に出精した者を表彰することにより、一層の奮励を促すことを意図したものである。

まず、藩役人の見立てによる表彰についてみると、谷田部領では天保九年四月に三名、同年一二月に三〇名、茂木領では同年一月に九〇〇名近く表彰されている。褒詞をみると、表彰理由は農業出精・潰れ跡式再興・荒地再発・冥加米金上納・貯穀等々であり、仕法趣旨の体现者を藩役人が見立てて表彰し、「弥其気無弛、出精差加永続可致」と、一層の奮励を促している。褒美としては、苗字・上下を免許されるか、酒・吸物あるいは鉄・鎌等を下与されている。茂木領ではきわめて多くの者が表彰されているが、その大部分は貯穀をしている者、昨年から当年にかけて冥加米・金を上納した者である。

村民の入札による表彰は谷田部領のみで行なわれている(㊦)。天保六年の時は、各村ごとに定数を決めて、入札数の多い順に定数までを表彰者に決定し、褒美の種類・数も村ごとに順位に応じて決めていたのであるが、この年は、入札二枚以上の者をすべて表彰し、褒美も村に関係なく、入札数によって一律に決めている。したがって、表彰人数もふえ、一番多い内町村では一五人も表彰されている。褒美は鉄・鉄搭・鎌・鋤である。一律に入札二枚以上の者を表彰することにしたのは、少しでも多くの者が表彰されるよう配慮したものと思われる。

台町村では、天保六年時の当選者八名はすべて持高一〇石以

表 24 天保9年4月台町村で表彰された者の持高

名前	入札数	持高 (天保4年)
△退蔵	6	11.196
○忠吉	6	14.704
○忠蔵	8	11.175
○吉兵衛	3	10.842
○兵七	3	11.490
○円蔵	2	9.757
○栄蔵	6	17.159
○弘三郎	6	10.589
○繁蔵	3	11.497
源蔵	2	8.794

(註)・○印は、天保6年にも選ばれている者。

・△印は、天保6年に選ばれていない庄七の枠。

上の上層農民で占められていたが(表22—2)、この年には一〇石以下の者が二名、入札二枚を獲得して当選している(表24)。ただ、他の八名のうち七名は天保六年時と同一人物であり、一名は同じ家の者であるので、先に指摘したように、公平化を図り、村民の自主性を涵養するための投票とはいえ、そこには村内での力関係が多分に反映していたであろうことを推測せざるを得ない。

④天保九年「谷田部田方早皆済御褒美取調帳」・④同年一月「茂木田方早皆済御褒美取調帳」⁽⁴¹⁾⁽⁴²⁾

褒美の内容は鉾・鉾・鎌・唐箕・千石通し・蕨等種々の農具であり、これらを一番皆済(一〇月二八日迄)と二番皆済(十一月三日迄)とによって差を設けて下与している。谷田部領・茂木領ともに、ほとんど全戸数と思われる多数の者が表彰されており、しかも、大部分が一番皆済である(茂木領は全員一番皆済)。また、三年連続惣村一番皆済した村には、年貢米の一割を褒美として下している。谷田部領では上横場村・南中妻村、茂木領では河井村・小深村・入郷村・河又村・山内村が、その褒賞を受けている。

農民たちが積極的に年貢を上納し、また算加米・金を献納しているのは、確かに褒賞が効を奏したと言えるが、しかし、単にそれだけでなく、納めた米・金が農村復興事業の費用として、再び自分たちに還元されることを期待していた面も大きかったに違いない。さればこそ、廻村した役人が「大方御趣法之御趣意押移、追々可致旧復哉に御見渡被成、御頼母敷被思召候」(⑤の前書)と認識した如く、農民たちは積極的に仕法に協力したのである。

だが、現実には、先にみたように、この頃から「無尽蔵」の米・金の大半は藩の御勝手へ繰り込まれ、農村復興のためにあまり支出されなくなっている。そして、仕法の内容自体も、後述の如く、農民に負担増を強いるものに変質していく。それに伴い、農民の間に次第に不満がつのり、藩の施策に抵抗する動きもみせるようになる。

⑤天保一〇年五月「谷田部奇特人御褒美帳」⁽⁴³⁾

この年の表彰は、その前文から、藩主が大坂城番で留守をしている間に、これまで仕法によって高まってきた農民の農業への意欲が弛緩するのを防止することを意図したものであることが知られる。小野崎村の庄屋・組頭・惣百姓を農村復興に著しい成果をあげたとして表彰している他、七ヶ村一人の農民を藩役人が見立てて、農業出精・荒地再発・入百姓の世話等の理由で表彰している。

◎天保一二年十一月「御褒美返納願書之写」⁽⁴⁴⁾

茂木領の馬門村他一四ヶ村の世話方・組頭・庄屋が、昨年まで田方年貢を三年連続一番皆済した褒美として下される予定の上納米の一割を、献納したい旨、願ひ出ている。これは、農民が自発的に願ひ出たのか、あるいは藩役人の指図に従ったものか断定し得ないが、先にみたように、天保一二年には「無尽蔵」米の九割が藩の御勝手へ繰り込まれており(表19-1)、仕法が藩財政再建を第一義とする方向に転換した時期であることを考えると、そこには藩の指示が介在していたことも、十分予想できよう。

c 荒地再発

荒廢に歸した土地を再発することは、尊徳の農村復興仕法の根幹をなす。

天保六年四月、まず谷田部領の根崎村・境田村・古館村・境松村・小野崎村・手代木村・松木村、茂木領の馬門村・飯野村・石下村から荒地再発事業が開始された。小野崎・手代木・松木の三ヶ村には、桜町仕法に従事した岸右衛門と久蔵が黒鍬人足を引き連れて入り、事業に当たっている。また、茂木領の三ヶ村へは、小田原藩領柏山村の弁左衛門を、荒地再発功者の故を以て遣わし、世話人としている。⁽⁴⁵⁾「同年六月に至見渡候所、荒地再発場所植付、作並宜、別て谷田部小野崎村、年来荒廢之場所故、作並一ト際宜、掛役人共は勿論、其余藩民、挙て人氣引起、御趣法に趣

候様に御座候⁽⁴⁶⁾と、中村勸農衛は記しており、藩民挙げて意欲的に荒地再発に取り組んでいた様相がうかがわれる。茂木奉行上田正太郎他三名の天保六年七月三日付の尊徳宛の書翰でも、荒地再発および溜池・堰・道橋等の普請が順調に進捗している旨、報告されている。⁽⁴⁷⁾

茂木領では、当初、「安逸無頼人は勿論、其外一同農間見合励勤致し、賃金扶持米を以、募方を補ひ申度段願出候付、其意に任為取行」ていたが、世話人の弁左衛門より、「開発方元より一切不案内之儀に付、忝込候者而已相勤度旨」願い出たため、小田原領より一〇数名、桜町領より数名の開発に慣れた人足呼び寄せ、天保七年一月より、地元の人足と共に開発に当たらせている。⁽⁴⁸⁾

小田原人足は、一月二八日より七月二四日まで、馬門村・同村字深作・飯野村・鮎田村高田新田・石下村石ヶ坪田・同松山下・牧野村の開発に順次従事しており、延人足八八八二分、賃金二五両余・扶持米二五俵余となっている。一方、桜町人足は、一月二九日より二月一三日まで馬門村の開発に、六月六日より同月二七日まで牧野村の開発に従事しており、延人足九〇人七分、賃金三両一分・扶持米一石余となっている。

四月晦日付の上田正太郎他三名の尊徳宛の書翰では、開発が一段落ついたので、弁左衛門らを帰国させても差し支えない旨、報告されている。また、この年には、冷氣雨天がちで諸作物が熟さず、日々米価が高騰していたため、豊作になり米価が下がるまで開発は見合わせることにして、七月二四日で開発を休止し、小田原・桜町人足を帰国させている。

表19をみると、天保八年以降も、荒地再発入用は支出されている。天保九—一一年は、藩主の大坂城番勤務のために、公式には仕法は中断されていたが、荒地再発事業そのものはこの間も継続されていたことが知られる。ただ、費用の支出額は、天保一〇年の金額以外は、同六、七年よりも大幅に減少している。さらに、同一二年に仕法再開を尊

徳に依頼した際、藩主は「分度」外の収入を農村復興費用に充てることを約したにもかかわらず、現実には、荒地再発入用は同一二年に一五俵余支出されただけとなっている。そして、「分度」外収入の大半は藩の御勝手へ繰り込まれている。

その上、再発地よりの冥加米の上納率も引き上げられた。再発地については、尊徳の作成した雛形では、仕法期間中は、反当り二斗の割合で冥加米を上納させることになっていたのであるが、⁽⁴⁹⁾しかるに、天保十一年九月、羽成村の名主・組頭が、次の如き願書を役所に差し出している。

乍恐以書付奉願上候

御領分羽成村小前百姓共願出候ニ付、役人共々奉申上候、当村再発田之儀、是迄厚御慈悲を以、御免合被成下置候処、去ル西
年、斗式升免ニ被仰付、御上納罷在候得共、一体地窮御田地多ニ而、此上御免合登リ候而は、中々以出作不行届候場所多、
困窮之小前一同難義至極ニ御座候、何卒格別之御慈悲を以、是迄通ニ而御年延被成下置度奉願上候⁽⁵⁰⁾

右の願書によると、酉年（天保八年）に冥加米の上納率が反当り二斗二升に引き上げられ、さらに同一一年、再度それが引き上げられんとしたため、小前百姓たちが、これ以上引き上げられては「難儀至極」であるとして、その年延べを、村役人をつき動かして役所に願い出させたことが知られる。

先述の如く、天保八年は、「無尽蔵」の米・金の大半が藩の御勝手に繰り込まれるようになった起点の年である（表19）。しかも、表18—1をみると、再発冥加米自体が「無尽蔵」に繰り入れられていないケースが多い。⁽⁵¹⁾してみると、藩役人は、尊徳の指示に反し、再発地よりの冥加米上納率を引き上げる一方、それを最初から藩財政に繰り入れるか、あるいは一旦「無尽蔵」に入れても、そこから御勝手に繰り込むことにより、藩の財政収入の増加を図ったことが知

られよう。こうした藩の方針が小前百姓たちの反発を招いたのである。そして、後述の如く、尊徳からも厳しく非難されることになる。

天保六―一二年の間に支出された荒地再発入用の総額は、米二〇八俵余・金六三六両余で(表19)。うち谷田部領一八俵余・三一五両一分余、茂木領九〇俵・三三〇両三分余となっており、ほぼ同額である。荒地再発に並行して、用水路・排水路・堤防・道路・橋梁等の普請も行なわれている。天保六―一三年の諸普請入用の支出総額は、米五四俵余・金三八九両余である(表19)。うち谷田部領は四八俵余・三六六両一分二朱余、茂木領は六俵・二二両二分二朱余となっており、前者が大部分を占めている。これは、谷田部領は窪地が多いため、雨が降ると洪水が発生しやすく、また滞水して作物が腐りがちであったので、治水・灌排水条件の整備に特に力が注がれたからである。

「報徳記」には、谷田部藩領の仕法の成果について、「数百町の開田をなし興復の用財たる分度米の米粟千五百苞を出せり⁽⁵²⁾」と記されている。尊徳自身は、仕法前の谷田部藩領の荒地は全領地の六〇パーセント近くで、仕法の結果、そのうち約半分が復旧した、と見積もっている⁽⁵³⁾。しかし、まだ半分未復旧の荒地が残っているにもかかわらず、藩側は、ある程度復旧したことに安心して、農村復興にあまり力を注がなくなり、「分度」外の収入を藩財政に流用していることを、彼は厳しく非難している(この点については後述する)。

d 人別増加策

農村を復興させるためには、荒地再発と共に、減少した農村人口を回復させることが要諦となる。

天保七―一三年の間に、分家・入百姓による新百姓取り立て入用として、米二六一俵余・金一〇七両余が支出されている(表19)。米は全額谷田部領に対するものであり、金の方は谷田部領七七両余・茂木領三〇両余となっている。

人口減少の著しかった谷田部領の方に、特に力が注がれたことが知られる。新百姓には家作料・農具・生活必需品・夫食等を無利足で貸与し、そのうちより荒地再發賃金を差し引き、残額を返済すれば、家屋敷田畑をその者の所持とすることになっている。⁽⁵⁴⁾また、潰れ百姓の跡式を再興して子弟を分家させた者や入百姓のうちで特に出精した者を、積極的に見立てて表彰している。

表19—2をみると、天保七・八・一一・一二年に「出生人養育金」が支給されている。しかし、額は多くなく（総額七両三分）、しかも茂木領のみに限られているので、制度化されたものではなく、特に困窮の者のみに手当が支給されたようである—嘉永五年に小児養育手当支給制度が創始されている。第二章第三節でみた如く、尊徳自身は、農民が間引・墮胎をするのは、決して領主の言う如く、農民の仁心の欠如によるものではなく、年貢の過重さと民政の不行き届きのために、農民の生活が成り立たないからだ、と認識していた。それ故、負担を軽減し、撫育に努めて、農民の生活を安定させさえすれば、自然の性情に基づき、必然的に子供を養育するようになる、と考えていたのである。領主の農民教諭では、必ず間引・墮胎の禁止を強調しているのに比べ、彼がとりたててそれについて農民に教諭はしていないのも、そうした考え方に基づいていたと思われる。

では、谷田藩領の人口はどの程度回復したのであろうか。うち茂木領については、慶応三年の人口が一〇、〇八六人であったことが確認されている。⁽⁵⁵⁾天保七年の同所の人口は六、七〇二人であるから、仕法開始後幕末にまでに、三、三〇〇人以上も増加したことになる。ただ、享保八年には一三、一三三人であったので、最盛期には大分及ばない。

e 助郷人馬役負担の便法

茂木領の村々にとって、日光街道・奥州街道の助郷人馬役は大きな負担であり、農民を疲弊させた一因であった。

天保八年十一月、下菅又村權左衛門・藤縄村貞四郎代利右衛門・山内村庄右衛門の三人が一七ヶ村惣代として出府し、道中奉行へ「年柄難渋に付、宿詰休年敷願」をした。これに対し、谷田部藩側は、「海道人馬繼立等之儀は、東照宮様、御神徳を以、御静謐御治世被為遊、上下子孫末々に至迄安穩に相暮し、今日之營、平安に相過候は、全御神徳故と、一同も難有承知可罷在、右に付ては人馬繼立、宿詰之儀は願出、出精相勤候ても可然程之儀に可有之所、目出度太平之御代を常と致居候故、代助郷適被仰付候ては、難渋迷惑歎願申立候様成儀は、御国恩を致亡却候筋にて、其村方之禍とも可相成間、潔相勤候はゞ、却て福に可相成、天然自然之実理候間、皆共徹心魂致承服」と農民を諭して、訴願を中止させている。そして、その代わりに、尊徳の指示により、仕法期間中、再発地よりの上納米を免じ、その分を街道雇人馬賃錢に充て、作徳米は村方に積み置き、飢饉凶荒・病難の備えとするという措置をとっている。⁽⁵⁶⁾

II 天保一四年以降の仕法

天保一四年、尊徳と谷田部藩との関係が断たれたことにより、以後の仕法は、中村勤農衛独自の指導の下に行なわれることになった（彼は安政五年八月に死去している）。それに伴い、仕法の内容自体も、尊徳の指導したところとは大きく変質したものとなっている。以下、この期の重要施策の特質について検討しておこう。

a 日掛縄索代金上納と無利足金貸付制度

天保一四年十一月、茂木領の藤縄村・林村・小深村の庄屋・組頭・惣百姓が、公儀（幕府）より下された日光参詣の際の人馬鉢石宿詰の手当金を、「村柄取直」仕法資金のために献上したい旨、願⁽⁵⁷⁾い出た。これに対し、藩は、この献上金を「報徳善種」に定め、この金高に倍する藩よりの「御下金」を加え、病難困窮難渋者を救済することを目的に

表 25 無利足金貸付の実態

年次	貸付金額	左の金額の収入源	1ヶ年返済金額 (無利7ヶ年償)
天保14	金223両 永370文5分	茂木勘善寸志上納金	金31両・永910文7分1厘
弘化元	金235両 永713文2毛	救助手当余産品代下金 金41両・永430文2分 勘善繩索代 茂木 金123両・永692文8分2毛 谷田部 金70両・永592文	金33両・永673文2分9厘
弘化2	金189両 永643文3分3厘	勘善繩索代 茂木 金119両・永150文1分3厘 谷田部 金70両・永493文2分	金27両・永919文4厘
弘化3	金185両 永974文	同上 茂木 金116両・永371文8分 谷田部 金69両・永602文2分	金26両・永567文7分1厘
弘化4	金184両 永219文1分	同上 茂木 金114両・永790文2分8厘 谷田部 金69両・永219文1分	金26両・永287文5厘
嘉永元	金189両 永969文9分5厘	同上 茂木 金113両・永222文1分5厘 谷田部 金76両・永747文8分	金27両・永138文5分6厘
嘉永2	金186両 永324文3分6厘6毛	同上 茂木 金111両・永730文6分6厘6毛 谷田部 金74両・永593文7分	金26両・永617文7分6厘
嘉永3	金186両 永324文3分6厘6毛	同上 茂木 金111両・永730文6分6厘6毛 谷田部 金74両・永593文7分	金26両・永617文7分7厘
嘉永4	金186両 永324文3分6厘6毛	同上 茂木 金111両・永730文6分6厘6毛 谷田部 金74両・永593文7分	金26両・永617文7分7厘

〈註〉・嘉永4年11月「繩索代金貸立勘善録」〔二宮尊徳全集〕第26巻、871～880頁〕により作成。

無利足金貸付制度を創始し、農閑期（正月より春彼岸迄と秋彼岸より一二月晦日迄）に一夜一軒に付き一房宛縄索いさせ、これを積み立てて上納させ、その代銭の倍の「御下金」を「報徳善種金」に加えることによって、この制度を将来にわたって運用していくことにしたいと、農民に申し渡している。⁽⁵⁸⁾

右の趣旨に基づき、藩役人が具体的な雛形を作成しているが、⁽⁵⁹⁾それでは、資金とされているのは先述した天保二三年の茂木領の村々の褒美献納米の代金である。表25に、無利足金貸付の実態を示しておこう。本来、この制度創始の目的は病難困窮者救助にあつたのであるが、実際には、「精農心掛宜敷輩、分家取立、新家作漬跡式相統、農馬買入、其外窮民救助、荒地起返、質地田畑取戻、手宛等謙々賞賛、救助等に施」と、仕法全般の進捗を図るために運用されている。無利足七ヶ年賦であるが、完済後、さらに一年分を「潤如金」として「推譲」させている。⁽⁶⁰⁾雛形では、年々の返済分と「潤如金」を貸付資金に加えていくことにしているが、実際には、貸付資金はその年の縄索代上納金のみとなっている。集計欄では、天保一四—嘉永四年の貸付総額一、七六七兩のうち五九九兩余を「是迄良民賞賛窮民救助荒地田畑再発料」として引き、残り一、一六七兩余の年賦返済分は翌嘉永五年より小兒養育手当に充てる旨記しているので、嘉永四年までに返済された分は仕法費用に廻したらしい。縄索代上納金を資金とした貸付制度は以後も継続する予定で、その見積もりを作成しているが、返済分は翌年より小兒養育手当に廻すことにしている。

日掛縄索制度は、本来は、藩が農民から縄を一房四文の割合で買い上げ、その代金を「報徳善種金」に加えるものであったが、実際には、「当年縄索代納、定之通上納遅滞無之様、出精代納可致事」⁽⁶¹⁾というように、一軒に付き一日四文の割合で代銭納させている。したがって、農民にとっては新たな課税となり、嘉永五年一月、台町村清衛門他三人が、次の如く、役所に縄代納の免除を願い出ている。

台町清衛門外三人之者一同奉申上候、私共義運々困窮差寡、諸借金相嵩、家内暮方難相成仕合、無余儀去亥十二月中丸奉公稼ニ罷出、相残り候而は、家内老弱・幼少之子供・厄介多ニ而漸々其日を相當罷在候儀ニ御座候処、昨年亥年迄月々繩索代納無滞相納罷在候処、右体難済之次第ニ相成候而は、此上難儀至極ニ奉存候、無抛今般奉願上候、尤追々取統奉公向引込候節ハ、出精仕、右取立御上納可仕奉存候間、此段被爲御聞召訳、當時御有免被成下置候様奉願上候⁶²

繩索代上納という名目の新税が農民を「難儀」せしめていたことが知られよう。では、農村復興仕法の本来の資財である「無尽蔵」の米・金は、どのように扱われていたのであろうか。

天保一四年の「御收納米金三ヶ所取捌正現見渡帳」⁶³をみると、「分度」外の収入を除いて藩の財政を賄うとすると、七・二両余の不足となり、そこで、「分度」外の収入を全部藩財政に繰り込むことにして予算を立てている。また、弘化二年の「辰米金取捌三ヶ所差引目録」⁶⁴では、谷田部領の「分度」外収入米二二五俵余（茂木領は無し）の全部が「御勝手御借上ケ」となっており、さらに江戸の「無尽蔵」より三五両が御勝手に繰り込まれている。先にみた如く、すでに天保八年より、「無尽蔵」の米・金の大半は藩の御勝手に繰り込まれるようになっていたのであるが、仕法が完全に中村勤農衛の指導下に入った天保一四年以降、その傾向はさらに強まったものと思われる。

してみると、日掛繩索代金上納制度は、農村復興仕法の資金を新たに捻出するために創始されたことが知られよう。つまり、尊徳の設定した「分度」を超える年貢収納分および再発算加米等も藩財政に繰り入れ、農村復興仕法の方は新たな農民の負担によって推進しようとしたのである。中村勤農衛自身は、「縦令平均内外之規則相崩候共、人別丈之民力相助、及勸農候はゞ、自然と人氣精農に進み、何れ之日歟旧復安堵之手寄可相求之時宜可有御座」⁶⁵と、考えていた。だが、農民に負担増を強いる方法で、農民の生産意欲を高め、復興の実をあげることなど、望むべくもなかった。現実には、農民の反発を招くことになったのである。彼は、「一般之人質情弱之風俗に流、是非之弁別なく、動れば聊

(理)之利非を争、公事公訴を企、……ハ中略V……家株致破滅離散退転および候もの少からず」と、農村復興が思うように進展しないことに苛立ちを示し、それは農民の情弱・無分別によるとして譴責している。

一方、先にみた如く、藩の借財の方は、天保一二年以降順調に返済が進み、特に天保一四年には未返済額が大幅に減少している(表16)。それは、仕法の内実が藩財政再建を第一義とする方向に転換したことに基づいていたことが、以上の検討から知られよう。

b 出産・小児養育奨励

嘉永四年、中村勸農衛は、農民の間引・墮胎の風習を戒めるために、「さとしぐさ」と称する教諭書と地獄絵を村々に配布した。⁽⁶⁷⁾そこでは、間引・墮胎の原因は農民の仁心の欠如にあるという認識に立ち、それを鳥獣にも劣る行為であるとして厳しく批判している。そして、天の冥慮に背いて間引・墮胎を行なうが故に、天罰として諸々の災難・不幸がふりかかって来るのだという論理で、それを止めさせんとしている。しかる上で、最後に、以後縄索代金貸付けの返済分を小児養育手当に充てる故、子供を育て、農業に励み、年貢をすみやかに納め、上の御恩に報いるようにと、説諭している。「さとしぐさ」の論理は、第一章第四節でみた領主階級の手になる農民教諭書一般の論理と同様のものであり、間引・墮胎の原因を領主の収奪の苛酷さと勸農の不行き届きにみている尊徳の論理(第二章第三節参照)とは対蹠的である。

中村勸農衛は、嘉永五年に出産・小児養育手当支給制度を創始した。その雛形をみると、嘉永五年の資金は、谷田部・茂木両領の再発算加米の代金一〇九両余に先述の縄索代金貸付けの返済金を加えて計五六八両余となっている。その支出の内訳は、出生の際一人に金一分宛手当を支給することにして、一年に八〇人出生と見積もって計二〇両、⁽⁶⁹⁾

出生児一人に付き一ヶ月四〇〇文宛養育手当を支給することにして、一ヶ月間で計五三兩余、尊徳より借りた報徳金の年賦返済分一〇〇兩、残金三九四兩余は利金三九兩余で「窮民救貸付」となっている。翌年よりは、前年度より繰越金(前年度の「窮民救貸付」の返済元利金)と再発算加米の代金(年々一〇九兩の見積もり)、縄索代金貸付けの返済金とを資金として、この制度を運用していくことにしている。養育手当は、出生後三ヶ年間支給することになっている。

この制度の名目は出産・小児養奨励となっているが、実際には、手当の支給対象は四人目以上の出生児に限られ、したがってその支給総額は少なく、各年次の資金の大部分は利付き(利率約一割)の「窮民貸付」に充てられている。しかも、その元利金がすべて翌年の資金として繰り越されることになっているので、一年季の貸付けであったことが知られる。したがって、「窮民貸付」という名目に反して、実際には、農民よりの高利収奪として機能しかねない性格を持つものであった。村方には利付きの一年季で拝借した証文も残っている⁽⁷¹⁾ので、実施されていたことが知られる。

また、嘉永五年には、領内より分限に応じて献金をさせ、これを利率一割二分の一年季で領民に貸し付け、返済元利金を以て、藩の臨時入用の備えとする制度も創始している。⁽⁷²⁾これなどは、藩の財政再建を第一義とするこの期の仕法の性格を端的に示すものと言えよう。谷田部領では、嘉永五年より三ヶ年間、一年ごとに一三五兩宛献金するよう申し付けられており、嘉永五年の分は一ヶ町村一四名に、利率一割二分で貸し付けられている。⁽⁷³⁾このうち中妻村の権兵衛は「名主」と肩書きされており、また台町村では、やはり名主であった伝左衛門が貸付を受けている。したがって、貸付対象は名主クラスの富裕農民・商人であったと断じてよく、しかも献金の主体も彼らであるから、実際には、名目上の貸付けで利子を稼いだものと言える。

c 積み穀制度

尊徳指導下の仕法においても、備荒貯蓄の必要性は度々説かれているが、それはあくまで自発的に節儉に努めて余剰を生み出し、それを貯蓄することを促したもので、制度化はされていなかった。ただ、「無尽蔵」の米は、その一部を順次翌年に繰り越していくことにより、備荒貯蓄としての機能をも果たすべき性格のものであった。それは、表17をみると、「無尽蔵」のうち金の繰り越しは天保一〇年以降全くみられないのに対し、米の方は天保一〇年を除いて繰り越しがみられることにも示されている。しかし、天保一一年以降は、「無尽蔵」米の九割以上が藩の御勝手へ繰り込んでいるために、繰り越し米の額はかなり減少している。

嘉永三年に積み穀制度が創始されているが、これは、「無尽蔵」米の藩財政への繰り込みによって、その備荒貯蓄としての機能が低下せざるを得なくなったため、これに代位させようとしたものと思われる。この制度は、年貢割引米のうち一割を備荒のために郷蔵に積み穀させるものである。⁽⁷⁴⁾しかし、ここでのいう年貢割引米は、そもそも荒地・損毛分に相当するもので、藩が新たに減免するという措置をとったものではない。したがって、この制度は、農民にとって実質的には強制的な積み穀上納となった。

嘉永五年一〇月二七日、谷田部領内の名主が寄り合い、当年は旱損・風損のため、積み穀上納の年延べを願ひ出ることを決め、同二九日に役所に願書を提出したが、却下されている。⁽⁷⁵⁾安政四年には、不作のため農民が難渋していたにもかかわらず、藩が積み穀上納を強制したため、館(立)野・中内・上原三ヶ村の小前百姓たちが大挙して江戸の谷田部藩邸に越訴するという騒動も起きている。⁽⁷⁶⁾また、積み穀は利付きで貸し出されている。嘉永四年六月の段階では、二割の利米を加えて次の収穫時に積み戻すよう指示されているが、安政三年の役所宛の積み穀拝借証文はすべて⁽⁷⁷⁾⁽⁷⁸⁾

利米一割となっている。おそらく、この間に、農民の歎願によって引き下げられたものであろう。

d その他

弘化三年の「御用向日記」⁽⁷⁹⁾をみると、藩役人が度々廻村して、荒地再発を指導している記事がみられるので、荒地再発事業はこの期も継続されていたことが知られる。

また、同前の日記によると、弘化三年より御林（藩有林）の植林に力が入れている。同年一月二三日に「御領内御林有之村方江絵図面認差出候様」達せられ、一月二八日には山方諸役人が任命されて、「御林見分」を度々行っている。茂木領は山林が多く、昔から藩の重要な財源となっていたが、天保初年には、「山林竹木逆も、難村困窮、旁以生育難相待、切払売木等にて、平野同様之姿」⁽⁸⁰⁾になっていた。そこで、植林に力を入れて山林を再生し、藩財政に資することを図ったのである。しかし、藩有林はもとより、農民の入会地をも囲んで植林したため、特に平地に位置する谷田部領では、農民の採草地がますます乏しくなり、彼らの反発を招いた。弘化三年と嘉永四年に、谷田部領の一〇数ヶ村が団結して、入会地返還を要求する越訴を起こしており、藩もその返還を認めざるを得なかった。⁽⁸¹⁾

なお、前出の「御用向日記」および台町村の嘉永元年以降の「御用留」をみると、個別的に藩より表彰された記事は散見するが、制度的に行なわれた形跡はみられない。逆に、農業出精者ではなく、耕地を荒した者を入札して役所に届けさせる方法にすり代わってしまっている。⁽⁸²⁾

(三) 尊徳と谷田部藩との確執

先述の如く、天保一四年、尊徳と谷田部藩との関係は断絶した。そのため、尊徳は、これまでの事業報告書の提出

と貸し付けた桜町報徳金の返却を谷田部落に要求した。だが、藩側は、全くこれに応じようとしなかった。中村勸農衛に手紙を出しても返事がなく、会見を申し込んでも、居留守に使われて断わられている。尊徳がこの交渉の経緯について記録した書類をみると、こうした相手側の態度に憤激した表現となっている。

先にみたように(表18—2)、尊徳が谷田部落の仕法のために、桜町領より投入した金子および米・雑穀・鉄・鋤等は、金額にして総額一、九五一両余にも上っている。これは無利足五ヶ年賦で返済すべきものであったが、実際には、天保一三年段階で二六八両三分しか返済されていなかった⁽⁸⁴⁾。但し、この貸付には「趣法通取行功驗無之、返済難相届候節は、不及其儀⁽⁸⁵⁾」という条件が付けられていたが、彼がその返済を強く求めたのは、その投入によってせつかく農村がある程度復興し、「分度」外の収入も生ずるようになったにもかかわらず、彼の指示通りにそれを繰り返し農村復興仕法に投下することをせず、藩財政に流用していたため、「報徳」の趣旨に背いている、とみなしたが故であった。嘉永二年、彼は、谷田部落政のあり方を、次の如く痛烈に批判している。

去ル午年以來、荒地起返し、産出候平均御土台外米金、千五百六拾俵余、其外御本方より多分之輕利金御繰入被下置候御余徳を以、凡拾貳万両余之御借財も荒増形付、柳原御上屋鋪始、谷田御陣屋御普請も出来、次に中郷御下屋敷代地迄相整、去冬は辰十郎様御乗出しも相済候に付、表向は御高丈相整候得共、先年御困窮相成候其根元を不知もの扱は、十分無此上、立直り候様相心得可申候得共、前々古荒五分九厘二毛之内、御趣法以來凡半分、貳分九厘五毛八弗起返り候と見積り、都合七分少し余、貳分九厘六毛五弗之御不足、凡三ヶ年に亙ヶ年皆無同様、罷成候惡種、速に官禄身命を抛て、御子孫永久之為を御開発可被成御身分に候処、案内結構御取立被下置候御恩沢に甘へ、又妻子之愛情にひかれ、先年約諾仕置候発願を翻し、立身出世、身分之為に包置、年々歳々御分内より発行仕候御困窮は、向後御自分始、仮令何程名人智者並出るといへども、是を防事不叶、古歌に、田子の浦に、うち出てみれば、白砂の、富士の高根に、雪はふりつゝ、とかや、眼前当方より繰入候御土台米金、御返済之儀は勿論、御本藩より多分之御助成を以、御世話被進候其甲斐も無御座相成り、忽索之如く荒地と罷成、家数人別御収

納等相減、御困窮に罷成候段、残念至極奉存候、⁽⁸⁶⁾

仕法によつて荒地もかなり起き返り、「分度」外の米・金も産出し、借財整理も進捗したが、しかし、これで十分立ち直つたと判断するのは間違ひである。もし、これで安心するとしたら、それは、以前に困窮した根元を知らないからである。まだ領内には、三割近くの荒地が残っている見込みで、すぐさまその開発に力を注ぐ必要がある。しかるに、先年、「分度」を守り、それ以外の米・金を農村復興仕法に投入することを約したにもかかわらず、違約して、それを自分のためだけに抱え込み、復興仕法をなおざりにしている。このままでは、領地はたちまち元の如く荒廢に歸してしまひ、当方より米・金を繰り入れて援助した甲斐もなくなつてしまふ。以上の如く批判した上で、「去ル午年以來拾五ヶ年之間起返り、産出候平均御分台外米金、其外以前と違ひ、所々起返り候趣法米金も、多分有之候間、一昨未四月、御伺相済居候雛形之通、年々繰返し、尺寸之廢地無之様起返、為作立、其潤沢を以、借財返済、窮民撫育、潰退、転式取立、御仁徳を左右に布候はゞ、御領中而已に不限、詰り御国益にも相成可申候」⁽⁸⁷⁾と、「分度」外米・金を年々繰り返し農村復興仕法に投入していくよう教諭している。

これに対して、谷田部藩側は、尊徳との約束に背き「分度」を守らなかつたことを認め、それを詫びながらも、「第一上經濟不相立候ては、下領民撫育不相届」⁽⁸⁸⁾と弁解している。すなわち、谷田部藩は、藩財政が再建できてこそ領民の撫育もできるのだと、前者を優先させる論理で以て尊徳に返答しているのであり、ここに、農村復興こそが何よりも優先さるべきだとして、領主階級に「分度」内での緊縮生活の實踐を厳しく要求する尊徳の論理との相異が、明らかに示されている。⁽⁸⁹⁾

桜町報徳金返済問題は、結局、嘉永四年にとりあえず三〇〇両を故大久保加賀守菩提所麻布教学院へ回向料として

献金し、翌年より五ヶ年間で残りを年賦返済していくことで示談が成立している。⁽⁹⁰⁾

〔註〕

- (1) 以上、「中村氏岸右衛門問答聞書」(『全集』第三卷、一九一—二〇頁)による。
- (2) 以下、中村勸農衛「趣法発端記録草稿」(同前書三一—一頁)による。
- (3) 以下、特に註記しない限り、同前一一—一九頁による。
- (4) 同前では、「文政元寅より午迄五ヶ年」の平均貢租収納高に基づいて決定されたと記されているが、尊徳の許に提出された資料は文政一二年より天保四年までのものであり、「為政鑑御土台帳」(『全集』第三卷、八二—九九頁)、「荒地開発窮民撫育難村旧復仕法五ヶ年平均御土台帳」(同前書五九六—五九九頁)では、「文政十二丑より天保四已迄五ヶ年平均」となっている。なお、その後、文政八年より天保五年までの資料が提出されているが、「分度」の額自体は変更されていない。
- (5) 家中の俸禄・役料も減額している(天保一年「家中分限帳」、『全集』第三卷、一五八—一七三頁)。
- (6) 『全集』第三卷、五四—五六頁。
- (7) 以下、「口演覚書」(同前書二〇—二〇八頁)による。なお、佐々井信太郎氏は、幕府の命である以上、たとえ領色衰弊すといえども職務を全うするのが君臣の大義である、と尊徳が論じたとされている(「二宮尊徳伝」一八九頁)。また、奥谷松治氏は、この点を以て尊徳の思想の反動性を示す根拠とされている(「二宮尊徳と報徳社運動一九七—一九八頁」)。だが、両氏とも、「報徳記」の記事をそのまま信用されているが、谷田部藩の役人波多晃八郎・上田正太郎が尊徳の説諭および往復書翰を書き留めた「口演覚書」では、本文の如く指示している。
- (8) 天保一四年八月「細川長門守様より水野越前守様へ御仕法向取行方御伺書写」(『全集』第三卷、二一七—二一八頁)。
- (9) 「御趣法筋二宮金次郎殿御断並返答書扣」(同前書二〇九頁)。また、尊徳は、「借財は利費多、高利之借財輕利に払替、利違之分元済に差廻取計候にぞ、借財は借財之備を以返済相届可申」(「御仕法御取纏方御内談御答書」、同前書二三九頁)とも言っている。
- (10) 『全集』第三卷、五七—五八頁。
- (11) だが、釜屋治郎兵衛の場合、農村荒廃によって農民への貸付け金が回収不能となり、経営が悪化していた上に、藩への貸金を帳消しにし、さらに荒地再発費用を差し出したため、結局、倒産している(同前書九七—一〇九七頁)。
- (12) 「御仕法御取纏方御内談御答書」(同前書二三九頁)。
- (13) 第一章第二節で述べた如く、谷田部藩では村ごとに等

級別の年貢取高が定められており（この基準は仕法開始後も変更されていない）、したがって、土地生産力が回復し、引分が少なくなれば、年貢収納額も必然的に増加する。

- (14) 尊徳の作成した雛形では、仕法期間中、再発地よりは反当り二斗の割合で冥加米を上納させることになっている（御趣法御土台金荒地起返冥加米式斗繰返積立雛形、「全集」第三卷、四四一―四五一頁）。

- (15) 「御趣法御土台金無利五ヶ年賦準縄帳」（同前書四八六―四九五頁）。

- (16) 「夜話」一九四（前掲書二一六頁）。

- (17) 「夜話」一九六（同前二一七頁）。

- (18) 以下、特に註記しない限り、「旧復趣法記録草稿」（全集）第三卷、一七八―一八七頁）による。

- (19) 飢饉時には、一般的に領主は領民に対し、草根等まで食するよう指導しているが、尊徳は、それらを食することとは病を生じる因となるとして、厳に否定している（「夜話」一八九・一九〇、前掲書二二三―二四頁）。彼に言わせれば、領民が草根等を食べなくてもすむよう、米雑穀を確保し、窮民救済を万全にすることが、飢饉対策の要諦なのである。

- (20) 江戸へは、桜町・水海道辺で買米して廻すことにしている。

- (21) 「茂木領極難飢民撫育米麦雑穀買入付送り方取調帳」

- （「全集」第三卷、六五三―六五五頁）。

- (22) 「田畑収納平均外米金請払無尽蔵帳」（同前書五七四頁）。

- (23) 「窮民御救穀取調帳」（同前書六七〇―六九一頁）。

- (24) 同前。

- (25) 天保七年二月「報徳貧富融通録」（「全集」第三卷、六五五頁）。

- (26) 天保七年二月「茂木皆済並穀持共御褒美帳」（同前書七〇一―七一九頁）。天保八年三月「谷田部窮民御救並村々助成御褒美被下帳」（同前書七一九―七八頁）。

- (27) (28) 前掲「窮民御救穀取調帳」。

- (29) 前掲「谷田部窮民御救並村々助成御褒美被下帳」

- (30) 前掲「窮民御救穀取調帳」。

- (31) 「報徳窮民勸善録」（「全集」第三卷、六五六頁）。

- (32) 「窮民御救取扱手続取調帳」（同前書六六八―六六九頁）。

- (33) 「夜話」一九六（前掲書二一七頁）。

- (34) 「隨身以来書取申候書付」（「全集」第三卷、一、一五〇頁）。

- (35) 尊徳が飢饉対策を指導した小田原藩領でも、これを契機に、農民の間に「報徳様」として尊徳を慕う動きがわきあがった（長倉保氏前掲「小田原藩における報徳仕法について」五一―五五頁）。

- (36) 「趣法発端記録草稿」（全集第三卷、一四頁）。

(37) 入札褒賞制度の意図については、内山稔氏「尊徳の実踐經濟倫理」八六一八九頁参照。

(38) 「全集」第三卷、七三九—七四八頁。

(39) 同前書七四八—七五一頁。

(40) 同前書七六七—七八七頁。

(41) 同前書七五二—七〇七頁。

(42) 同前書七八七—八一三頁。

(43) 同前書八一四—八一六頁。

(44) 同前書八一六—八一八頁。

(45) (46) 「越法発端記録草稿」(同前書一四頁)。

(47) 同前書一、二二〇頁。

(48) 「茂木領荒地開發用惡水道橋普請人足取調帳」(同前書六二—六二八頁)・「英木領荒地開發桜町人足取調帳」(同前書六二八—六三〇頁)。

(49) 註(14)と同。

(50) 天保一一—一三年「台町御用留」(今川家文書、以下、

ここで引用する「御用留」はすべて今川家文書)。

(51) 但し、茂木領の助郷村の分については、再発算加米上

納を免除している(後述)。

(52) 「全集」第三六卷、一六七頁。

(53) 嘉永二年五月「細川長門守様御領分荒地起返御領色再

復之越法仕上取廻方御内話申上候下按書」(「全集」第二

三卷、二二七頁)。

(54) 「申歳新百姓諸人用渡方取調帳」(同前書九三七—九五

関東農村の荒廃と尊徳仕法(大藤)

七頁)。

(55) 大木茂氏「茂木の歴史」二〇二頁参照。

(56) 以上、天保八年一月「御国恩報徳無尽蔵根元帳」

(「全集」第三卷、八八三—五九二頁)による。

(57) これは、日光参詣の際の助郷人馬費用を、再発田畑取

穀代金および「農間稼金銀融通商余業之輩」よりの出金

によって賄うという措置を藩がとったことに對する「報

恩」として「推讓」したものである。

(58) 以上、「村柄取直筋聞濟達書受書留」(「全集」第三

卷、八三六—八四一頁)による。

(59) 「村柄取直五箇年賦報徳金貸付離形帳」(同前書八五四

—八六三頁)。

(60) これは尊徳が考案した無利足金貸付制度の特徴であ

り、無利足金借用によって生活が立ち直ったことに對す

る「報徳」としての意味を持たせている。そして、これ

で以て、さらに多くの窮民を救済していくことを趣旨と

している。但し、彼の案では、「報徳算加金」を差し出

させるのは、無利足金借用によって立ち直った場合であ

って、立ち直ったという証拠がない限り差し出させない

よう指示している(日光御神領仕法につき見込上申書、

日本思想大系第五二卷「二宮尊徳・大原幽学」一一七

頁)。尊徳の報徳金の運用方法は、一つの实から草木が

生じ、それが成長してさらに多くの実を結び、草木を生

じさせていくという自然の理の觀察からヒントを得てい

る。彼の農村復興仕法の原理自体も、こうした自然の理に、その根拠が置かれていた。

- (61) 弘化三年「御用向日記」(旧谷田部藩士三岡家文書、茨城県歴史館所蔵写真版による)。

- (62) 嘉永五年「台町御用留」。

- (63) 「全集」第三卷、三九五―三九七頁。

- (64) 同前書三九九―四〇二頁。

- (65) 嘉永四年一月「繩索代金勸善録」(同前書八七一頁、同前)。

- (66) 同前。
- (67) 「谷田部の歴史」一〇八一―一二二頁に、「さとしぐさ」の全文が載せられている。

- (68) 嘉永四年一月「末生小児養育勸善録」(「全集」第三卷、八六三―八七一頁)。

- (69) 嘉永四年二月五日の農民への申渡では、四人目以上出生の場合に限定されている(嘉永四年「台町御用留」)。また、「御用留」をみると、四人目以上出生の場合のみ、名主が役所に届け出ている。してみると、手当の支給対象は四人目以上の出生児に限定されていたと断定してよからう。

- (70) この雛形では、再発算加米を再び仕法資財に充てることとしているが、これは、嘉永二年に尊徳から、谷田部藩が「分度」外収入を農村復興仕法のために用いなくなっていたことを、厳しく非難されたためと思われる(これについては後述)。

- (71) 今川家文書。

- (72) 嘉永五年「谷田部献納金論達帳」(今川家文書)。

- (73) 嘉永五年「台町御用留」。

- (74) 嘉永三年「町柄取直永安論種」(今川家文書)。

- (75) 嘉永五年「台町御用留」。

- (76) 秋山高志氏前掲「谷田部藩領安政四年積穀騒動」一七二―一七四頁。

- (77) 嘉永四年「台町御用留」。

- (78) 今川家文書中に安政三年の積み穀拝借証文が数通残っている。

- (79) 三岡家文書。

- (80) 「越法発端記録草稿」(「全集」第三卷、六頁)。

- (81) 秋山氏前掲論文一七七一―一七八頁。

- (82) 同前一七六頁。

- (83) 嘉永二年五月「細川長門守様御領分荒地起返再復之趣法仕上取纏方御内話申上候下按書」(「全集」第三卷、二二四―二三八頁)。

- (84) 「田畑平均外米請払無尽蔵帳」(「全集」第三卷、五八三頁)。

- (85) 「越法発端記録草稿」(同前書一〇頁)。

- (86)・(87) (83)と同二三七頁。

- (88) 嘉永五年「御仕法御取纏方御内談御答書」(「全集」第三卷、二四一頁)。

- (89) 尊徳の「分度」論自体にも限界がなかったわけではな

い。彼の「分度」はあくまで米・金の量を基準に立てたものであるが、しかし、現実の財政は商品貨幣経済に深く巻き込まれており、米・金の価値は変動する。殊に領主財政に対しては、一〇ヶ年間にわたって量的に固定させるだけに、現実の経済変動との間に乖離が生ずることは必然であった。それが財政再建を第一義とする領主の論理と相俟って、「分度」が破棄される因となった。谷田部藩も、「分度」が守れなかった理由として、臨時出

おわりに

農村の荒廃は、農民にあっては、何よりも自らの生産・生活、かつ祖先祭祀の場である「家」、およびその存続を支える社会的基盤である「村」共同体の崩壊の危機として自覚された。この危機意識が、農民をして主体的に自力更生を図る思想的・実践的営為へと駆り立てた。そこに、勤勉・儉約を基本とする禁欲的な生活倫理思想、一定の科学性・合理性に基礎づけられた農法が生み出されることになった。それを支えたのは、自らの体験・観察に基づき、自然・人事の理を「自得」する精神であった。

尊徳の思想も、この期の農民の直面した課題に立脚しており、かつその精神構造に原基を有していた。ただ、農民の思想的・実践的営為は、あくまで自家・自村の再興・存続を目的としたもので、したがって、「家」・「村」の論理的枠内に止まっていたのに対し、尊徳は、それを基礎としつつ、かつそれを超えて社会的思想・事業様式にまで高め、体系化した。彼が目指したのは「興国安民」の実現であり、その原理として「報徳」道を提唱した（「至誠」・「勤勞」・「分度」・「推譲」を綱領とする）。

費が嵩んだことと、「豊年之年には米穀多、価賤、凶歳には米穀少、価貴、平均定数高にては、金数過不及難極」（同前二四一頁）ということをあげている。

(90) 嘉永五年「御仕法筋御取纏御治定御答書」（「全集」第二三巻、二四六―二五七頁）。先述の如く、嘉永五年に創始された小児養育手当支給制度の運用難形の中に、尊徳への報徳金返済のために毎年一〇〇両宛計上されている。

彼の思想もまた「自得」の精神に支えられており、自らの農民としての体験に基づいて、人間と自然との関係を原理的に考察することにより、「天道」と「人道」とを区別するに至っている。また、人間社会の成立・構造についても唯物論的に認識し、農民の人間としての主体的営為の意義を理論的に根拠づけた。そして、合理的な自然観・人間観・社会観に立脚して、観念的な「天道」論に基礎づけられていた幕藩制的な身分制を原理的に相対化し、人間の価値を、身分・格式を基準としてではなく、個人の能力・徳性に基づいて評価すべきことを、強く主張している。尊徳の思想は、幕藩制という所与の歴史的枠組を前提としながらも、その内部には、封建制を原理的に相対化する契機、近代的な人間観の萌芽、人間平等・ヒューマニズムの観念の成長も孕まれているのである。

彼は、「人道」論に基づいて、農民に自律的・主体的な人間としての自覚、自発的な勤労意欲を促す一方、領主に対しても、それを理論的根拠として、農民撫育の「仁政」を不断に実践すべきことを、強く要求した。彼は、農村荒廃の根因は領主の聚斂誅求・勸農の不行き届きにあり、その聚斂は、領主が自らの財政の「分度」を確立していないため、その不足を補おうとすることに基因している、と認識していた。それ故、彼の仕法は、まず領主財政に「分度」を設定して恣意的な収奪強化を規制した上で、財政再建は緊縮化によって「分度」内で行なわせ、それを超える収入は農民の生産・生活の安定、農村復興のために繰り返し「推譲」させることを原則としていた。

尊徳は、自ら領主の行財政を指導することによって、「興国安民」の理想を実現せんとした。一方、農村荒廃によって貢租収納量が減少し、深刻な財政難に陥っていた領主も、農村復興・財政再建の妙法として尊徳仕法に期待を寄せ、その施行を依頼した。だが、尊徳の仕法が現実の政治過程に組み込まれた時、農民の立場に立脚し、農民の生産・生活の安定、農村復興を第一義とする尊徳の論理と、収入増加による財政再建を第一義とする領主側の論理との矛盾が顕在化するのとは必然であった。

谷田部藩では、天保六年に尊徳仕法が発業されている。最初のうちは、藩側も尊徳の指示に従って農民の撫育・農村の復興に力を注ぎ、天保七年の凶作も凌ぐことができ、農村も回復に向かった。しかし、ある程度復興が進み、「分度」外の収入も増加してくると、藩側はその大半を自らの財政に繰り込み、財政再建の方を急ぐようになっていく。そして、それを批判し、緊縮財政による「分度」の遵守を強く要求する尊徳を、次第に忌避するようになった。結局、尊徳と谷田部藩との関係は天保一四年に断絶し、以後、仕法の内容は農民の負担増を強いるものにも大きく変質している。そのため、農民の抵抗を招き、また尊徳からも、まだ農村が完全に復興していないにもかかわらず、「分度」外の収入を藩財政に流用し、復興事業をおろそかにしていることを、「報徳」の趣旨に反するものだとして厳しく非難され、尊徳が繰り入れた桜町領の報徳金の返済をめぐる対立が生じている。

烏山藩・小田原藩における尊徳仕法においても、領主階級は次第に尊徳を忌避するようになり、結局、仕法は撤廃されている。⁽¹⁾尊徳の仕法が主として領主行政の一環として施行された点を以て、彼の思想・仕法の性格を領主階級の立場に立つ封建的・反動的なものと規定してしまいう見解も存するが、しかし、彼の思想・仕法が領主階級の立場から構想されたものならば、両者の論理の矛盾・対立が生ずることもなかったであろう。

本稿で考察してきた如く、彼の思想・仕法は徹底して農民の立場に立脚して構想されている。下館藩家老奥山小一兵衛は、尊徳の仕法の性格について、「御趣法之儀、上より開ヶ候儀御座候得ば、御万代御別条無御座、御永統之儀奉存候、下より開候得ば、万々一上之恩召被為違候節は、忽国乱れ、御趣法及崩……ハ中略……二宮氏へ一村御任被成候得ば、大道を以窮民を救、国起候事故、民は誠成者故、同人を慕て一村は不及申、外村迄も取直様、其節上々少之御不徳被為在候時は、大成過と成、国民乱れ候儀と奉存候」と指摘している。⁽²⁾すなわち、尊徳の仕法は、領主が自ら財政の緊縮化に努めて「分度」を守り、余剰で以て農民撫育・農村復興の「仁政」を不断に実践することを前提

にして、農民に対し禁欲的な自己規律、「報徳」の実践を要求するものであるだけに、領主が不断に「仁政」を実践しない限り、農民が領主の「不徳」を指弾する論理に転化することになり、「国民乱れ候」契機となる危険性を内包している、と認識しているのである。領主階級が尊徳仕法を危懼したのは、まさにこの点にあった。事実、小田原藩では、尊徳の飢饉対策・農村復興仕法が成果をあげたことによって、領民の間に尊徳の人気が高まり、「報徳様」として彼を慕う動きがわきあがったことに、かえって「国乱れ候」危機感を抱き、仕法を撤廃し、尊徳と領民との往来を禁止する措置さえとっている。⁽³⁾

尊徳の思想は、「天道」論に基礎づけられた幕藩制的な身分制の下で、農民は、自律能力のない、道徳的にも劣った受動的な存在として蔑視されてきたのに対し、「人道」論に基づいて農民の存在およびその経済営為の社会的意義を強く主張し、そのことによって、農民の心に自らの経済営為に対する信念を呼び起こし、人間としての覚醒、自律的主体性の確立を促した。それ故、彼の思想・仕法が農民に主体的に受容され、実践されたとき、強靱な生命力を発揮することになった。⁽⁴⁾

明治以降、報徳運動が広汎な民衆運動として展開した背景には、それなりの歴史的な社会条件が存したことは勿論であるが、⁽⁵⁾尊徳の死後一〇〇年以上たった現在もなお、人々をしてその実践に駆り立てている、思想としての真の生命力の根源はどこにあるかということも、我々は改めて考える必要がある。一言でいえば、それは人間の生き方についての根源的な問いかけにある、と思われる。尊徳の理論は、まさにその点を基礎に成立している。そして、そのことによって、田畑の荒廢と精神の荒廢という物心両面にわたる農村の荒廢を、克服せんとしたのである。この点こそが、尊徳のみならず、この期の多くの農民・農村指導者たちの思想的・実践的営為の特質であった。

尊徳や老農の理論の限界性を、今日の自然・社会科学の理論を基準にして指摘することはたやすい。現に、そうい

う論法で以て、彼らの理論をいともあっさり切り捨ててしまふ論者も少なからず存する。だが果たして、近代科学は、彼らが提起したところを、真に超克しているであらうか——。近代の高度な自然科学の理論・技術、社会科学の理論によって、確かに物質的貧困の問題は克服された。だが反面、精神の貧困・人間疎外の問題が深刻化しつつある。さらに、公害・自然破壊という新たな「荒廃」も生み出しているのである。⁽⁶⁾

△註▽

- (1) 鳥山藩・小田原藩における、尊徳仕法の発業と撤廢の経緯については、長倉保氏前掲「鳥山藩における文政・天保改革と報徳仕法の位置」、同「小田原藩における報徳仕法について」で、諸階級・諸階層の動向に留意しつつ的確に分析されているので、参照されたい。氏の論稿は尊徳仕法に関するものの中では出色の好論であるが、尊徳仕法の性格自体については、強烈な復古的野望に支えられたものという規定に終わっている。尊徳の仕法は、荒廢した農村の復興を目指したものである以上、確かに復古的性格を持つことになるが、しかし、領主階級が唱えるところの復古主義とは同質ではない。単に一面的に規定しきってしまったのでは、彼の思想・仕法が当該の時代状況に対して提起しているところの意味、およびその内部に孕まれている新たな契機を見落とすことになる。
- (2) 「全集」第六卷、八九八頁。
- (3) 長倉氏同前第二論文。また鳥山藩でも、「分度」の未確立、仕法の停滞に対し、農民の批判が高まっていた
- (4) (同前第一論文) 近代報徳社運動の地方拠点となった遠州地方での報徳主義の成立、および仕法の展開については、海野福寿氏のすぐれた論稿があるので、参照されたい。「遠州報徳主義の成立」(「駿台史学」第三七号、前掲「報徳仕法の展開」)。
- (5) 日本の近代化の特質と報徳運動との関係については、筆者も今後検討してみたいと思っている。
- (6) 近代科学の理論自体が人間を疎外したものになってきていることへの反省が、最近、自然科学者・社会科学者の間でも高まりつつある。社会科学の分野では、大塚久雄氏が、社会科学の理論において、人間をどのように位置づけ、扱うかという問題を、人間類型論として提起されている(「社会科学における人間」)。歴史学の分野でも、この問題提起を真剣に受けとめ、検討する必要があるのではなからうか。

△付記▽

本稿作成に当たり、貴重な史料を拝閲させていただいた山納博氏・山納武雄氏・茨城県歴史館・国立公文書館、および御教示を賜わった茨城大学名誉教授瀬谷義彦先生・茨城県立水戸第二高等学校教諭秋山高志氏に対し、末筆ながら、深甚の謝意を表したい。

なお、本稿は文部省科学研究費（総合研究A）による「近世飢饉史の総合的研究」の成果の一部である。

（一九八二年二月三日）

